麻生路郎主宰

川柳雜誌

新年特輯號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十年一月一日發行 第十二卷第一號(毎月一回發行)

詣初

住吉神社

三日　初卯、四日　初辰　福餅　神事
四日より七日迄純金、純銀の小判が當る
福引券付乘車券特賣

初旅と温泉

絶勝　新和歌浦　宴遊券
加太　發賣中

樂園　白濱湯崎温泉

卅一より正月六日迄
黒潮列車毎朝なんばより特發

龍神温泉、錦溪温泉
小川温泉、紀見温泉

大濱潮湯

大阪・なんば

南海電車

小賣商店の繁榮機關

化粧新聞

化粧新聞は化粧品、小間物、
藥品の小賣商店繁榮機關とし
て發行する化粧品業界唯一の
消費大衆に普及する機關紙

▼化粧新聞は毎月一回發行、各地の著名な化粧品店、小間物、藥店にあります。

▼化粧柳壇を設け、毎號川柳を募ります。選者　麻生路郎先生

化粧新聞社

大阪市住吉區帝塚山中四丁目

川柳雜誌 第十二卷第一號 新春特輯號目次

文苑

放送局萬歲……麻生路郎……（六）
街に住めば……高橋かほる　柴谷宰二郎畫……（三四）
武玉川二篇研究……（九）……梅本秋の魚屋　森東省二　蛭子……（八）
陶泓居雜記……食滿南北……（三六）
ペンをいたはる……佳田亂耽……（四八）
時花唄二つ……正岡蓉……（三五）
猪漫錄……西田艸樂……（四四）
炬燵XYZ……石曾根民郎……（三七）
いのしゝ漫景……岡田某人　柴谷宰二郎畫……（四四）
呑みある記……增位汀柳……（六三）
父と母を語る……久良伎　濤明　南北　周魚　信子　不浪人……（六八）

柳秀　三太郎　五花村　水府　久流美　紋太
雀郎　五健　正光　葭乃　路郎

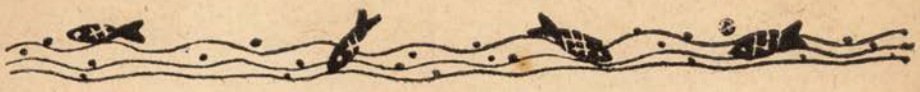
創作

乙亥元旦の句……麻生路郎（五）
近作柳樽……麻生路郎選（三）
川柳塔……麻生路郎選（三六）
日本柳壇百人撰……諸家（五〇）
粒々集……柳秀・五健（六三）
京阪神支部聯合 忘年川柳大會……九波記（五八）
一路集　寫眞……阿部閑生選（六四）
招待……前田五健選（六六）
各地柳壇……路郎・綠雨・艸樂整理（六七）
川柳二十日會……機見女・艸樂記（四七）　川柳家戸籍調……綠雨（六四）
上汐町から……汀柳（八三）　編輯の窓……山雨樓（八四）
題字……檜重　表紙繪……きよし・鳥平・雲二郎・しげを・路郎合作

東京上十條の三大郎氏新居を訪れた本社の増位(右)と寄貨川上三大郎氏

凡聖一如
元旦の
こころ知る

路郎



放送局萬歳

世の中は面白いです。春は朗らかです。

一萬圓位なか〳〵儲からず

これは冷刀の句ですが、商賣人はいつでも、たかが一萬圓と思つてゐます。位と思つてるとこが嬉しいではありませんか。ところが、位でないことを知りはじめると、せめて一萬圓と「位」が、いつしか「せめて」に變つてしまいます。せめて一萬圓、さうです、その「せめて」なんて考へはじめると、もうおしまひです。なか〳〵儲かるものですか。そこが僕たちには面白いんです。ハツキリと儲からないことが判ると頗ぶる朗らかなものです。

さうなると、この句が光りを放ちはじめます。さう思ひませんか。

子澤山僕の枕は何處へいた

これは僕とこの實況放送です。この句は實際の生活を知らない人でもなるほどゝうなづいてくれました。僕はそれでゐて人一倍子煩惱なんで

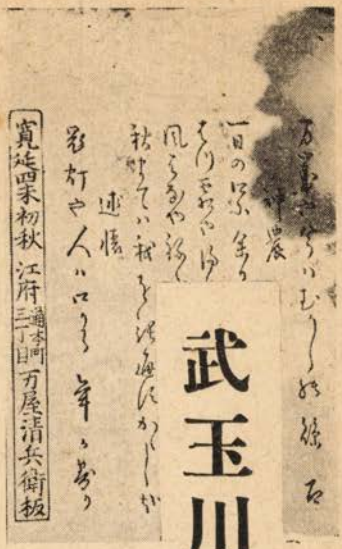
す。子どもは、私を生々と朗らかにさせるかと思へば、憂鬱そのものにさせてくれます。かと思へば彼等の一擧手一投足が何かを教へ考へさせてくれます。大いにハツプンもさせてくれます。時には眞に生甲斐あらしめてくれます。凡聖一如の世界へも遂ひやつてくれます。だからこそ僕は子どもが好きなんです。女は？酒は？物尺が違ひます。

僕は考へねばならず、書かねばならぬ境涯に置かれてゐるのですが、隣家のラヂオが私の思索を攪拌します。私のうちのレコードが私の惡文をより以上に混亂せしめます。皮肉にも私の嗣子アートが未來のクライスラーを目指して、勇敢にも日夜ヴワヰオリンから奇聲を發散せしめるではありませんか。かてゝ加へて、お父さんの放送が聞きたいの、ヴワヰオリンのソロが聞きたいのと、そこのところをうまく胡麻化して遂にラヂオの聽取者たらしめました。

子どもには勝てません。止んぬるかな、放送局萬歳です。

斯くして僕自身が老ひゆくことを知らないとは。世は一春は朗らかですね。

—路　郎—



武玉川二篇研究（九）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

（291）　撫子に火の出る鍬の夕河原

省二＝撫子は可憐な花だ。園藝品的には異種が多い。清少納言は「撫子唐のは更なり、大和のもいとめでたし」といひ、原句のは河原撫子だ。河原の小石の中に咲く。採取する際、鍬が石に當つて火を發す。「撫子の露折したる河原かな」（士朗）の嫋々と咲くのに對し、火の出るは、一箇の見つけ處であつたらう。

秋の屋＝可憐の撫子に鍬の火、少し配合が宜しくないと思ふ

東魚＝可憐な花に凄じき鍬の火を配して、夕方の一情景を描出した處が、寧ろ面白く私は思ふ。

（292）　我智慧で逃た心の放し鳥

省二＝放す者は供養のため。鳥は自ら逃出した心持ち、兩者の氣分を綜合して、句に漂ふ情がある。

秋の屋＝古川柳に類句があつたと考へる。

東魚＝自分で逃げた氣でゐるなと云ふ處に、いつそ其鳥を哀れみいつくしむ心持ちが出てゐて、誠に微笑をさそはれる句である。

（293）　質に直のせぬ寶久しき

省二＝こうなると寶の持ちくされのやうだが、わざはいも三年經てば用にたつで、もと寶なのだから、時に會ふて價値も發見されよう。老人の保存趣味を一概に排斥出來ぬ。

秋の屋＝何處の家にも能くある事である。

東魚＝秋の家に大事にしてゐるものなど多く此の仲間である。失笑を禁し得ない。

（294）　石をおろせはゆれる四阿

省　二＝簡素に建てられた四阿丈けに、石を下ろせば震れるなど、興がある。

秋の屋＝この石は何處から下すのであらう。亦何の石であらう。

東　魚＝庭師が庭の手入れに、新に奇石でも持込んで、亭の近くにズシリと下ろしたのであらう。

（295）　礫を拾ふうちに小舅

秋の屋＝婚禮の夜に村内の若者等が來て、其家へ礫を打附けるので、これを聟か嫁の小舅が出て追拂ふのである。

東　魚＝礫を拾ふて打付けやうといふ仲間の中に、豈圖らんや小舅が混つてゐたので、複雜な戀の爭ひの一面を描いたのではないか。

省　二＝礫を投げるのは、現に鮮内では行はれて居る。つまる處、祝意を表する風習なのであるが、小舅の交るのは前説の闘爭を思はすべきものである。

（296）　重着の數をあらそふ冬籠

秋の屋＝子供同志などが、能くする事だ。

東　魚＝成程子供の時襟の數を數へ合つた事を思出した。一二、三德、福とか何んとかいつたやうに思ふ。

省　二＝爭ふを輕るく解したならば、子供同士でなくて、大人でもよくはなからうか。殊に「冬籠」の感じからでも、私は弱體のゆゑもあるが、冬は七、八枚は重ねる。人から比較される事がある。

（297）　放下遣ひの來ると見渡す

秋の屋＝大名屋敷の物見にてもある歟。

東　魚＝放下師が、さて商賣に掛らうといふ適當な場所へ來て、一渡りすツと見渡す趣であらう。

省　二＝人集めの關係上、やる事だ。

（298）　合羽の下の痒い志賀越

秋の屋＝旅人の合羽の下から、花見虱が這出すので、志賀の山越は花の名所である。

東　魚＝暖い花の雨の日を思はれる。（合羽は道中合羽で必しも雨の時のみに着はせぬが）

省　二＝「滋賀里赤塚より登り、峠を越、山中里、白川村を經て京師に出る、これを山中越といふ」（東海道名所圖會）

（299）　妻の小袖の盡る七種

省　二＝七種は俗にいふ七日正月。それ迄は小袖を着て粧つてゐたが、「七種がすぎては禮も拍子ぬけ」で、七種後はお正月のあと片附けをせねばならなくなる。

秋の屋＝松の内は日々小袖をきたが、既に松を撤去した七種後には、平服になるといふのであらう。

東　魚＝前説につきてゐる。

（300）　面白そふに振廻す幣

省　二＝塲合が句面では判然せぬが、例へば、神主が大きな

艶を振廻したりするのは、大眞面目である丈けに、興もある。

――「面白そふに」とあるから他の場合かも知れぬ。

秋の屋＝神輿の御旅所などの光景である。

東　魚＝「面白さふ――振廻す」、神主ではないやうに思はれる。秋翁説の如きか。

（301）

赤子の顔の似ても水物

省　二＝水物とは永續するか、どうか判らぬ事の謂。赤ン坊の顔がよく似てゐると云つても、成長したら、どう變化するか水物だ。

秋の屋＝「水物」とは、自然の運に任せるより外無きもののことで、美貌の母親に似てゐる赤子も、成長した後に到つては醜悪になるかも知れぬといふのである。

東　魚＝前説に盡きる。面白い句である。

（302）

夕貌か宿取人の眼にとまり

省　二＝源氏物語を材とせしもの、謠に「夕顔」がある。古川柳には、「五條には夕顔らしい宿もなし」。「光る君糸瓜の宿はぶらつかず」。「夕顔をほめれば恥て宿かさず」。「夕顔を御報謝といふやうな公家」。

秋の屋＝夕顔といふと直に源氏を聯想するが、これは鄙の木賃宿などの光景である。

東　魚＝秋翁のお説の方らしく思ふ。

省　二＝勿論そうも解れはするが、前に葵の巻を咏むだ句もあり、以て源氏の句例としても通用する。

（303）

遠い思案に蚊屋を出て居

秋の屋＝蚊屋を出てゐるのは、思慮が深いので、これが女であるならば、如何にも頼しい。

東　魚＝まだ歸らぬ夫を待ちわびて、行末を思て煩つてゐるのではなからうか。蚊屋にも入らぬ處に、哀さが深いやうに思ふ。

省　二＝これも句面では場合が判然しない。下七により遠き慮りである事は、よく表現されて居る。

（304）

笈摺を縫ふ母の野心

秋の屋＝年老いたる母が遊山半分に、四國遍路でもしやうといふので、それを野心といつたのである。

東　魚＝野心は「のごころ」と訓する。「野に遊ばんと思ふ心又鷹の人になつかぬこと」と、俳諧辭典は解いてゐる。俚言集覽にも「荒鷹不馴人是云野心」などと見える。句意は前説の通りであらう。

省　二＝四國遍路は、かなり遊山氣分の失つたものであるを先年札所に滯在してゐて、色々と知つた。辭典に「野心、山野を慕ひて遊びに行きたく思ふ心。花の頃は野心附かぬ人もなし（毛吹草）」と。

（305）

憎い女を響る薙月

秋の屋＝「薙月」は「薙刀」の誤寫で、武術の試合に負けた男が

薙刀を遺ふ女の業を譽るのである。

東　魚＝原本明に「刀」である。誤植であつたらう。句意は前說に贊。

省　二＝下宿屋の娘さん、武德殿で薙刀を使つては、相手をやり込める。評判だつた。美しくもあつた。「憎い女」も亦美しい女であつたらう。

（306）**道成寺人のかけ出す雲か出る**

秋の屋＝妬婦が大蛇になる程であるから、怪しい黑雲が起つたであらう。

東　魚＝道成寺を唱ふと雨が降ると云ふ傳說からの句。（川柳江戸砂子參照）

省　二＝鄕里では、雨乞に長唄の道成寺を、お寺で踊つたりした。

（307）**搽すます殿のあけほの**

省　二＝この句丈けでは判然とせぬ。殿は御殿即ち屋敷の謂かと思ふ。

秋の屋＝登城する日の早旦で、薄暗いうちから起きて髮を結ふ。

東　魚＝殿は屋形とか屋敷とか云ふ意味であらう。仙臺公の朝歸りのやうな氣もされるが如何であらう。

（308）**下前にさゝ浪よせる志賀の浦**

省　二＝「大津の浦より辛崎及下坂本比叡辻の邊までの浦をいふ。さざ波やしがの浦風いかばかり、こころのうちの涼しからん。右衛門督公任」（東海道名所圖會）。下前にさゝ浪のよせる事も涼しかるらんである。下前とさゝ浪と技巧上にも認めらるるものがひそむ。

秋の屋＝着物の上前を端折つて、志賀の浦を散策するので、ささ浪が能く利いてゐる。

東　魚＝すると片褄だけ端打つてゐる姿。成程其の方が情味があるやうである。

（309）**きり〳〵す踊の足を間違せ**

省　二＝キリヤリスを踏み殺してはと、踊の足拍子が狂ふ。野趣野興豐かである。

秋の屋＝東京音頭で踊るのでは蟋蟀などの飛出す氣遣ひはない

東　魚＝技巧に過ぎるやうにも思ふ。

（310）**手數か入て返る羽衣**

省　二＝この手數がなかつたなら、羽夜傳說が成りたたぬ。「羽衣をてんてん舞でとり返し」。

秋の屋＝伯良は罪な男である。

東　魚＝諧謔味が面白い。

（311）**參宮ゞおもひ立にも身を忍ひ**

秋の屋＝昔の拔參の小僧などは、主家を忍び出たのである。

東　魚＝前句をうけて、この「身を忍び」がきいてゐる句なのであらうと想像される。

省　二＝小僧は忍出たもの、娘さんなどは、親が認めてゐたもの、それは費用事情からだ。「おもひ立」から「身を忍び」などは、俳諧手法。

近作柳樽

路郎選

行く人もない道が沿ふ滿員車　大阪　大門
二通話のしまひに汽車の音這入り　同
如才ないあるじに下駄を揃えられ　同
支拂ふて幹事の財布へこむなり　同

霧の幻想

嬌笑のほのかな霧となる街よ　螢ケ池　縷紅
冬ちかき吐息は白く眼にかへる　同
秋蘭けし山はわたしを呼びもどす　同

Y君やまひ篤く

涙のはゝに酸素の泡がふくれくる　同
つくねんと空の青さの豆たゝき　長野　有爲郎

けちくさく縄を切られし炭俵　同

山はもみぢよ大根の葉が流れてゐ　同

かまきりのむくろの上の霜柱　奈良　翠峯

土踏ずだけが眞白き一人者　同

救はれたやうに湯上げの中にゐる　同

病床へ今日も冷たい音ばかり　渡島　康正

落莫の背へ一つの栗のイガ　同

ソビエット機械が光るばかりにて　同

猿の檻煤ころ〳〵ところがつて　大阪　稚仙

口論の指へ煙草の火が迫る　同

木犀の香り女が先に賞め　同

人夫賃お釣りの如く吳れました　八東　彬外人

ほつとして野良着の腕は解いたが　同

凶作へ案山子慰めやうもなく　同

奥座敷店は睡いと言ふてます　神戸　朝雨

思惑のある雑草へ枕をうち　同

街の紳士へ聞タクの急停車　同

寂しければ寂しき人を訪ふてみん　大阪　葉平

月に尿す歸らねばならぬ家あり　同

編棒の器用も失職哀れなり　長野　柳兒

雨の宿値切つた土產あらためる　同

ビル街で使はれてゐて歌をよみ　神戸　九葉

肉親の人のよいのに腹が立ち　同

苦勞した話に偉く見えてくる　今治　心府

何かこう忘れたやうな故鄉の畵　同

人生の凡てを戀になげ出して　大阪　あや美

さもしさは夢で女に逢つて居る　同

草臥れて横になるにも氣をつかひ　今治　小松

十月十八日結婚す

秋風の中へぽかんと二人づれ　同

雜談へ苦り切つてる專務なり　大阪　素月

五時からは子供にかへる小店員　同

二拾圓なにがし拂ふ息がくる　盤ケ池　靜太

秋はねひとのおなかゞすいてゐた　同

欠伸さへ自棄にきこゆれ凶作地　八東　天痴地

さて地球ミリタリズムの重量感　同

誕生だ元氣だ俺も酒にする　愛媛　宵明

ポケットの中の拳の意氣地なし　同

歳暮の先を夫婦で指を折り　大阪　彩泡

トラックで運ぶ牛肉無氣味なり　同

保險屋になつて久濶謝しに來る　愛媛　孤鶴

いくらでも入るよ骨壺箸で突き　同

闘タクで大福を食ふ負競馬　東京　佐保蘭

芝居見て居れば飯などいらぬ母　同

愛してる事をかくすに馴れて來た　今治　一風

就職

逢ふ程の女に縁がありさうだ　同

クリスマス長屋に住んだ紙細工　大阪　天國

雨コートさげて淋しい唄がすき　同

でで虫よわたしの家がほしいです　蛍ケ池　流之介

長廊下苛立つこゝろ抑へましよ　同

長男が船に遲れた佛間の灯　高知　青雨

秋一夜足の冷たい友と寢る　同

臨檢の威嚴オーバの襟を立て　京都　竹雅

居殘りの咳へ返事のワンタン屋　同

切れ〳〵に破いた手紙へ疑はれ　今治　紫陽

不具の子を持つ瞳に不具の子が多し　同

新高登山

頂上の日之出日本の强さ知る　盛中　耕郎

十月初旬臺中

浴衣二、三、四、五、六人の宵の街　同

誹られてゐるを知つての嘘なり　大阪　利生

花名刺問はれぬ先にくれるなり　同

青空をうつして蟹の泡くする　同　水客

陸戰隊上陸

嬉しさは水兵さんの肩の幅　同

タイヤーに附いても廻る散り紅葉　松山　耕一路

立て詰めの合はぬ際間が冬にする　同

眞心へかいた眉毛の動かない　今治　十靜

朝の膳二つ並んだむちやわんの　同
肩が凝るだらうと言つて手傳はず　神戸　吉左右
しめきつた部屋ですき燒いゝ匂ひ　同
ありふれた戀が嫌ひで不幸な戀　大阪　節子
ある時はチョークの色の淋しすぎ　同
堤から影流してる頬冠り　名古屋　嵜喜固蘊
醫者の眼は奇蹟のないを知つて居る　同
良い聲で屑屋が拔ける路次の晝　今治　輝親
サラリー日押されて歩く面白さ　同
夕飯の子等の間に割つて入り　神戸　明坊
齒切れよき言葉有閑マダムにて　同
爆音へ小僧の下駄に片ちんば　神戸　木履
誓文へ豚兒の祝買ひに出る　同
肩の手に叔父の若さをフト感じ　大阪　木圭
月見草工夫の通ふ路があり　同
水害に逢つたと菊が咲きました　同　靜波
机上論こんなところで食ひちがひ　同

皺を氣にして朝湯から歸つて來　嘉知　梨生

土産屋に改正をせぬ時間表　同

かるもちん四粒かない夢となる　廣島　呂烈

ある女におくる

惡鬼となりゆびくねりつゝまゆえがく　同

奥さんによする挨拶の膝頭　蟹ケ池　巷巴

蒼白き顏がすらりと日向ぼこ　同

バツト喫つて歩けば百姓に睨まれる　島根　春朗

オゾでいゝ痩をキヤンプはして戻り　同

夕食へ長屋住いの氣を許し　神戸　久米雄

旅に出る友と歩けば夕燒ける　同

さぶとんの上で意見をきつうきゝ　洞内　不路子

とうふやのりんにあはてゝ立ち上り　同

くもといてくものこゝろとなつてゐる　蟹ケ池　松雨

秋ひそとタバコの煙の消ゆる果　同

手と足と首がすつかり疲れて來　松江　祥月

不景氣な顏にあられが降つて來た　同

あをむけにねて三味線のきけるとこ　今治　小樓

小松兄結婚

新家庭らしくならんだ下駄二足　兵庫　同

農繁期ひかれる牛は無表情　同　天秋

戀に似た心で秋の汽車を降り　大阪　白葉

顏のつやどこまで嘘を云ふ人ぞ　同

御馳走へ話上手な男なり　泉州　華坊

騷がせた患者あけの日寢てるなり　同

院長に附添ふ看護婦無表情　加賀　義風子

盃にしくむまれな金廻り　同

また籠る雪を眺めて默したり　京都　白英

打算を噛つて喰ひ兼ねてゐる　同

肥滿症案外口の輕いこと　熊玉　いね三

横になる母の衰え瞳に立つ日　同

社長さん厚唇で封をする　高知　藝花園

處女性を失つた日の顏の艶　同

履歴書がいらず親父の社に務め

窓閉めて冬のベットとなりにけり　　蟹ヶ池　青鬼

穏しく布團被むるを氣遣はれ　　同　逸行

白足袋の裏を見せてる好い電話　　松江　同

爪彈きを湖に聞かせた物思ひ　　神戸　規堂

妻の名で稅金がくる晝の酒　　大阪　寒草

座布團の柄入亂れ通夜の朝　　同　春帆

辨當を包む新聞紙が觸り　　廣島　同

女學生に惚れる戀愛第一課　　東京　素描

玄關を上れば馬鹿と言ふ鸚鵡　　同

俺の年刹那主義だと言はすなり

月見に君が黑髪の匂ひ

風の中に包まれて金の思案かな

料理長小松君の結婚を祝して

庖丁を男に委す二人仲　　今治　史郎

感情を金で割切る金を持ち　　同

レコードをかけて二階はだんまりや　　石川　しとし

澄めば水底茶碗のかけを見せ　　同

親知らぬこほろぎなれば死にやすし　　盛ケ池　浮鬼

膳に寄る蜂の二匹となつてゐる　　同　同

臨時工指折數へる事ばかり　　島根　琴月

五度入いつた事が自慢な風呂屋の子　　同

辻占がすつかり賣れたいわし雲　　神戸　和郎

借金の抵當にはならぬ子澤山　　同　同

あはれなる女の朝の伊達卷や　　同　勝太郎

あぜ道へかへるが一つとぼけて居　　同　同

金持の家の高さを見てゐたり　　大阪　末廣艸

條件の一つ女學校出とあり　　同　同

寶石の指細過ぎて緣遠し　　同　芳一

氣兼する程の茶代へ見送られ　　同　同

日歸りの車へ暮れる東海道　　名古屋　呂香

淋しさを引きずる樣に影法師　　同　同

實の取れぬ稻田の土の冷え切つて　　今治　比呂史

傷心へ喰入る樣な棄雞頭　　同　同

飲めるだけ飲まう俺には親がある　　松江　四朗

日參の妓は戀でないらしい　同
船世帶今日は神戸の水で磨き　高知　稲實
敗戰の夜團長は髯を剃り　同
ペコ〳〵と頭を下げるのが取柄　札幌　非常兒
首丈けになつても人形同じ顏　同
秋の夜に金齒覗かす長煙管　東京　トミヤ改不二號
蔦の聲聞いて帝都の住ひなり　同
信じてた女給が墮胎したと聞き　大阪　美代坊
耳掃除其の落着に金が無し　同
退屈が生んだ多忙とは知らず　松江　野生
飛んで來てチップが慾しい女なり　同
色男首をちゞめて叩かれる　神戸　スタート
食つてゐるみんなのあごのおもしろさ　同
零落の位牌ばかりの數が增え　埼玉　海中金
殘業を信じた妻にいたわられ　同
瓦斯タンクその邊で兒が錢おとし　京都　善司
八ツ折りの急げば暮れの音となり　同

登記所へ父の姿をみなほしぬ　　鶴ヶ池　志世子

厭世の心にふとも母の顔　　同　紘靖

倖せはいつのことだか東ね顔　　名古屋　同

就職のあるまで女待つと云ふ　　愛媛　尼花

云ふ事があり婿養子冷酒をのみ　　同

藥瓶さげた姿を犬がかぎ　　大阪　珍虎太夫

雨に訪ふ傘の中から聲のあり　　同

雨籠り心定めて床の中　　同　不美子

諦めへカサ〳〵落葉走るなり　　同

水死人鰯のやうに並べられ　　同　光

母病めばとろ〳〵夢の多い秋　　同　新市街

殘飯は景をほめてる譯でなし　　同　小三

理想だけ高し都へ走る汽車　　同　立帆

風丰の聖者に似たる乞食來る　　名古屋　令風

子の守りに落ちつきもなしいゝ天氣　　愛知　珍景

咳をする人眞直に露路を出る　　今治　伶人

喫茶店丈けで附合ふ友が出來

精悍な若い將校の頃の紐　大阪　いの助

柿の村からあこがれの町に嫁き　同　菊路

亡き父の額の下なる雜煮餅　名古屋　鳳石

百姓におしい頭で埋れて居　廣島　蛙庵

あこがれがオールドミスにしてしまひ　神戸　楚堂

生活にそむく詩心よすねをだく　今宮　都留逸

お針ッ子禮奉公で胸を病み　大阪　世間音

心境の變化ネクタイかへて出る　同　雅星

掛取にポーズも同じまねき猫　同　玉格子

晩酌の顏へ寄附帳持つて來る　同　佐津美

ハイキングいつちしまいに和服の娘　同　皐山

ハイキングぐつたりとしてバスに搖れ　同　花鳥

一切を忘れて保姆は手を叩き　京都　丁路

東西屋又トラックにさへぎらる　松山　靈子

空想の時間もこめた早寢なり　廣島　彌生

あきらめた姿になつて燐寸消え　金澤　綠水

花屋開店

花と寢て花の個性に驚きぬ　大阪　夏光

十二月火鉢の火が消へてゐる　同　曼陀羅華

ぬくいもの食へとてくれる苦勞人　同　天遊

年取つた兒が餓になる悲哀　高砂　柳夢

兒を抱いてゐる兵子帶のほどけかけ　明石　秀太

旅役者おしろいやけへかゝる雨　奈良　双亭

立讀は背へ本屋の目を感じ　大阪　琴泉

こな藥こぼさず呑んで物足りず　同　陸奥夫

災禍

縋る樹が命の綱であつたこと　同　峯雪

若人の意氣は大地へ靴の音　今治　禧純

干定規希望高まる夜の机　奈良　葉魚

子を連れて酒飲む人をとがめたし　大阪　泊童

猫二匹稲荷の屋根で日向ぼこ　同　八十二

復興だそれ勞働だ紹介所　同　正明

大根をたけと主人はよく肥り　福井　旅人

賣れぬ日を出て行く主人見送りぬ　今治　流汀

待つてゐる日向とんぼ眼の動き　神戸　忠司

幻をあり〳〵と見る秋の峯　松江　粹夢

決心へ餘りに淋し母の顏　廣島　芳泉

月天心スラムはやつと寢靜まり　岐阜　京糸

片戀と知つて淋しい灰馴し　東京　史葉

遠足の前夜胡麻煎る音へ寢る　奈良　青柿

代書人口より先に筆を持ち　名古屋　長樂

奈良の鹿丁稚姿をなめてゐる　大阪　歌都路

結婚のシーズン娘たすきがけ　同　玉芳

招待祭へ好きな着物のしつけ糸　同　路人

ひげ剃の双音三十をわびしませ　廣島　呂律

卷狐二階迄乘るエレベーター　京都　正祐

姉に似た看護婦さんの泣きほくろ　　六朗

殘虚に泣くべく床へ潜込み　三重　紅桃子

お馴染が父と一緒へおじぎする　尼崎　天橋改め　正柳

闘爭心理だけへ落葉の音すなり　愛媛　汴人

左の手ばかり焦げてる助手の夏　大阪　手風琴

デパートへ勧めるらしい所で降り　伊紗緒（岡）

體重を計る手拭たのまれる　三男坊（岡）

ほめてやれば女一足後すざり　東洋（今治）

小包の着物へ母の匂ふなり　天風（神戸）

嫁ぐ氣へ心殘りな淡い戀　都子（廣島）

ふるさとが繪になつてくる汽車の窓　山川兒（松江）

酒のめば吾が子をほめる父のくせ　よし次

缺勤へ昨夜の酒が殘つてゐ　吉郎（朝鮮）

滿員車松茸高く上げて持ち　水煙（大阪）

無禮講と知つても醉へぬ地位に居る　遊星（岡）

秋風に眞面目な男汗を見せ　玉葉（岡）

本社新春川柳大會

お芽出度う御座います。なごやかな初句會を催したいと思ひますから、川柳家（略事）はもとより川柳を始めて作つてみやうと思ふ方々も誘合せて御出席下さい。

日時　昭和十年一月六日（六時半）

會場　道頓堀俱樂部　大阪市南區日本橋南詰東入　電話南二七四八番

兼題　「買初」三句

講演　葉牡丹の影　廣路生郎選

句と草木　西田艸樂

會費　金三十錢（鉛筆持參）

呈　本社選者短冊を出席者全部呈上（寫眞撮影）

秀山　鮎美　喜六　浦由　新水　與三郎　史呂　九波

父と母を語る

新春の讀物として「貧下の最父並びに母堂に就いて」（職業、結婚、エピソード等）著名川柳家に執筆を煩しました。（編輯局）

――順序不同――

父は幕臣

阪井久良伎

貴間を傳統を尊重する日本の川柳家として敬意を拂ひ升。父は幕臣にしてペルリ來船の際下田奉行配下と成り、後轉じて金川奉行配下と成り、横濱港地形整理に從ひ後横濱税關副長と成り大藏省官吏に終る。漢詩に長じ川柳を作くる年六十一母は山澤檢校―却弓日本一―の三女、江戸久松町に生る、父に嫁し二男七女あり（久良伎其二男、年八十三

村角力の大關

大島濤明

筑前の片田舎、昔は化物さへ出た山の中で農業をやつてゐた父は貧乏ではあつたが村では物識りの方であつた、で村長や區長などに擧げられた。田舎では富限者が巾を利かし貧乏者は頭が上らぬが、その中に役柄を持ち村を押へてゐたらしい。若い時は力が強かつたので村角力の大關で各所に歩いて角力を取り家業そこのけであつた、そんなことが一つは物識りとなつた理由かも知れぬ。

お母さんは首ふり

食滿南北

私のお父さん、それは非常な極道だつたから私の十一二の時北の新地の可なり大きなお茶屋の丁度段梯子の下にまつてゐたら美くしい藝者とお父さんが降りて來たことを覺えてゐる

お母さんは中村小陣といふ人氣のあつた役者の演出による所謂首ふりといふのに出て三浦の助をやつた時の繪やビラが出て來た。

この二人の中に出來た私は何とマア父母に孝行な子であることよ

父と遊び

村田周魚

私の道樂に少しも文句を云つた事のない父はもう居ませんが遊びの法則とでも申しませうか晩餐の折にちよい〳〵云ひました事は「一文無しで友達を誘ふナー」と云ふ事でした。何事でも誘つた方が錢を出すのが遊びの道だといふ事です。誘ひ出されて之があべこべの多い今日父が生きて居たら何んと申しますか此言葉を聞かれないのが心惜しく思ひます。

嘘の嫌ひな父

井上信子

父は毛利の家臣で一分一厘も間違つたことが嫌ひな四角四面の嚴重な人、一つ物を置くにも一分のゆがみもゆるしません父の室は常に掃き清められ端然となつて居るので留守に一寸何かの用事で入つても歸宅後直ぐ感付かれて叱られました父から狸に化かされた話をいつも聞きましたがあの嘘のきらひな人の口から出たのですから、どうしても信じなければなるまいと思つて居ります。

母はこの氣むづかしい人に仕へてともすれば冷やかになり勝ちの家庭をいつも和やかに溫めてくれました。娘時代の私が城下町の芝居を友達と共に見に行たがるのを母も一緒に父に嘆願して行かせて貰ひました。暗い夜道が淋しからうと、芝居のはねる頃には必迎へに來てくれる母でした。

父は近衞騎兵

小林不浪人

物心のついた頃醫者殿の家――勿論祖父の代まで漢法醫だつた家――に貰はれた僕であるが、父―養父―は醫者になれず寢喰ひをしてゐた。否、有る財産を賣つて雜魚採りばかりやつて日を送つて居つたと云つた方が妥當かも知れない。然し田舍には珍しい美髭を蓄へた所謂村夫子で、而も無日であつたが何となく親しみがあつた。若い頃、近衞騎兵だつた記念の寫眞で見ると、肋骨の飾りのある騎兵服を著用に及んで、見るからに頼母しい格恰をしてゐる。實物だつて顔の色あくまで黑かつたが、僕の目から見ても男性的なよい男であつた。

母―養母―は僕が貰はれて ッてから數年後に女の兒を生んだ。その女の兒は今では婿さんを貰つて二人の兒の親になつてゐるが、二十年ばかり前のこと、父が亡くなつてから母と僕との感情がしつくりしなかつたので、家を相續すべき僕が光田寺村と云ふ片田舍の生活を清算して十五年前に妻と一人娘を連れて家出を決行したのである。そんなことで僕は青森に住む身となつたが、母は幸福に暮してゐる。

強い父か弱い父か

長崎柳秀

十一歳の三月尋常小學四年の課程を終へ島の内育英高等小學校へ通ふ事になりました。其頃の一ト日何かのことで父は贈物の包みへ御餞別と書けとのこと持つて生れた能筆(?)下地は好きなり御意はよしと子供心にも嬉しう書けました　それに父の眉は逆立ち怒氣滿面朱をそゝぐが如し大喝一聲…バカ習字手本を持つて來い……恐る〳〵尋常四年の手本を出せばこはいかに「セン別」の「セン」の字は自分の書いた金扁に非らずまこうやうも無くはつきり食へん如何ともすべからず唯叩

かれるくわさ御免なさい〳〵と逃げ廻つたが幸に母のとりなしでやつと夕飯に有りつけました。

歳月は流れ〳〵醫學校を卒業した翌年廿四歳の春でした。一勉強を思ひ立ち上京することになりました。何分初めて親の膝下を離れることであれば嚴しい父乍らも態々梅田驛まで來て呉れました。汽笛一聲今や動き出すとたん御機嫌よろしくも口の内……ふつと父の面を見れば眼には尊い露が光つて居りました。

皆さん父は果して強い人なんでしようかそれとも弱い人であつたのでしようか。

オヤヂのきせる

川上三太郎

僕の父は烟管を拵らへる職人で江戸ッ子。背中に江柄の平太がツヅミを踏づけてゐる文身をしてゐて無筆だ。飲む打つ買ふの放蕩兒であつたが母が嫁入つてからピタリと止め、文身を恥じて「何うか死ぬまでには自分の地所で自分の家で自分の風呂へ入つて死にたい」と言つては夫婦で夢のやうな——と笑つた。然し五十年後にそれを實現したオヤヂである散々苦勞をしたが後には他から「名人」と稱された程のきせるを打つた當時帝室技藝委員であつた勝野勝珉、香川勝廣、豐川克長等といふ名金彫家も「きせる」は川上のきせるでなければ決して彫らなかつた。今でもオヤヂの「きせる」は古道具ではなく骨董である。そして明治四十四年僕が支那にゐる時死んだ。オヤヂは僕が子供の時「こんなヒヨウタンみたいなアタマをしてゐる奴は何になるかわからねエ」とよく言つたさうだ。「でもアタマの大きなのは利巧だつて言ひますよ」と母が應へると「何にしても困つたもんだ」と腕を組んださうである。

美人といふ評判

大谷五花村

母は僕の九歳の時に死んだ、年は廿七だつたといふ事だ、大分早い子持ちであつたらしい。地方では美人といふ評判、二十五六の時の寫眞を見ると眉の長い鼻の高いチヨイと見られる顏だ、が然し其れは一部の地方的、現に生きてる其當時の友達の話である。

父は僕の二十四歳の時に死んだ。一兵卒として日清日露の兩戰役に出征して居る眉の濃い熊の樣な髯だらけの男だつた極めて無口、酒量はチヨイと量り知り難い酒豪であつた。あんまり笑はず、唄をうたつた事を聞かなかつた。恬淡にして怒つた事もなかつた樣で、僕自身も叱られた事がなかつた唯一度大政官札といふ紙幣を鋏で切つた時丈け馬鹿な奴なアと小言を喰つた事を子供心に覺えてゐる職業は酒を造つてゐた。

俳人眉山

岸本水府

私の父は眉山といつて俳句を一寸やつてゐました。父の持つてゐた短册に「迎へけりまづ初とし の朝熊山」といふのがあつたり、父が國を出る時友人から貰つ

たといふ「この里の味も忘れなあさり汁」また私の生れた時友人が贈つてくれたと云ふ「行末は艦も浮べむ春の水」など今の私として父の友だちの句ばかり覺えてゐますが、父の句は一句も知りません。

父と櫻正宗

安川久流美

廿五年前に死別したゲン父の事のみ書く、嘉永生れで、いま生きて居れば七十三？と思ふ。死ぬ前の年、當時十七才の私と北海道から金澤へ歸る途中、東北線で私にジンジャエールを一本、自分は櫻正宗の四合瓶を一本買ふて「日光は酒が高いから……」と理屈をつけてゐた迄はよかつたが、どうしたはづみだつたか酒瓶をバシャンと落してみぢんに割れ遂に一滴も呑めなかつた。その時「吁ッ」とがつかりした父の顏は……思ひ出しても氣の毒。

父に就て

榻元紋太

母は丈夫でまだゐて呉れますが父は私の十六の歳に亡くなりました。私は餘り聰明でなかつたと見えて父の事に就て多くを知りません。斷續的に私の頭に殘つてゐる記憶と母の話や近親の者の思ひ出話を綜合して作り上げてゐる私の父の面影や性格は「人間は善良であるが運は餘りよくなかつた、笑ひ顏の少い併し餘り怒りもしない」といふ風な人だつたらしく、今活きてゐて呉れてもきつと親しめるだらうなど思つたりします。この頃父の歿年に近づいて來た私は自分では若いつもりでゐても他人にはよつぽどの老人に見えるだらうと、自分で自分を何倍か年寄に扱ふやうになりました。

紙魚に似た父

前田雀郎

私の親父は十才で小學校の代用教員みたいなものをやらされたさうです。そんな人ですから生れつき本が好きで朝から晩まで本ばかり讀んでゐます。かういふ人が總領の順禄で商人になつたのですものの家を潰すのも當然です。それでも本ばかり讀んでゐます。私が子供の頃は本ならどんな事をネダつても買つて呉れました今では逆に私に本を買はせ、隣居で相變らず本ばかり讀んでゐます。内氣な人ですから本を讀んでどうしやうといふのでもなくたゞそれだけを樂んでゐます年は元治元年生れの子の七十二才。

兩親と私

前田五健

少年の頃

母「あれでは困る少し叱つてやりなさい勉強を少しもしません」

父「マアーイ、雀捕りでも名人になればそれでイイ」

中學生の頃

母「航海學校ナテ飛んでもないそんな危ない學校へはやれません、オマヘは前田家の一人息子です」

父「ウーン考へものじや」

間もなく繪を・劍を仕込まれ、父の詩・畫碁の友南隆寺の禪和尚の河童の計略にかゝつてヂリ〳〵と炙を軟かく仕込ま

れる、

青春の頃

母「近頃夜遊びする樣だが早う身を固めた方がィゝと思ふ、親戚のアノ娘がョイと思ひます、第一顏も十人並だし、何かにつけて便利でもあるし」

父「ソーモ行かん、本人の自由意志に任せておけ、少々の道樂は人間學になる」

母「ソレダカラ役に立ちません、少し子供氣をつけて力を入れてやらな」

父「女と男とは違ふ」

斯くて孝行をしたい時には親は亡しの通り父は五十七才、母は六十三才で松山の妙樂寺に眠る、傳記を書けば母は平凡なる慈母、父は北水任梅軒晨樂堂を號して書畫好きの古官吏、貧乏と共に多少の道樂氣ありと勿體ないがこう書く、今生きておればと思ふ事は人並以上に多く、私にとってはエライ兩親であつた。

私の親達

塚越正光

親を七人持つたなんて言つてもみなさんは本當にしないでせうが、事實なのだから仕方がないのです。といふのが斯ういふ譯なのです。まづ父親の方から申上げるとほんとうの父、戸籍上の父、育てゝ吳れた父、母親の方はほんとうの母、戸籍上の母、育てゝ吳れた母と茲までは父の場合と同じですが、それから先に後の母があるのです。

でこのほんとうの父母といふのは、名前も顏も知りませんが、話にだけ聞いてゐるのですが、四十餘年經つても名乘つて出て來ないところを見ると、恐らく生きてはゐまいと思ふのですが、話の工合ではひよつとすると母の方はたつしやで居さうな氣もしますが、先方から名乘つて吳れない限りは逢へ相もありません、戸籍上の父母は姓名を知つてゐるといふだけのことで、現在何處に何うしてゐるか不明です、一時探して見ましたがこれは徒勞に終りました。

さて育ての父母ですが、塚越といふ姓はこの父母の姓なのです、深い事情の下にほんとうの父も母も知らずに、つまり親知らずで蘖の上から他家へ金をつけてやられた兒が私なのです、が然し幸ひにも私を貰つて吳れた父や母は、貰兒殺しではありませんでしたばかりではなく、最初から自分達のあととりと定めて戸籍にも養嗣子として入籍して吳れたのでしただから私のやうな親不孝な子でも終始變ることなく可愛がつて吳れました、母は十七の時亡くなりまして後の母が出來ましたが、この母も決して惡い人ではありませんが、私の氣のせいか物足りないところはありました。この母親が柳友諸君少數の……が御存知の母なのです、三十年餘親しんだ父は十年前に、二十數年親しんだ母は三年前にいづれも此世を去りまして、今はもう父母のない私となつたのですが、私はこの三人の父、四人の母を持つたことが私の不幸だとは思ひませんが、私の身の上を御存知の方はふしあはせな一人に數へて下さるやうです。

私としても生きてゐるらしいほんとうの母には時々逢つて見たいなと思ひます、

長谷川伸さんの瞼の母と再會の記事やそれと同じやうな記事を見ると、當分はそれがつゞきます、何んなつまらない小說芝居、映畫、其他の演藝で母子がめぐり合ふ場面がありさへすれば、ひとりでに涙が止度なく流れるとこを見ると、生母に逢ひたいといふ念願は絕えず心の隅にわだかまつてゐるのかも知れません。

父と砂糖

麻生葭乃

母は私の六才の歲に亡くなりました。私と二人きりになつた父は、三百六十五日粗末な机の上で、A＋Bはの鉛筆を走らせる外に、時々私を連れて芝居や寄席や、川柳會へ行く事を樂しみにしてゐました。父は人に對して、赤裸々な意志表示をせなかつたので唯、無口な人、變屈な人で通つてゐました。當然、何とか返答をせなければならない筈の場合に、何のアンサーも無い時の父は、必ず憤慨してゐました。然し其憤怒の奈邊にあるかは凡そこちらで察しなければならなかつたのでした。

「彦ほんは變があるよつてに」とは親類の人達が異口同音に父を評價する言葉でした。

或る日、父は私の母の里を訪れるために鶴屋の生菓子を持つて行きました。父は大阪一流の生菓子を堺の人達に宣傳するためと、又、一つには里の人々をねぎらふ意味とで得意滿々としてゐたのでしたが父の嫂にあたる人が「こんな上等なお菓子は貰ふても直ぐムシヤ〳〵食べて終ふよつて勿體ないなあ。其段お砂糖が一番重寶や」

と、うつかり口を辷らしました。

それを聞いて歸つた父は、以來里へは、中元も砂糖　歲暮も砂糖、手土產も砂糖で、父の一生をつゝぱりました。

明治初期型の美人

麻生路郎

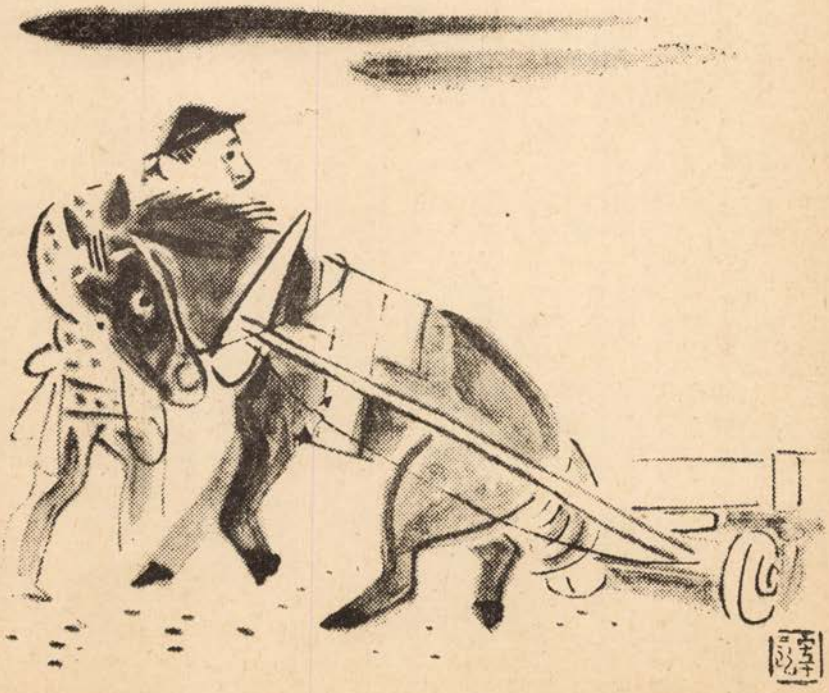
面白くないが稍傳記的に書けば父は善七、母はクニ、父の家は陶器商でしたが私の物ごころついたころには父は單身鄕里尾道をはなれ大阪に出てゐました。私が里子から家に歸ると同時に家族を大阪の船場に移しました。私の十一歲の春のことでした。そして會社員であつた父は明治四十二年九月二十日に五十五の生涯を終へました。私には嚴格な方でしたが遊びは相當にやつてゐました。父の逸話などは他日の機會に讓ります。母は私の生れた翌年の明治二十二年十一月十二日に三十二でこの世を去りました。海岸の寺に出養生してゐたことだけを少し大きくなつて知りました。美人だつたさうです。寫眞で見ると成るほど面長の明治初期型の美人です。母の兄は三條小鍛治何ンとかいふ刀鍛治だつたさうです。近刊の「大阪奇人物誌」で見ると私が兩親にともなはれて大阪へ出たやうに書いてありますがアレは間違つてゐます。

はめ仕に街

高橋かるぼ

柴谷宰二郎画

馬力の馬が前へ進んだので馬子がバツク〳〵と云ふと馬が後戻りをしました。英語も知らねばならず馬もなか〳〵たいてやない……



時花唄二つ

正岡蓉

もぼ、もが婦誌

1

詞（モボだよ）

モダンボーイがね
銀座ぶらつきに
ふところも寒いのにセーラーパンツ
柳ちる日も、ちらぬ日も
伊達男は　辛いね
いつも　珈琲　一ぱいで三時間
カフエ　困る
それもさうかいな

2

詞（モガだよ）

モダンガールがね
アベック日和と
派手なワンピースで人を待つ
万事OK　仇模様
キッスは甘いね
ゆくやドラキヴ
空は青い
それもさうかいな

（作者「奴さんの」節調でうたって下さい）

レターは移る

1　江戸時代

昔のレターは飛脚さん
五十三次　えつさつさ
お染もお七も久松も
戀はこうしたものかいな

2　明治時代

明治のレターは饅頭笠
文明開化で郵便ポイ
浪子も武雄も宮さんも
戀はこうしたものかいな

3　大正時代

大正のレターは赤ポスト
あなたの家は川上よ
妾の家は川下よ
戀はこうしたものかいな

4　昭和時代

昭和のレターは飛行便
きのふ大連　けふ東京
國際愛は　キミとボク
戀はこうしたものかいな

——終——

川柳塔

路郎選

西田卿樂

大濱で呑んで蛤の籠寒し

心齋橋行き戻りつ襟一つ

元日の風に變つて幕を張り

霰してもろこが美味い先斗町

夜店の灯莚の下も師走にて

犯罪は犯罪人物惜まれる

人前へ出る主人だけ服が出來

杖だけのカンでも堺筋を越え

增位汀柳

醉眼のさだかにみしは友の戀

見も知らぬ人の如くにすれ違ひ

水なにも知らぬがごとに月浮べ

雜沓にもまれもまれた戀ごゝろ

煤煙の靄へ ぬつくと立ちん坊

うたてき夜けふまた逢へぬ酒となり

おのれをば賣つた男の顏白し

晝よりは夜を戀ふ身なり哀れなり

痴話ごとの時は無慘にすぎてゆき

師走にも遊ぶ友のみ多かりき

山本丹路

古色のかゝつた體驗談を拜聽し
湯のたぎる横で心がとけてゆき
手を焙りながら思へば事おほし
やけざけはこゝで呑むべし上燗屋
ぶるぢよあへ何が云ひたき十二月
否應は言はさぬつよい人と呑み
表情もとぼしく島氏ものを賣り
めづらしき人よりほしき年賀狀
大佛はあぐらをかいておはしまし
花嫁の幸福海こえ山越えて
おくられし聖書にありし師の署名
下役は憂き表情のペンをもち
日本のうれしいものに密柑船
老酒の夢は大陸支那へのび

山本雨迷

獨り居の炭をつぐ手に影おちる
戸をたゝく風を避けつゝ來た顏は
さりげなく來た娘の爪は紅かきかな
やつた兒のつゝましやかにお辭儀せう
それは紅かい虹ではないるつぼの火
淋しげに朝なの門に顏が出た

生田翠夢

誘ふ水あらばと女着飾りて
つむりたる瞼どこやら淫らなる
くちづけを待つ唇の刺身に似
耳入れへ合の手入りで妓來る
手洗ひで待つてる妓に冬を見る
かき雜炊船のかなたの灯はうるみ

關本雅幽

たよりなき我も社會の一人かな
酒臭い息で出世の手引され

高橋かほる

郊外の二階に派手な鏡掛け
此頃の大工長靴履いて來る
後家はんにくどかれそうな紙芝居
住込みの仲居げんきの好い仲居
腰かけで女優四五人呑みに來る

阿部閑生

元旦に來て元旦のこと云はず
枯草に火を放ちたさこらへをり
洗面へ行くに寢床を見かへらず
この町の女は黒い肩掛けし

橋本綠雨

忘年會札束の紐解いて醉ひ
見馴れない賀狀にこれも妻のんか
さむ空にリンゴにバナヽ賣れもせず
恩給にその日〳〵が達者なり

喜多春秋

禮儀でもあり年寄の云ふ通り
退營の酒へ三味線下手でよし
誰にでも當り當らぬ五千圓
裸婦の足大きく太く名畫なり
十二月お前の事もそりや思ひ
衣から手が出てお布施いたゞかれ
世に飽かれ交替をしてそれでよし
學友へ叱られて來た顏をせず
勉强をせよと大きく叱つとき
親を蹴る子に親ごゝろ今通じ
脊伸びしてとゞく高さの愛らしさ
本堂で子供はぢつとしておらず

岩崎柳路

エレベーター足袋丈け買つて降るなり
ゆつくりと茶を呑んで書く村役場

奥野禿山

部屋箪笥香水までも鍵をかけ
落された人形茶棚に飾り立て
掘り下げた結果女郎屋の風呂を焚き
初店の裏ハルピンも知つて居り
大阪は愉快上中下の遊び
眼に死なし日本人は此處に居るツ
ユニホーム御存じですか親の恩

姫田夕鐘

さし向ひ雑煮の數は開いておき
静寂の中のなかなるお元日
葉ぼたんを値切りそこねて風邪をひき
朝の霧プロレタリヤは風を切り
だしぬけに半七さんは藥風呂
自家用がパンクしてゐる大晦日
お茶碗のあちこちかけて年の暮

西村明珠

子の寝てる方を向いてる針仕事
留守へ來て風に押される方へ行き
廣つ場でボールがぬれてホームラン
胸抱いてふと淋しきは年廻り
來る筈の人の癖など面白し
おとなしくすればぼんやりだと云はれ

市塲浚食子

初芝居近松ものが好きな伯母
妹もバスの車掌になるつもり
妻たつしや大なる尻も尊けれ
水臭い金を貯めてる共稼ぎ
咯血へ父、母、妻と慌てたり
悔ゆる事ばかりの顔へ暮の風

三鴨美笑

ぼん〳〵と呼ばれ此の世のきうくつさ

吉田水車

水上は　ノタリ〳〵と巡廻し
カナリヤを埋めるにむごい冬の土
風害の家根そのまゝに暮れんとす
東京へ來ても寄附をば頼まれる
大阪にお池の蛙もよごれたり
初詣流線型を走らせる

首藤竹楓

主義もなくたゞ末席にかしこまり
何もかも先の出様だ靴の紐
表情もなく白骨へ坊主ゐる
屋根の數繼の數々廓の灯
山彦のあとは嶺ゆく風の足
おみくじは末吉女手をあはせ

尾添好郎

あきらめをこの青空に言ひ切るよ

虹子改メ越智虹一郎

勅題

池の鶴むかしながらの立姿
裏で會ふ女給財布のまゝ渡し
コスモスが散つて終つた療養所
とことん儲けて妾のうちのものも殖へ
公侯伯子男虚榮を見せる金がいり

水谷鮎美

池邊鶴

鶴一羽二羽三羽四羽五羽の春
大晦日靴を磨いて日向に居
大晦日元結きつうしまるなり
住みなれることにげんのひとつなる
朝風呂の吾十五貫以上也

尾綠之助

新年を迎えんとす

野猪の如くにと日記に書きしかな

大鶴喜山

盗人らしくないが師走を捕えられ
拔けのこる前齒二本へ寒する
帝國の書記とて君の氣焰かな
子が病んで鬼門のけがれふと思ひ
風采のいゝにまかせて詐僞取罪

須崎豆秋

啞の子の話術ぺロリと舌を出し
日はうらゝ鍵屋五兵衛がチンと居る
晝の月なんば新地で引つばられ
抱かれたまゝの警部補の椅子
こうもりよ又ボーナスが無さそうだ

平井與三郎

君は妻、僕は娼婦へ壽司を買ひ
膝へ來る女給口說いて慾しいなり
新年のマントも持たず酒に醉ひ

日野華水

聞き合せ案外痛いとこに觸れ
辱延ばす事に病人決めて寢る
銀狐だけ横切つた交叉點
眼覺しを鳴して見てる退屈さ
二人切りになつたその時鳩時計

岡田某人

寒月へ錢よむ音の物凄さ
泣いてゐて踊子ふつと脚がゆれ
貧乏もよし友達が來やすがり
儲けた日耳つ朶まで湯に浸り
歡盡きて甘栗の皮踏んで去に

江戸みつる

アリガトウと歸る妓を見送りぬ
呑んで呑んで明日を別れる君となる
毬の樣な心の女に惚れてゐる

中澤濁水

謄寫版せわしさを友掌に見せる
お隣へ恥しいほど長い風邪
幸に貸して損する金もなし
税金の足らぬ二番の稻を播き
繃帶の譯を默れば酒にされ

丘遊舟

二十一さても希望は雲に似て
どうせ街の不消化物の俺なのさ
大都會この枯れた木の蔭の戀
窓くもらせて〳〵まだ書けず

平井春光

惡友を前に手ぬるい戀をする
珈琲二つ一人は工面しに走り
この用は手前に來いと官吏さん
無心しに來れば嫂だけがゐる

荒井英賀夫

人間の悲しいものに母危篤
娘の親をくどき落すに酒をたち

平岩司郎

職を求む

うつむいて歩くくらしの第一歩
初任給その朗らかさ多かりし
氣がつけば私をまつていた野路
疑ふてしまへばペンの動かない

後藤青兒

百姓も汽車の窓では面白し
札束を握るも仕事だけの事
一錢洋食へもう日が暮れた
立身は中々出來ぬ手紙書く

西いわを

ストーブがは入り席順變らされ
地位を貪り妬まれもする

T紡績工場

裁縫も茶、活花も型ばかり

町田承春

珠數持つてしばし無慾にかへるなり
子を中に寢て見たらなど一人ゐる

竹内機見女

ねぢ巻けば動く時計に似て非なり
やとはれのせめてお風呂に永う入り

甥の出生(十二月二十一日)

どちらでもよいと祈つて湯を沸し

毛利九波

激情を嘲笑ふかに白い酒
嗅覺へ妖婦ごくんと迫るかな
まごゝろを極みて女地におちぬ

眞田幸捐

初日の出九千萬を力すけ
インフレの波に乘らない株を持ち
生花の師匠疊をきるといふ

梶谷巷二

つんとして脂取りよく使ひ
霰、霰、お姿さんは風呂歸り
十二月水の流れを見て居たり

熊谷紅

數の子の水を流して年暮るゝ
まあよかつたと年の暮手をつなぎ

宮岡白峰

買ふ物を案じて渡る戎橋
轉宅のそれから義理を忘れたり
久し振り正月でよし君でよし

槙山九天

幹事して妻に嘘つくごとうまし
シヤープペンシルの芯がない一人旅

石曾根民郎

刷りかけて髭に霜おく人を待ち
線路道陽を東からかぶる駄馬

朝田新水

善惡に迷ふ心の醉ひすごし
便箋へ濟まない嘘の手がふるえ

渡邊曉童

金借りにゆかせた留守の雨をゐる
これで來ぬ車つまれる丈つまれ

青木史呂

おとづれをきみよベットにきゝゐるか
十二月買ふ身賣る身の眞劍な

いのしゝ漫景

活字で描いた漫畫

岡田某人

第一部

第一景（山

背景――雪の山塞

――雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鶏を着て立つて徘徊すとかや。げにうるはしの雪景色かな。それにつけても思ひぞ出づる越し方の、一族燼んの頃の夢、彼方此方の山また山わが一門の棲家ならぬはなく、首をめぐらせば乃ち味方にし

て、御代萬歳を壽ぎしに、小賢しき人間ばらに打破られ追ひつめられ、うたてや今は侘び住みの、山奥深く散々ばらばら思へば憎つくき人間共、恨晴さで、カツカツカツ、置くべきや。（鉦太鼓具の音）

家來—御注進。

大將—騷々しい、何事なるぞ。

家來—されば、やつがれ物見仕りしに、人影さらになく、月は絶好、火縄の匂ひも致しませぬ。

大將—そんなら者共。

家來一同—出陣々々。（再び鉦太鼓具の音）

木の間もる弦月猪は向を替へ

第二景（畑）

猪—切取强盗武士の習ひ。

（雞の聲）

人—あ、又芋畑を臺なしにしやがつた。罠を掛けてこまそかい

雪もよひ猪の罠掛けに出る

第三景（動物園）

日當りのいゝ檻の外

女—こゝは何なの。

男—猪だよ。

女—まあ、何處にゐるの。ゐないじやないの。

男—ゐるさ。ほらあの隅つ子に寢てる。

女—あれが。まあおかしい、まるで納豆屋の看板みたいね。ちつとも怖くとも何ともないのね。

同じく檻の内部

猪—（薄目をあけて）あゝあ、昔が戀しいわい。これでも相當威張つたものだつたが。あの仁田の四郎といふ男、俺は負けたが、堂々と戰つて、小氣味がよかつた。それに引かへ—もう止さう。自殺したくも脇差もない。寢るだけだ。—（幕）

何時見ても猪の檻寢てるなり

第二部

第一景（揚幕の前）

役者—いやだ〳〵。ものもあらうに猪か。立役か二枚目志願の俺だつたが、かう縫ぐるみを着て跳ねやうたあ夢にも思はなかつたよ。家の者には見せられないね。それにしても、何だつて師走興行だといふとかう忠臣藏を出しやがるんだらう。寒いのに。見物も馬鹿だが、大石内藏助も氣が利かねえ。もつといゝ時候に討入りして呉れりやいゝものに。

猪の役揚幕までは腕を組み

第二景（花道）

役者―（猪になつて驅けながら）まあなんとぎつちり來てやがらあ人の氣も知らねえでー。あつ、何か手で踏ん付けた。又グリコの紙だらう。

猪の鼻へ棧敷の妓の匂ひ

第三景（本舞臺）

役者―（同じく驅けながら）テレツクテンテンか。ところでどうだ舞臺にや誰もゐねえ、これが本當の獨り舞臺か。しようむない。

本舞臺拔け切つて猪手をはたき

第四景（樂屋）

役者―（猪の縫ひぐるみを脱ぎながら）二つ玉にて射ち止めしは、猪にはあらで旅の人、か。へんだ。四つん這ひに走らされておまけに射たれてたまるもんか。小僧が待つてるだらう。どれ歸るとしようか。

猪の中から無口な役者が出

第五景（街頭）

友人―いよう、久し振りだね。

役者―御機嫌よう。寒いですね。

友人―寒いね。どうだ何處かで一杯やらうじやないか。

役者―はあ。

友人―あゝ、丁度いゝ、此處に肉屋がある。うんそうだ、時節柄だから、ぼたん鍋と行かうじやないか。

役者―……。

友人―嫌ひかい。うまいよそら店の前に轉んでるだらう。見掛けは汚いが、第一溫るよ。僕はこれが好物でね。

役者さよならッ。

友人―おい〳〵。どうしたんだい。行つちまやあがつた。變な奴だな。

役者―（獨白）共喰ひだ。ぶるぶるつ。身につまされて、……。人間の師走へころぶ猪の鼻

第六景（座敷）

役者―今歸つたよ。（床の間を見る。猪の置物）おいつ。誰だこんな物置いたのは。

女房―いゝでせう。來年は猪の年ですもの。まああんた何をするの。

（ガチヤン。置物の割れる音）―幕―

置物の猪へ氣の立つことがあり

柳川 二十日會

川柳二十日會にはかなたでも出席出來ます、毎月二十日の午後から夜にかけて不朽洞一南海線玉出驛西三丁キング喫茶店！で路郎主餘を中心に語る會です、會費の定めはありません。

私は久しく部屋に閉じこもりがちで、山好きの。雨の樓塲感だとは雨の路女郎の訪れ方の取り方の歷卷のご變化に格段の進歩。

彼の所氏の彼の好きな鐘の曼陀羅の中の酒の茶の譯の出來上がり後の

何か眞劍に話し合ひ位置を變へて腰を掛けて御自慢の東京の酒の茶の出來上がり後の

話が位置を變へて腰を掛けて御自慢の東京の酒の茶の出來上がり後の

キンダ郎がいばつて飛來子雨

ゲンコツ人に赤氏に番傘を來込るが

ルーブルの雨の總番傘を來込るが

ペンをいたはる

住田亂耽

實に永らくの間、筆を執らなかつたので、僕の頭の中には塵埃が一杯充滿してゐるやうな氣がして一度道路清淨機でゝもザーツと洗ひ流してしまひたいのであるが、もしそれ程の勢で一氣呵成にペンを走らせようものなら、忽ち一夜にして本誌一册位は書き上げる怖しい氣配を自分自身の中に感じるので、自ら深く警戒しながら、ブレーキを握つてゐる氣持で今ペンをもつてゐる。

○

このペン――之はこのもしき朱色の軸である。僕が川柳を始めてから今までの生活を、もし僕の川柳生活とよぶことを許されるならばこの朱色の萬年筆はかなり長い間僕の川柳生活に內助の功をつくしてくれた。人間なれば必ずや低廉なサラリーに不滿を爆發さす程激しい勞働をしてくれたし、僕を大いにたすけてくれた。

數年前、學生としては少しぜいたくな氣を起して、ウオーターマンを一本需めたく、丸善へ立ち寄つた所が、ちようど形といひ、色といひ、すつかり氣に入つたペンが見つかつたので、その當時の懷工合とはまことに不均衡な金を支拂つてそれを買つて歸つた。

そして早速インクを注入して、何も書くことがない時は、自分の名前や、にくらしい教師の綽名などをさかんにかき並べて、二三日は非常にほがらかに、そして神妙にいやな講義をも筆記したものである。所が數日後、ふとペンの横文字を何氣なく見ると、W.A.Shoffen と刻まれてあつたので、とたんにいさゝか憂鬱になつた。Wateman と信じてゐたのが實は左にあらずだつたので、頭の二字だけを見てわらふべき錯覺を起した自分の周章ぶりが腹立たしくもあつたし、にせ物をもつてゐるといふ意識に、とても心を重くされてしまつた。

にせ物だと思ひ始めると、インクの出工合までが平常さを失つて來たやうに感じるし、軸の太さまでが、しつくりと自分にあてはまらぬやうにも思へて來て俄然嫌氣がさしたのであるが、それも二三日で、ペンはまた以前のやうな輕快さを取り戻してくれた。

それ以來、之がにせ物であるか、或ひはウオーターマンよりもいゝペンなのか、さういふ專門智識を得ぬまゝに、僕としては何んとしても手離し得ないペンになつてしまつた。

即ち今もにぎつてゐるペン――朱色のペンなのである。

一人のうるはしき麗人こそ獲得しなかつたうらみはあるけれど、多くの信ずべき男性の友達をもち得たのも、このペンのお蔭だし、今も尙ほ獨り守りつゞけてゐてくれるのも、このペンである。

僕と行を常に共にして、默々と長い勞働にたへてくれたこのペンに對して僕は大いに謝しなければならぬと思つてゐる最近、老朽期に入つたとでもいはうか何處とも知れず、このペンからあはれにもインクがもれるやうになつた。そんな時、まことにいたはしき心で、子供の涙をふいてやるやうにして、汚れた部分を清拭してやるのである。

君――にも かなり長い間迷惑をかけて、ほんとにすまない。――

こんなことを心の中で、獨言しながら――

○

今までは全く無關心に近い狀態だつたが、このごろ俄かに、自分の室を大切にする氣持が起つて來た、大切にするといふ意味は、よりよく、より美しく自分の

室を守らうといふのである。室に對して少し大げさに言へば、こんな美的觀念が芽生えて來たとは自分ながら不思議きはまることがらである。

多くの人は、之を年のせゐだと簡單に片付けてくれるが、年のせゐといふ程の年齢ではないがさうかも知れないとも思ふ。

いぶせき家ながら、室ながら、あれもこれもと思ひはじめると、まるで狂人のやうに、色紙をかへたり、短册をかへたり、人形をおき並べたり、スタンドをとりかへたり、ERC、ETC一日そればかりに氣をとられて、多忙な時間を無理に、割いてその工作にとりかゝつて、家族の者に反感を買ふ程度にまで、それが嵩じてしまふ。然し一日々々、自分の氣持にぴつたりとくる室になつてゆくさまを眺めるのは非常時にこゝろよい。

「二十有餘貫　私は冬が好きだ。師走らしい音に夜があけ、日がくれる私は冬が好きだ」

といふ南北さんの色紙――之はたとへ一日でもいゝ二十有餘貫の程度に肥えたい僕の念願から、かけてゐる。また南北さんの

「ことに〳〵冷たい麥酒手もちそへるさ（凍へさうなのを、グーッとのむうれしさ働けと命令するやうなのが好きだ」

といふ色紙は、自ら怠懈の心を戒めるべく壁に配してゐる。

とまれ僕も冬が好きである。第一酒のシーズンで、僕自身のむことよりも、それに關聯して

ウシソウゲウなる僕の商賣が大いに多忙だからである。寒氣凜烈、頭の調子がすつきりといゝことも原因の一つである

然しせめて頭の調子のいゝ冬に、商賣の爲に僕の時間の大半を占有されて、讀書の餘裕を得られぬことは何よりもつらい。

そして本業の閑散な春から夏へかけては、身體の調子が悪くて、何事も手につかないといふ狀態で、かくて遂に僕は一生不勉强の徒として終るのではないかと始終それを怖れてゐる。

あはたゞしい生活の中で、こんなことを怖れてゐる自分をかへりみて、おろかにもたのもしく自分といふものを、しげ〳〵と眺めることである。

○

芦屋と魚崎といへば指呼の間に在るので、しば〳〵「陶泓居」をおとづれる。

春掛展覽會を開かれるまでは、南北さんはいかにもたのしさうに（之で飯がくへるんだつたら羨ましき限りであると、かたはらでみてゐて思ふ程）のんびりと繪筆を運んで居られた。然し個展が大好評裡にすんで、追作に懸命の南北さんはいかにも苦しさうであつた。何故か――はいはぬ。

某日、南北さんに、妻の一日も早く病癒ゆることを祈る爲と、一つには一日も早く僕に第二世を儲けさせ給へと神かける氣持で、二枚の色紙の揮毫をたのんだ

前者には、かまぼこ板のやうな猪の繪に古句を賛したもの、後者には、僕の註文で「添乳して棚に鰯がござりやすいの句と繪をかいてもらひ、もし靈驗いやちこなる時は、早速お禮まゐりに來ますといふことを附け加えた。

かたはらにはんべつてゐた陶泓居の名サーバントちよの女史、之を聞いて曰くには、「先生の首によだれかけかけて、頭巾きてはつたらよう似合ひまつしやろな――」

南北、瞬時にして地藏尊と化す。まこと、强將のもと弱卒なしと感心しだことであつた。

その後旬日にして「五段目で運の强いは猪ばかり」といふ色紙は、救世主の如く妻の病勢をかるがるしめてくれた。この上「添乳の句」がもしヒットとなれば鰒ぐらゐは、安いことだとひそかに考へてゐる。

こんな饒舌を書いてゐられるのも、病妻が日に日に朗かになつて行つてくれるからこそで、ひいては南北さんの色紙あればこそ、と恩にきておく。

○

W.A.Sheffen Pen よ。今夜もまた、君に、過剰な勞働を背負はしめた。すまないすまない。

（9・12・12）

日本柳壇百人撰

1934年の金字塔　自選一句　ABC順

大阪　麻生路郎
子澤山僕の枕は何處へいた

同　麻生葭乃
すき髪のナチュラリズムを讃美せむ

同　朝田新水
貧乏の底に指輪を手離さず

同　阿部閑生
引越して海の遠さを屋根から見

島根　尼絲之助
さみしいとひとりがいへり窓の秋

奉天　石原青龍刀
軍犬へ顔をそむけて村の犬

仁川　池田可宵
負けて勝てなどとは無理なお母さん

靜岡　榎田珍竹林
朝寒を子の足音に勵まされ

東京　藤島茶六
秋風立ち初めて釦探すなり　（七妻の一周忌に）

大阪　福田山雨樓
海水につかり恩讐なかりける

東京　古谷盈光
麥笛よ子が孫が吹き昭和も九年

同　富士野鞍馬
よくなつて仕立て直すといつてゐた

青森　後藤蝶五郎
咲く花があり散る花の忘れ勝ち

寫都　後藤千枝
又起きた達摩に株の値が上り

大阪　堀口塊人
嘘をつく心に少し餘裕あり

京都　平岩司郎
箸置いた表情それが文である

大阪　橋本綠雨
さゝやきに夏の暑さを忘れてゐ

京城　橋本言也
斷りの役目ばつかり母へくる

神戸　日野華水
表情の巧い男に歩かされ

大阪　岩崎蟬古
物を食ふ姿さびしき三等車

模濱　礎部天邪鬼
蝶の死のそれは花茶の光る蔭

東京　井上信子
無低抗神か白痴か美しさ

大阪　生田翠夢
なりわいのうたてやひとをかい抱く

松本　石曾根民郎
ちりも積つてちりでよかつた話なり

長野　金井有爲郎
爆發しさうに繭の山まつ白し

大阪　岸本水府
啄木は亡し故郷の山はあり

京都　紀二山
相倚れば人の噂の世なる哉

東京　川上三太郎
わが上に屋根のある幸雨の音

同　河柳雨吉
患へば近所にうまいものがなし

西宮　黒木鶏足
わが妻の寢顔小さく二年過ぎ

神戸　觀田鶴太郎
だまつた植木屋と虫賣と夜店のはし

同　喜多春秋
負かさねば勝てず勝たねば負かされる

御影　食滿南北
正月は遊ばうといふいそがしさ

青森　小林不浪人
しら〳〵と雜魚寢の夜は明けかゝり

東京　三浦太郎丸
秋の風大工一人の鉋屑

京城　正木柳建寺
太平洋うむ面白い春になり

東京　林田周魚
一人居て一人樂しむ三下り

大阪　森鶏牛子
なすこともなく正月へ押出され

岡山　三村叱咤郎
はらわたを洗つて元日

松山　前田五健
聲にはあらず無口の瞬が燃へる

大阪　松丘町二
青くけぶつて思ひ出の森に日がある

同　松盛琴人
大空へ心のにごり澄んでゆき

同　水谷鮎美
大風水害（九月二十一日）
濁流へらうそくの灯の片ちぴり

同　增位汀柳
亡母（はゝ）と酌みしある夜をしのぶ盃の

同　道田葉平
土塊の掌に背かれてくる心

名古屋　鈴木可香
思も出も幼きまゝの祭の灯

京都　齋藤松窓
（時上耳少し遠けれど健やかに）
よろこばすことなくいのちめでたさよ

東京　品川陣居
香炷いてうらぶれの氣の尖り撫で

同　高木角戀坊
幸福の笑くぼを母にこすり付け

同　高須啞三味
蟷螂がゐたと出て來るかくれんぼ

長野　高峰柳兒
非常時へ役立つ老軀の痛々し

青森　田澤有石
父として袴穿く日の靜かなり

大阪　鳥山一歩
本來空と知つて桔梗の花盛り

同　塚越正光
手傳へて蚊帳を疊めば鐶が鳴り

東京　武田玄六
爪彈を聞く手洗の月一ツ

同　寺井紅太郎
あまりに咲けば賑やかな月見草

大阪　高橋かほる
湯豆腐へ隣座敷は空いてゐる

同　竹内機見女
白紙を流れてゆくは秋の風

東京　高島玉兎朗
番臺に母のない子を梳ずる

京城　津田麗月冠
平和なる親子に空の高いこと

東京　海野夢一佛
我と我が身抱いて想ふ肉親

八幡　上野十七八
滿腹のしばらく希望など忘れ

東京　和田天民子
米作り只春となり秋となり

大阪　吉田水車
うつむいて行く鼻先きに慈善鍋

京都　山川紫明
天津日嗣の皇子へ二五九四年

舞鶴　安川久流美
白湯のんで悟つた顏も秋によし

東京　八十島杜若
流行歌笹屋の糸も惜しまれる

同　柳三門
何氣なき僅かな暇の人心地

大阪　山本雨迷
相默し霧雨の情れなき灯に對し

東京　前田雀郎
春もやゝ苦きもの置く舌の上

同　森井荷十
あすと云ふ日に騙されて鬢白し

大阪　長崎柳秀
さようなら戀のお辭儀は又たのし

信濃　中島紫痴郎
かくしつゝ運命の果てへ牽れつる

高知　中澤濁水
もう一度暮しなほして慾しい過去

別府　内藤凡柳
人間のちいさなこゝろ花を活け

神戸　西村明珠
影なんぼ背のびしたとて子は子なり

横濱　中野懷窓
時に磨かれた色なる奥の院

大阪　西田艸樂
決心のたよりなさ知る春の宵

鳥取　中島鐵洲
柿の實は眞赤大演習終る

福島　大谷五花村
何處へ行く雲かと見れば消ゆる雲

大連　大島濤明
笑つてるやうに日の丸風に搖れ

京都　大島黄子朗
徂く春を眼藥さしておとこ寢る

大阪　大石文久
戀すれば奇しき力を持ち合せ

同　小田夢路
解決に酒はいにしえからのもの

同　近江砂人
氣疲れて家旗制度の國に住む

東京　岡本嘘夢
追從と御世辭の中にたゞ王者

大阪　小川百雷
生甲斐をさとる女のうなじ見る

同　小川舟人
戎橋ふつと我家は兒が五人

兵庫　住田亂耽
銀座アルプスへまひるの昇降機

大阪　關本雅幽
子が泣いて出勤時間暗いなり

同　須崎豆秋
大毎も止まり豆腐屋も止まり（風水害）

神戸　椙元紋太
海を見ず港の街の幾日や

同　三條東洋鬼
親からの稼業がいつか世に遲れ

猪漫錄

西田艸樂

猪狩の話

野猪は動物學上 Sus leucomystax 偶蹄目、野猪科に屬しなんて、野暮臭い事はさて措き、猪の來歷でも尋ねて見ると、話は隨分古い。若布都主命之、御狩爲野之時、於二大野鄕西山一、令立二狩人一而追之猪、至二北山之河内谷、而其猪之跡失焉。など神代から飛出してゐる猪　又雄略天皇紀に、葛城山中、嗔猪從二草中一暴出逐レ人、天皇用弓刺止、擧レ脚跪殺の御勇壯の記事あり、富士の卷狩では仁田四郎が暴れ狂ふ猪にひらりと跨つて、縱横に乘廻したといふ凡そ勇壯なる狩獵の對照として、登場してゐる。

僕の伯父が愛用の火繩銃を擔いで狩獵に出かけた昔、種々の語り草が、今に記憶に殘つてゐるも懷しい。

「猪といふ奴は、牙で松の樹の荒皮を剝いで流れて出る松脂を軀中に擂つけ、その上へ土砂を塗りつけて、何の事はない軀をしつくいで固ため樣にして、鐵砲の彈が命中つてもこたへぬ樣になつとる。それでこんな彈で射つのや」といつて蠶豆程もある鉛の彈丸を火繩筒に詰め込んだものだ。そんな馬鹿な事がと思つてゐたら、似た樣な事が和漢三才圖會に書いてある。

掠二松脂一曳二砂石一、塗レ身以禦レ矢也と。

まだ耳に殘つてゐる伯父の話に「手負になつた猪は追はぬものぢや、もし逃げる奴を卑怯者奴が、なんて追ふと、引返して來て死物狂で暴れるから危い……」

これも三才圖會に書いてある事に似てゐる

爲二獵人一被レ傷去時、人嘗謂二汝卑怯者一盍還乎。大忿怒直還對合與レ人決二勝負一故響二之猛勇士。とある。つまり一の谷の熊ケ谷の樣に日の丸の扇でも擧げて呼び戻したら大變である。

猪の肉

猪食つた酬ひを恐れる日本人ではあるが、元來大和民族は太古から狩獵が好きで、獸肉は盛んに喰べた事、神武天皇御東征のとき弟猾が牛酒を設けて皇軍を勞つた事、前記の若布都主命の御狩の事などで明かであるが、天武天皇の御宇、牛馬犬雞猿の肉を食ふ事を禁ぜられた。佛敎の傳來で殺生戒を說いた事などで肉食は表向やらぬ樣になつたが內しようで食つたり藥喰と稱してやつてゐた事は世々の史事に徵して明白である。

お馴染の川柳に於ても、肉食の句が少くない。古句の書に山奧屋、もゝんぢ屋、獸肉屋などあるはそれで、江戸は麴町平川町三丁目の甲州屋、兩國の港屋など著名である。こゝでは猪に牡丹鹿には紅葉の看板印を出して賣つてゐた。又猪を山くぢらなどゝも稱した。兎も角牡丹だの紅葉だのと

けだものや倭詞で書いて置

であつた。紅葉、即ち鹿もやはりシシと古來呼んだ例は多く、京の鹿ケ谷が適例であり、今でも地方によつては力ノシシなど云つてゐる。古句に於ても猪と鹿との曖昧なのが散見される。

傘の引解を着てゐるむごい猪　五段目は蛇の目で包む麹町

は古傘を剝いだ紙で肉を包んだ事だが

紅葉傘破れてぞ鹿の包紙

なんかは傘の一種の紅葉と、鹿の紅葉を臭はした狂句である。

けだものや藪醫者程は口をきゝ

の句は藥喰の事を證明してゐるが、藥喰だけではなく、こつそりと美味忘じ難い連中があつたので可成り獸肉屋は流行つたものと見える。

繁昌さけだもの迄が店住ひ

しかし、獸肉を食ふ時は

藥喰人目も草も枯れてから

鬼丁を淋しく使ふ藥喰

等の如く、人の寢靜まつてから喰べたり、納屋の中で喰べた。而もそんな連中は非道く女どもから嫌はれた樣子で

猪を食ふ食亭をする獨り者

藥喰女房烟管をひつたくり

などゝある。又

猪の口は國府でさつぱりし

薩摩つぼの野暮天が食ふものともされてゐた樣である。

處がどうして、猪の肉は治「癲癇」補「肌膚」益「五臟」とある位で、藥喰は申す迄もなく、當今では牡丹鍋は贅澤とされてゐる程、野獸肉中での美味王である。

分析の成績表では

水分七五、四四、粗蛋白質一二、八一、灰分一、二三、粗脂肪六、一七と豚肉に比しては脂肪が少く、少し固いが美味である

宍といふ字は、猪の肉の事で、大阪に宍喰屋橋なんて名ある事も、獸物屋があつた名殘かと思はれる。

豚と猪

豚は元來、野猪を飼ひ馴らして改良されたもので、ほとんど近似の動物である。故に豚を家猪など書かれる。豚にいろ〳〵と種類のあるのは、改良原種の猪に種類の多い事を證するのである。我國では德川末期に琉球を經て支那から多く輸入されたが、ずつと昔から豚を飼つてゐた事も明かである。

仁德天皇紀に猪甘津、天智天皇紀に猪糟、姓氏錄に猪甘首などあるそうで、豚から出た言葉である。大猪飼野なんかも大方そんな事かと想像する。

猪に因める事ども

數の十六を猪と符牒すける事は九々の酒落、十圓を猪一枚なんかいふのゝ小供でも知つてゐる。山間地には今尙田畑の害を防ぐ爲めに猪垣なるものがある。所名、姓名に宍戸、宍倉、宍食宍人など猪に因むものの多々ある。牡丹と猪は牡丹に唐獅子の混同であるが、かふいふ混同は鹿と猪とに澤山ある。

「うりんぼう」といふのは猪の仔の事で、背に白い縱縞があるので瓜に似てゐるといふ譯なのかも知れない。猪は多產の動物と看做されてゐた。正月頃が交尾期で、四ケ月で四頭產むそうである。達者な子を多く產むので婦人があやかる爲だと云はれる亥の子の祝は舊曆十月初の亥の日、餅を搗いて祝ふ。此の祝の式は、古來朝廷幕府でも擧げられた樣である。

忠臣藏樣の勘平の猪射はお馴染み深い。

山中溫泉では「猪が髮結て身をやつす」と唄ふ。此の猪一夜十圓はちと高價に過ぎると思つたか「石砲擔いで山中來たが、猪も射たずに空戻り」なんて意氣地のない唄もある。

兎も角一九三五年は亥の歲、猪の軀に似せて汽車も電車も自動車も、流線型ばやりで走る事走る事

猪が眞似たなと思ふ流線型

陶泓居雜記

食滿　南北

△私の繪に對して心からの注意を與えてくれられた諸君に感謝する。

『食滿はん、あんたほんまの美人描きなはんなや』

『南北さん、あんたは紙本の方がよろしいで、絹に描こと思ひなはんな』

『先生ゴタ〳〵したのんよりこのさし出しみたいなんが特色だんな』

要するに、私は美人や酒や、ゴタゴタしたのは恐らく、ニンにないのであらう。

△私は閑なと、よく私の部屋をかへたり片附けたり、本箱をあつちへもつて行つたり、こつちへもつて來たりするが舊年末は、新年の軸とかへる暇さへ出來なかつた程の忙がしさだつた、其中から私は帝展へも行つた。堺の忘年會へも出かけた。しかしそれも忙がしい中へ入れてゐたのかもしれない。

△毎年私は賀狀を一々描くことにしてゐたが、本年はとう〳〵摺つてもらつたそれほど忙がしかつたのだ、來年若し生きてゐたなら、仁木彈正でも描くことにしやう。

△路郎氏がかねて云はれたやうに私の編輯にかゝる『魚』春の卷は見事、川柳系の雜誌になつた。角戀坊、水府、新禪、路郎、百樹、當百、砂人、三太郎しげを、せいけん、亂耽、の諸氏其他大分に柳界の方から原稿を貰らつた。其一面、綺堂、六福、吟蕉、花菱、月郊、蓬吟、梅幸、裳雨、浩水、吸江、の諸氏即劇界關係の方々からも頂戴した。何にしても『魚』春の卷は春の卷らしく賑やかなものになつた事を大ひに感謝す〻。

△舊冬は仁左衛門、梅幸の兩丈々はじめ吉良氏令孃、曾我の家夫人、玉兎朗夫人、竹柴鷹二君、かつて『手術を享けた、栗原外科醫の嚴父、畏友岡村攪新氏の父君、畸人岡村平太郎翁、大分に私の知己にお別れした。私も丁度今年あたり

法憧院智律日整居士

と改名してその口上を吉例の上下で云つてもよいと思つてゐる、かうした皆樣におことづけがあるなら今のうちにうかゞつて置かう。

△舊冬の忙がしかつたのは燈火のまさにの格かもしれない、辭世をひとつ

何事ももう邪魔くさい屠蘇であり

△鰒、鰒、鰒、酒、酒、酒、高安博士、頃日私をしつてゐる某書肆の主人の糖尿病を診察して曰く、

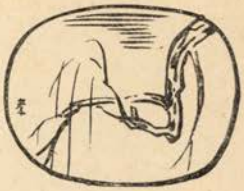
『世の中には食滿君といふ例外もあるよつてな』

其人曰く

『養生せんでもよろしいのんか？』

『サア、やつぱり例外やよつてな』

△何にしても今暫らくだから、あまり逆からはぬやうにつきあつて頂きたい至囑々々。



炬燵XYZ

石曾根民郎

暦を見て、いぬの日だの、みづのへたつの日だのと緣起を云つて炬燵を開ける。年寄りになると變なところへ氣を使ひたがるものだが、うちのおやぢは寒くなると暦などにこだはらず、今朝は本當に寒いなとつぶやきながら、何時のまにかしつらへて、炬燵にひとりでちよこんと老眼鏡で新聞を讀んでゐる。

冬の信州に炬燵がなかつたらと假りに思つたりすると、年老いた父や母の顏が急にゆがんでくるのである。そして自分でも、生れて炬燵の恩寵を受けてゐる身にしてから、何だかさめ〴〵と暗闇にゐる氣持になる。

藁灰をこしらへるから早く起きろとせきたてられて、ひどく霜のおりた朝など、藁を焚いて炬燵開きの用意をする。しもやけの手をかざし頰をほてらしながら父の指圖を受けて藁を燃やすあの頃を思ひ出すと、本當に炬燵といふものはよいものだ、炬燵に育てられて大きくなつたなつかしさは何時になつても忘れられないと人知れず微笑して見るのである。

草庵の炬燵の下や古狸　丈草

古狸はまさかゐまいが、鼠ならあのかしこそうな眼を光らせて、鼻で炬燵の感觸をむさぼつてゐるかも知れない。蒲團を開けて嗅がなくてはわからぬ屁をそれとなく失禮しておけば、床下の鼠はほんまによう云ほんわとかなんとか身をそむけたがりそうなものである。

炬燵なき以前は物に尻かけて火鉢にて足を暖めたるよし古き繪卷物にその體みえたりと骨董集に載つてゐるが、さしづめボロ會社の小使室の晝休みか芝居の幕開きを待つ裏だと考へればよからう。それがやぐらをこしらへて置炬燵とし、置炬燵が工夫されて今の信州の炬燵になつたものか。

智慧の出ない時や寢せつける嫁は安々と炬燵に腰をかけたりすると古川柳ではぶちまけてあるけれど、なるべく腰をかけるような無作法なことはつゝしまれてゐる。泣く時の櫛は炬燵を越えて落ちた艶やかさにありつきたいと、豫れて願つてゐるが惠まれそうもなし、所詮戀に負けた奴になつて炬燵に寢てゝよしなきことを考へるよりすべはなきとか。ちよんのまのおんなに安價な媚態を形づくるのには、すぐ横へ坐らせて一酌を交はしながらもたれかけるこいつやなおとこだといけすかなく思ふと、對坐して炬燵へあたりたがる。

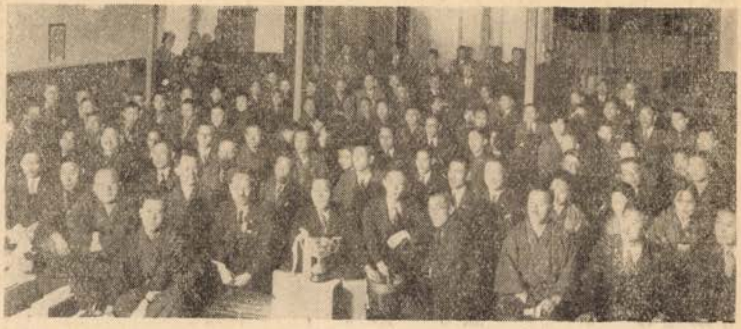
炬燵の手明るい方を出しておき江戸見物に出掛けたら四足のものなら何でも食ふ見世物へ入つて驚いてゐたが、感心したまゝ、そんなら炬燵やぐらを食つて見せろと云ふと、藝人はあたるものは食はないとうまくしやれを飛ばしたので重れて感心をした。栗山の話にあつた怪談である。

寺參りに行つた留守のうちに炬燵を切つておけと云はれて三角に切つた息子。おやぢがなぜ四角に切らず三角に切つたと問ふとこれでようございます、先づこゝがお前が、こゝがかゝ樣。こゝが私なるほど、來年は呼んでやらう、高笑ひに載つてゐる小咄である。

置炬燵咄を奥へつれてゆき

咄を奥へつれてゆくほどの融通のよさを延ばすかも知れない。でも私は私とともに伴れそつた炬燵のために、こゝろおきなく語り合ひたい。蒲團のすみに鼻水をこすりつけたり、お茶をひつくりかへしたり、泣いて眼をふいたりしたこの炬燵との半生を、ゆくりなくつぶやかせてくれる機會を持つて來て下さるならと待ちこがれてゐるのである。

本社京阪神各支部聯合主催



川柳忘年大會の情景

（上佐堀工藤寫眞館撮影）

川柳雜誌社
京阪神各支部

聯合川柳忘年大會

あはたゞしい中に華やかな師走の裝をこらした街を拔けて道頓堀倶樂部入口に浮び出す支部聯合忘年句會の文字も今夜は殊更鮮に、會場は然に立推の餘地だにない盛況、和やかな當例會場も最高點者に贈與せられる優勝盃がより輝やかしさと活氣ある雰圍氣を醸し出す華水氏の洗練された司會者振りに忘年句會の幕は上る。締切時間、採點に對する注意等が聞かさる、兼題席題締切後當夜の壓卷食滿南北氏の「芝居の裏」と題する講演南北氏ならではの芝居道の裏話樂屋の珍談ユーモラスなヂェスチュアーとスムースな話題の連續の交錯は正に獨壇場、次いで庄萬よし氏の當聯合句會の世話役としての苦心談、次いで路郎師の「川柳家は第三者」と題して更に當夜の盛況に感激して熱辯をふるはれる。兼題席題の批講に入るや幹事諸氏は賞品の贈呈に大童、記念撮影後朝田新水氏の閉會の辭に盛大裡に忘年句會の幕を閉じたのは師走のネガンもかなり疲れた頃であつた、

優勝盃は西村明珠氏が最高點で獲得せられた。

（九波記）

席題　曉　　正光選

曉をきつちり雨が上つてゐ　明暗子
曉へ疲れきつてるネガンの灯　夕鐘
大阪を起しにかゝる糞尿車　史呂
曉の鷗は低いとこを飛び　豆秋
曉になつて軍旗の位置が見え　同秋
白々としらむ池畔に城が見え　秋草
曉に財布も落ちておらぬなり　參魚
曉に道頓堀はよく寢入り　柳笑
幕張つて暦が變る夜が白み　通天子
曉も久し振りなり汽車の旅　山雨樓
入營の日の曉を胴ぶるひ　同
（十）曉へ天地の開く音を聞き　木醉
曉の牧場で兄にさとされる　吉左右
曉へ働けぬ身の深呼吸　遊舟
曉に早煤が飛ぶ大阪市　汀柳
曉の露營に軍馬土を蹴り　竹楓
曉へ地下足袋ぐつと履きしめる　四郎
曉の野營を一機驚かせ　九波
曉の咳へ新聞投げ込まれ　串人
曉の寒さまつはる街並木　亂耽
大阪の何處に居るのか鶏が鳴き　いさみ
（五）曉へ氷割る手も輕ふなり　吉郎
曉になつて齒痒い非常線　魚水
働らきに出る曉を眞顏でゐ　明珠
軍馬の息が太いあかつき　某人
曉へ働らくふとんはれのける　變人
（人）脫稿を急ぐ曉近い夜氣　艸樂
（地）放濕辯曉の美を忘れかれ　月廬呂
（天）十等冷え切り曉の街へ出る　美代坊

京阪神支部聯合忘年大會の同人及支部幹事（寫眞說明）

前列向つて右から・山雨・樓・迷雨・高・しよ・路・北南・生先郎・雨線（員幹）・夢翠・神・紫・中列右から・山秀・由喜・天九・天・輿・郎三・をわい・竹入嬰・波九・子食役・秋春・歩八・秋豆・軍水・るほか・鯉夕・美鮎・路聞・兒青・鮮白・猶幸・女見振　後列右から　柳汀・光春・居史・欽瀧・水蕗・楓

席題　壁

山雨樓　選

歷史を秘めて壁は沈默續けて居　竹楓
獨り居て壁の汚點さへ親しまれ　正光
水害の見舞へ壁は指さゝれ　同
秋深く壁へ情痴を秘める宵　魚水
內職の壁の向ふは寢靜まり　彩泡
白壁に巡査の影も日本晴　豐次
壁一重家主のきつい聲がする　豆秋
拗れてゐて女は壁へ傷をつけ　華水
壁土をふんで手傳職のうた　木醉
泣いて泣いて壁にもたれて泣いてる妓　龍三
荒壁のこゝ銀行へ見て貰ひ　豆秋
壁越しに隣に出來た男の子　新水
白壁の高さに意見ちと挫け　夕鐘
不具の子の壁へもたれる癖がつき　柳笑
落書の壁にあらはな人間苦　汀柳
壁一重同じこゝろの十二月　南北
（十一）紹介所壁の白さにふとおびえ　靖弘
警察の壁を見直す出前持　幸捐
小作米はらんで映える白い壁　愚堂
秋の蚊がのつそり壁につき當り　久米雄
壁落ちたとこから痩せた宮司が出　某人
住みなれて壁は苦勞を知つた色　九天
白壁が續いて女美しい　明晴子
白壁を目當てに巡禮たどりつき　遊舟
まとまらぬ話とぎれて壁の色　白菊
壁の隙見せて家賃が高すぎる　水咲
（五客）ひとりゐるふるさと夜の壁　春秋
押入れを開ければ壁の習字紙　昇鯉
非常時の壁一杯の世界地圖　靜波
泥棒が來そうに藏の壁へ月　某人
塗りかへた壁へコーヒ湯氣が立ち　愁無草
（人）風よ風よ此處は腦病院の壁　月麻呂
（地）一番の下足は壁にへばりつき　蝶之助
（天）お光りが壁で曲つた阿彌陀さま　鮎美

席題　立喰

黎夢　選

立喰にふられた同志うまが合ひ　九天
立喰に秋の裾は邪魔がられ　春光
立喰は飯田蝶子の型でゐる　靖弘
久し振りやあ〳〵やあと屋臺店　ひろし
立喰の胸の鎖を光らせる　明坊
喧嘩して中で立喰の群にゐる　小柳子
立喰の傍で自轉車こけるなり　彩泡
立喰の足許既に師走なり　亂耽
立喰に理性が殘る興ざめさ　源太
立喰へ夜なべの暦をつけてくる　艸樂
立喰も自由勞働者の構え　玲人
立喰を誘ふ男はマルキスト　同
立喰のゆんべステッキ忘れて來　節子
立喰へ女は待つてますと云ふ　史呂
立喰へたしかに今日も生きた酒　新水
屋臺ずし妻へ土產を思ひつき　九天
有名になつて立喰撮される　秋無草
（十）立喰の女給に燒芋熱すぎる　水咲
立喰は地位を放れて醉ふてゐる　柳笑
居臺店名士に似てる人に逢ひ　正光
立喰は脊なのほこりのまゝで來る　八步
立喰の男たもとで錢が鳴り　天國
立喰の人の往來を見はからひ　觀月
客と來て舞妓立喰に暇がいり　萬よし
立喰の客にきていてる串の數　ライト
立喰に來た驅逐師の老けてゐる　鮎美

五 立喰の一遍為を叱つとき　観月
立喰のまだ〳〵電車賃はあり　緩匂配
立喰に素面は端の方に立ち　某人
立喰に女の姿あらばこそ　寒木
立喰は赤い思想にもかぶれ　月麿呂
(人)月を見て立喰口をふいて出る　吉左右
(地)立喰の向ふの角は社會鍋　變人
(天)立喰を何たる奴に見つけられ　愚堂

席題　催促　鮎美選

備促へ風が雨戸を強く打つ　小柳子
催促の眼に表替えした疊　春秋
うなずいて催促のはかどらず　聞路
健促の手紙へ字引借りられる　破竹
悪友の催促らしい電話なり　牛疊
催促を上手にされて腹が立ち　南北
催促を聞いてる窓の蟬時雨　某人
催促に来たなと思ふ麝磨粉　秋無草
酔つてゐる呼吸へ居据りぬ　明坊
催促へ足がしびれて来るのなり　雀踊子
(十)催促をしてから寒い夜となり　破竹
締め直す帶女房は居催促　九天
寒菊は盛り催促たちおくれ　同
催促のふと道端を意識する　山雨樓
催促の女は化粧せずに居る　春光
妾宅へ来た催促にちとあわて　八歩
病人の咳が聞えた居催促　史呂
催促に来れば空家になつた風　明坊
催促の眼に判らない額の文字　水咲
門を出てからの催促あくどすぎ　遊舟
(五)ほがらかな催促。一度手をたゝき　かほる
催促の中の一人は銀煙管　華水
居催促奥から琴の彈じられ　里十九
催促の下手な男の人間味　九波
催促の初手はきつち上り込み　波郎
(人)催促へ他人行儀をして臭れる　明球
(地)催促に灰皿の水澄んでゐる　源太
(天)催促の顔に親しさうすらぎぬ　明球
(軸)催促にその捨科白待ち給へ　鮎美

席題　ポケット　水車選

日本人ポケットに何か入れたがり　山雨樓
同行のポケットを借りる登山服　華水
ポケットの底でたしかに握らされ　明暗子
ポケットに煙草のかすがあるはずが　沒食子
ポケットの小錢法善寺を抜ける　某人
ポケットに兩手を汝れを待つ久し　葉平
輕まれた葉書ポケットで二日たち　喜由
ポケットをおきへて拔ける戎橋　正光
ポケットの中で寒さを握り締め　某人
ポケットに錢の音させ玉を突き　愚堂
洗濯に渡すポケット多過ぎる　司郎
平社員ポケットにある新聞紙　史呂
ポケットを探られてゐる非常線　秀山
ポケットへ忘れたばかり妻へ知れ　彩泡
生酔のポケット腹の立つ車掌　白峯
(十)ひやかしポケットの手を動かすが　千呂
ポケットは輕く師走の街にゐる　白菊
ポケットの穴そのまゝに姉は病み　三碧
ポケットに母の手紙を握りしめ　鮎美
ポケットへ秘密少さく折つて入れ　靜波
ポケットに盃がある面白さ　春秋
好いた妓の兩手にまかす内かくし　變人
ポケットに止めた馬券を見つけられ　甘司
子の慾心ポケットはちきれそうだな　夕鐘
萬引をせしポケットとは見えず　観月
(五)ポケットへ繼子を手を入れて　幸捐
失敗の手がポケットにあるばかり　鮎美
ポケットの穴を見つけた日向ぼこ　豐次
別れ話手はポケットに入れたまゝ　丹舟
ポケットのハンカチ黑い獨身者　正夫
(人)ポケットの重さはつく　飲んでゐる　九天
(地)ポケットの温さしみ〳〵我が温さ　波郎
(天)無心聞く手はポケットに暖まり　水車
(軸)ポケットも冬のポースになるまつて

席題　双六　春秋選

繪双六拳固の一が上りなり　新水
双六へどつさり積んだ蜜柑なり　靖弘
双六へ今年は黐になつた姉　彩泡
愛の巣を訪へば双六してるとこ　緩匂配
双六へお母さん負ける役に出る　雀踊子
双六の蜜柑がへつた賑やかさ　聞路
雨になつて双六ひろげられ　彩泡
双六に勝つて父親錢を出し　美代坊
双六の邪魔して蜜柑貰つて來　坊茹子
双六へペンを忘れた父となり　素月
双六とはイコール童心に還る　月麻呂
一遍も上れぬ父の酒がさめ　串人
繪双六上りは大江戸日本橋　葉平
(十)双六へ酔ふたのが來てわやになり　三碧
お上りが我が子で皆に菓子をやり　甘司
双六へいゝ父さんになつてやり　八歩
振出しのように彌次喜多旅に出る　月麻呂
双六に腰の浮いたが勝つてゐる　華水
双六に負けお茶迄運ばされ　久郎

間分がなく双六へ無理が利き　某人
双六で遊ばうといふ吸入器　亂耽
双六の中へ出て來る國の母　幸捐
一の出て欲しい双六一が出る　正光
(五)双六に勝ち兄嫁は寒いなり　豐次
さいころの膝から落ちて上りなり　司郎
福壽草　双六外は羽根の音　佳峯
もう上る賽へ電話がかゝつて來　華水
双六へ嫁入り前の娘が一人　觀月
(人)双六の大學生は叩かれる　豆秋
(地)双六へ可愛い膝が押してくる　竹楓
(天)双六へ内の子火鉢退けさせる　かほる
(軸)わし　ネと振　て一回休みなり　春秋

兼題　銀貨　雨　迷選

掌にのせて光る銀貨の裏を見る　六朗
掌にのせし銀貨の色も冬のもの　葉平
べらした銀貨へ事務所皆動き　柳笑
微笑みへ銀貨あえなく消ゆるなり　緩勾配
行員の技巧に銀貨冴えた音　蝶之助
大晦日銀貨の音も冴えてゐる　矢名
子は固く銀貨握つて寢て仕舞ひ　錦雀
うらぶれてからの銀貨を握りしめ　吉左石
(十)苦力の微笑太洋銀のにぶい色　楚堂
人情を鋭く否定して銀貨　卜居
赤玉で銀貨淋しい音をさせ　三男坊
縄暖簾ズボンの銀貨たしかめる　春光
冷たき笑ひをさすも銀貨なり　靖弘
銀貨より一錢が要る無邪氣な手　いさみ
月給は銀貨の音のある封筒　當藥
善悪の心銀貨とにんげんと　鮎美
働いてゐるは奇術の銀貨なり　波郎
恩人を救ふ銀貨の二三枚　鮎美
(五)銀貨出す女の指が細過ぎて　破竹
腹掛けに銀貨夕陽の町を去に　某人
うれしさの手にある銀貨温うなり　明珠
落ちた銀貨が冬の音する　葉平
弄ぶ銀貨謀叛と迄ゆかず　麥魚
(人)子の出した銀貨ほゑ〻暖かし　六朗
(地)一枚の掌にある銀貨無表情　九波
(天)わびしさの夜の銀貨の光なく　天國
(軸)乞食の銀貨師走の陽をはじく　雨迷

兼題　徹夜　路　選

夜通しへ異國の酒は輕くなり　かほる
出前持霜の白さを云ふて去に　木醉
徹夜してジンの殘りを見つけ出し　麥魚
正月も近く徹夜に不平なし　方眠
(十)徹夜工事神經質にして仕舞ひ　昇鯉
徹夜して亥の元旦の風に觸れ　龍三
皆起きてゐるよ臨終かも知れず　艸樂
徹夜する髮が机に落ちかゝり　山雨樓
一睡もせぬ悠氣なり牡丹刷毛　沒食子
呑むところ訪れ訪れて朝となり　汀柳
呑み明かす話題滿洲國があり　九天
誰が儲けるのか徹夜させられる　遊舟
徹夜する氣の鉛筆をまたけずり　司郎
(五)一人去ねば徹夜は寒さセコンドよ　豐次
徹夜した朝の意識へ北の風　子鬼
母へもう寢て下さいと徹夜の子　吉左右
箸持てば徹夜の顏もほころびる　雨迷
徹夜して隣りへ濟まぬ金儲け　明珠
(人)徹夜の子覗けばにきび押してゐる　喜由
(地)夜伽の話だん〳〵故人ならばなれ　南北
(天)徹夜して筆で戰ふ二三日　亂耽

最高點12明珠、11鮎美、10某人、9月麿、8九天、同變人、同波郎、7亂耽同かほる、同九波、7觀月、6豐次、同愚堂、同天國、同吉左右、5竹楓、同華水、同美代坊

出席者順

路郎先生、南北、綠雨、柳笑、艸樂、機見女、史康、新水、白峰、雨迷、豆秋、禿山遊舟、青兒、靖弘、美那郡、水車、正夫、天風、似佐美、某人、久米雄、山雨樓、明坊、昇鯉、一夫、天秋、喜山、天國、緩勾配、四郎、呂花、小柳子、彩泡、いわを、三男坊、甘司、かほる、龍三、我堂、魚水亂耽、申仙、月麻呂、葉平、節子、豐次、某人、千春、雀踊子、當樂、春光、華水、沒食子、竹楓、春秋、幸捐、吉左右、正光夕鐘、汀柳、日華、與三郎、素月、奈里、串二、吉郎、蝶之助、明珠、九波、遊歩、靜波、觀月、卜居、秋無草、白菊、史呂、愚堂、清彦、伊知二、遊星、八歩、佳峰、玲人、白葉、波郎、三碧、まさじ、美代坊松太朗、坊茄子、子鬼、木醉、沐天、通天子、司郎、時夫、千呂、川弯、水咲、明暗子、九天、田中生、久郎、寒木、丹洲、晴夫、源太、立名、不路子、萬よし、聞路、守一、卯三、寒草、楳太郎、ライト、破竹、夏男、正明、清、翠夢、里十九、ひろし、正明、久美子

呑みある記

増位汀柳

師走だから御免蒙りたいのだが、卓球の重要會議に日本卓球會理事といふ役柄の手前、雨迷君と私は十五日の夜行で東上したのである。上京の動機は卓球であつたが夫れは半日で片付け、東京の川柳家との交渉が遂には川柳の話よりも酒の旅ともなつて了つたのである。

大阪出發の時から雨迷君は忘年會の中途より、私は大阪朝報社で川柳に理解のある永田整理部長の好意によるビールの堰の列に別れて驛へ馳けつけたので、兩人ともほろりとした足どりでスタートを切つた譯である。スタートがスタート丈けに車中は勿論卓球の連中との忘年會にも參加し全くアルコールの抜け切らない顏で、於玉ケ池の松月にある川柳研究の句會に顏を出したのであつた。

車京で東京の川柳家に逢ふのも句會へ顏出しをするも初である事と本誌の總務として挨拶を雨迷君がやつたので、醉眼の私も立たされ本誌の事やら大阪朝報の川柳欄のことを話した。

この席では澤山川柳家と知己を得た、句會は程なく終り、湯島天神のむぎとろへ三太郎、啞三味、陣居、花戀坊、太郎丸、愚佛、車山の諸氏に招かれて又酒盃を重ね打くつろいだグループ川柳家の氣持ちに醉はされた。

酒はうまくないと云つてビールを默々と干してゐる三太郎さん、私の隣に座つた爲めかしきりに盃を送られる太郎丸さんの童顏、右隣の陣居さんはいくらでもと云つた姿、向ひの愚佛さんは獨特の課題吟應用論に氣焰を擧げられ、車山さんは愚佛さんに半疊の入れ役、啞三味さんの如才のない接待と、花戀坊さんの朗かな身振りに、雨迷君は常にない酒量を發揮し私も心から川柳道に携さはるものゝ嬉びに浸つた、そして道を同じうする友これほど有難いものはないと思はされた

其處を辭してから呑み足りない私たちと思はれたのか銀座資生堂横のカフェーに三太郎氏は誘はれ、ヤマスギまで頑張つて痛飲をした。上十條の三太郎氏居まで二人が行つたのは午前一時半ごろ、私は二階の書齋で横にならして貰ふ。雨迷君は三太郎氏とビールの堰を並べてひとゝきの柳談に時を過してゐたらしい。

翌朝、起床十時、これも三太郎氏の愛娘雅皷さんに起されたのである、奥樣の心からのおもてなしの朝食と中食との兼用の膳にビールを三人で五六本、汀柳全く酒呑みのもてなしにあづかつた。

雨迷君は社用に川崎へ行く、三太郎氏と私は國民新聞社に啞三味氏を訪ひ本社の用件を果し、夜更に柳人の再會を約して銀座を歩るく、三太郎氏が居眠りに映畫でも見ようかと云はれたので、シネマ銀座に這入り、「エノケンの魔術師」をみて一時間餘り熟睡すれば約束の六時、銀座ニューパレスに行く。雀郎氏既にあり、啞三味氏來り、陣居氏が見える、花戀坊氏颯爽たるセビロ姿にて入來すでにビールは林立、然し雨迷君が來ないので親戚に電話をすると昨夜來の疲勞が出て寢てゐるとの事、一寸淋しいが私一人で東都の酒豪連のお相手をする、席は銀座から神樂坂へ

啞三味さん突如氣分が惡く雨迷君の跡を繼いで横になられる、實に相濟まぬと

粒々集

御影　長崎柳秀

腕組めば知慧は男に出ると決め
氣を換へて萬歳へ行く倦怠期
日稼の襖に張つた甲の上
夕刊の記事は夜長に見直され
二人の傘にも女氣をつかひ
すればなることを知つても懐手
愛嬌のよさが疵なりタイピスト
先輩の兎角自分のことを云ひ

松山　前田五健

鶴の目に靈長共の背の低さ
初詣子供の無事を先づ祈り
門松へ敬遠をするイー羽織
見なれたる山河であるが初日出
吉祥の聲だ春だよ飲みに來ひ
改札のあとが問へる御慶なり
一九三五年押の手さ押しの手さ
初笑ひ毬のころがる所から

思つた、然し心では濟まぬとは思ひ乍らも他の人々の好意による盃は否めず、雀郎さんの高島屋以上といふ聲色も聞かれた嬉びに私はつい時を忘れての寮園氣に浸つた。

もう少し寢かせたらよいといふで啞三味さんを殘し雀郎さんと別れ、三太郎、陳居、花戀坊さんたちと又席を下谷へ變えて、四人が深更まで盃を交した、いつまでも話しは盡きない恨みはあるが二人に別れ再び私は三太郎さんの宅に泊めて貰ふ。

翌十八日雨迷君の容態を案じて電話をしたが商用に外出と知り一安心、大阪に來ても酒ばかり呑んで飯を食はない－太郎さんが、けさは飯を食はうぢやないかと云はれたので、不思議に思つたが成程私も東京へ來てからこの時まで飯ゃ食つてゐなかつたのを思し出した、久振りの飯は有難い程にうまく頂けた、三太郎さん奥さん、雅皷ちやん一家揃つての親身にも及ばない心盡しに感謝をして午後三時の富士に乘つた。

東京では雨迷君とは行違つて逢へず、白河へ足を伸ばそうかと云つた事も實行出來ず、一人で歸阪した。

大阪へ歸つてからも最終の編輯に出社の路郎主幹と呑み乍ら土産話や本誌のことなどを話して午前五時となり、今度の旅はとう〳〵スタートからゴールまで呑みつゞけてゐた樣なことになつて了つた

寫眞

阿部閑生選

號外は空輸寫眞を滿載し　雅星
あの頃の寫眞を出して倦怠期　同
制服を名殘り卒業寫眞撮り　同
絶景に立ち寫眞機にまよはされ　天國
瞬間を待つ寫眞師は小手翳す　同
寫眞師の後から鹿がついて來る　同
失戀の自殺寫眞を連れて行き　禿山
指名犯己が寫眞におはへられ　同
サイン責めの寫眞に醉ふスター　同
グラビアの冬の寫眞は影を撮り　寒草
子の寫眞成長順に貼つておき　同
戀知りてカメラへ向ふ靜かなり　沐人
映畫班統監部から世辭を受け　同
現像室去年今年なき亂雜さ　凡平
赤ン坊いびな顏に寫される　同
大寫し涙ほんとに出てるなり　紫陽
飛行機の翼寫つた時事ニュース　同
アルバムに丸刈の頃懐しい虹子
寫眞機の工面もついた登山服　同
寫された丹頂の影水に折れ　文鳥
しみ〴〵と母の寫眞と同い年　同
成功も落魄も居る寫眞帳　春帆
薄命な母の寫眞が我を見る　同
初年兵寫眞はみんなまん丸い　稚仙
人形へ笑ふ瞬間撮される　同
思出の寫眞となりぬランドセル　彩泡
見られては悪い寫眞の置きどころ　同
ほんとうに撮られた寫眞が氣に入らず　菊路
候補者の寫眞へ母娘眼が違ひ　同
あばらやが特選にある寫眞展　青柿
空からの寫眞こゝらが僕の家　同
榮轉の寫眞に撮られ子澤山　たけを
勿體ない寫眞を四疊半にかけ　同
アルバムの幼姿をなつかしみ　利生

川柳家戸籍調（續）

（係）　綠雨

（1）姓名（2）雅號及別號（3）出生地（4）現住所　5）生年月日（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者及子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（437）　小田蛙庵

（1）小田博衛、（2）蛙庵、法輪、（3）廣島縣賀茂郡竹原町四五四九、（4）出生地に同じ、（5）明治三十七年三月十七日、（6）醬油釀造業並に樂生堂イレクトリック、ウエーブ治療所開設及木炭販賣（7）團扇では憎らしい程叩かれず、（8）工面のつかぬ重い足どり、（9）圍碁尺八、俳句、習字、藥草研究、（10）有女子二人、（11）魚屋の店先の臭、このしろ魚、何でも知つた振する人、（12）昭和七年度夏季中國民報紙上井上劍花坊選に投句

（438）　松井春帆

（1）松井實、（2）春帆、（3）廣島縣賀茂郡竹原町、（4）同所、（5）明治三十五年

肩組んで優勝チーム撮らすなり　同
アルバムをめくゞ若き氣が動き　小松
軍服の父を見つけた小抽斗　葉魚
引き伸す寫眞を擇ぶ佛の日　いね三
永久に母笑つてる寫眞なり　正祐
寫眞見る方に小さい片笑くぼ　十靜
軍服は未だ身にそはぬ寫眞來る　三男坊
針差の寫眞に曇る日もありて　竹雅
アルバムへ幼き頃を順にはり　蛙庵
この寫眞夏やせですと書き添る　美津女
盛會をマグネシュームが驚かし　芳泉
お互を許しカメラの前に立ち　彌生
滿洲の便りへ坊の寫眞入れ　双亭
最負目の修整丸い顔になり　華坊
寫眞屋におれの寫眞を見つけた　正柳
全盛はアルバムに貼り獨り住み　琴泉
思ひ出の寫眞懷かし白絣　峯雪
いゝ景色休めばカメラ向けられ　史郎
プロマイド集るだけの趣味を持ち　來水
慘劇の後へカメラを提げて來る　非常兒
花束を受ゞ飛行士へカメラ向け　玉芳
あらたまる寫眞希望の肩がより　新市街

肩組んでうつす寫眞を羨まれ　小櫻
キモノ着て撮つて異人が喜ばせ　しとし
親睦會おどけた顔を寫されてる　靜波
修整は上々女だまつてゐ　多駄詩
何氣なくふゝ向いたとし寫れて。　不路子
黑リボンせめて寫眞が飾られる　朝雨
友情のかく美しき日もありし　葉光
教壇へ落ちた寫眞が女なり　天風
來客に古い寫眞を見せてゐる　柳夢
郊外の秋を寫して陽が沈み　祥月
寫眞班決死で火口寫してる　世間音
アルバムの一枚剝がす見合ひ前　白英
遠足の寫眞を逃げる女店員　花鳥
頂上の寫眞忘れた頃に着き　呂香
伸び切つて幼き寫眞なつかしみ　綠水生
寫眞帳彼女いきなり居崩れる　令風
帶高し妻の十九の寫眞なり　曉童
紀念寫眞自分の顔をあてられる　歌都路
不自然な笑びを見られまい寫眞　史呂
軍服の馬上の姿同封し　笙人
女裝した寫眞のかづら重たそう　遊星

十月廿七日生、(6)銀行員藝備銀行(7)美しくそして悲しくひろめする(劍花坊)何ちらから吹いても春の風はよし(五健)(8)まだありません死ぬまでに一句はほしく思ひます、(9)刀劍、撞球、(10)妻娘一人、二對一です、(11)氣障な奴、人參の味、(12)昭和九年正月

(419)　青木史呂

(1)吉田勇四郎、(2)青木史呂、(3)大阪市西區花園町一〇、(4)大阪市西成區鶴見橋通五丁目四番地、(5)明治四十一年一月二十三日、(6)染服商、(7)ひとり居ればひとりは限りなく寂し(路郎師)(8)精進中ですので、(9)登山、映畫、(10)なし、(11)失業、(12)昭和五年五月

(410)　井田白英

(1)井田ひろ子、(2)白英、(3)京都市上京區衣笠南道町四、(4)同上、(5)大正二年七月十三日、(6)無し、(7)子澤山僕の枕はどこへいた、なあちろりこれから秋に親まう、有閑の表札もなく乳の函(路郎先生)先生の句で好きなのは擧げきれません。呑んでほし止めてもほしゐ酒をつぎ(葭乃)尙、山雨樓、綠雨、艸樂

招待

前田五健選

招待に世間馴した社長みる　歌都路
招待祭無暗に頭さげてくれ　花鳥
洋畫展ヒツソリとして招待日　雅量
連れのない招待祭を反古にする　白英
今日ぎりの招待祭へ時化になり　菊路
招待狀横文字なども書いてあり　美津女
招待の時間嚴守へ苦笑する　芳泉
招待へ欠伸の姿見られまじ　史郎
招待をされた選手の胸の中　虹子
招かれて世渡り論を聞いて來る　小松
招待の男異國の妓にもてゝ　新市街
娘の踊見て貰ひたく招待し　彩泡
招待席皆醬油を買ふた人　朝雨
其の日には招待寄附は後に入る　柳夢
招待の床へお世辭を云はされる　春帆
招待のテーブルに有る席の順　正祐
條件があり招待をすると云ふ　紫陽
外野から招待席が癪になり　利生
開幕のベルへ招待席マバラ　史呂
招待狀君が來ないと淋しいよ　禿山
招特は折と徽章を渡される　曉童
招待へ手持無沙汰の席にゐる　嵩喜固蓖
タクシーへ招待と云ふ手をあゝ　久米雄

（精銳吟）

招待の代理で來れば連れがなし　華坊
招待へ無口な儘で義理を足し　葉魚
招待の胸をそろへる大理石　新市街
招待をされて祝辭をよみにくる　寒草
皮肉じやないかと思ふ招待葉　光
招待は晝の廣間に醉ひつぶれ　祥月

○纏捲り漫評…代理招待の椅子に半掛腰のソワソワ振りも面白く、○義理で來た無口のカツチリ振り眼を御覽と申したい氣分渺々○大理石にならぶアッパレ紳士淑女社交技術で表面は兎も角爛ざめ程のあたゝかさあれど、一抹の底の冷たさ大理石と、ソレ如何と、數學問題が出さうに思はれ○わざ〳〵祝辭を讀みたてまつる。ノコシヤンの浮世の儀禮、即へぬ末席からの拍手も、考へればおかしく○此の俺れに招待フーンと笑ふた處女林燃へるの如月凜ちヤン式○晝は袴の折れ目迄氣にした男が招待氣分に憐れ醉つて候と矢禮の段々何づれ社會斷層面、招待レンズを通して見た川柳稿銳吟、深評御免。（健）

豆秋、耽亂、機見女、丹路、鮎美氏等の句が好きです、(8)自信の句などございませんが自分で一番好きなのは、男になりたい日のあり廿一、(9)讀書、編物、活花　茶の湯、刺繍こう書けば相當なもんですがみんな嚙つてゐる程度、(10)共に無し、(11)お世辭、猜疑心、(12)昭和七年一月化粧新聞に始めて投句。

（二二）　宮内耕朗

(1)宮内義輝(2)耕朗、志波椰子(3)松山市唐人町三丁目生、原藉愛媛縣溫泉郡小野村大字北梅木一三一四番地(4)臺灣臺中市榮町壹丁目貳番地(5)壹千九百七年五月貳日(6)洋服商經營(7)酒とろり〳〵大空のこゝろかも(路郎)大佛の鏡杉をぬけ杉をぬけ(五葉)赤松のみどりが僕を生んだ村(山雨樓)(8)乙女の頰べたで陽がはね返つてゐる、あたゝかい飯を食ひすぎた自分である、この頃の生活　眼鏡が落ちそうだ、自惚るにはまだ早やすぎます既成句中好まな程度です(9)柔道初段、本年はあこがれの新高を踏破しました、自然の大氣にふれる事が唯一の樂しみです(10)未婚者ですから從つて子供はありません(11)その塲限りの事を計ふ人、嘘に類する事一切、蛇、(12)昭和四年壹月十日と言ひ切る事の出來る僕です

各地柳壇

いのちあるる句を創れ

理整・樂艸・雨綠・路則

川柳雜誌社 簸川支部大會（島根）

句會百回記念川柳大會を十一月三日旅館片岡支店に於て開催、綠之助開會の挨拶、次で路郎主幹、綠雨、山雨樓、あん馬諸氏の祝電神戸支部其他の祝辭を代讀し、席題の句作に耽り、記念寫眞の撮影、兼題席題の披講、記念寫眞集句の發表等暮れの色濃き六時閉會した當時の出席者次の如く、地方空前の盛會であつた。（綠之助報）

出席者　三十五名

兼題　思ひ出　雷　相選

同窓會思ひ出多きことばかり　天雲
思ひ出のどれも私をさみしくす　曉童
思ひ出はありし土藏の落書よ　朴宗
思ひ出に眼尻細めたマダムです　華村
あの頃の氣持がわかる古日記　彌生
思ひ出の傷にセンチのつのるなり　草路
若かりし頃の寫眞を繰つてみる　路則
思ひ出は悲し位牌の色褪せて　綠雨
思ひ出はつきずそのまゝ飯にする　樂艸
暗然となる思ひ出の戀なりし　雨綠
思ひ出は仙臺平の酒のしみ　整理
爪彈きの藝者に思ひ當る事　春
思ひ出の唄のしづかな秋の晝　紫光
思ひ出は遠し都會によごれてる　奈翁
ひろがりて行く思ひ出に夜が更け　綠之助
思ひ出の過去は冷い夢ばかり　砂詩朗
思ひ出の中の一人で生きつゞけ　津根三
思ひ出にひたり靜かに目をつむり　羅門
思ひ出を捨てゝ口紅強く引き　沈丁花
（人）悲しき思ひ出を爪彈に持つて行き　張古墀
（同）思ひ出の糸をたぐつて涙する　一歩
（同）思ひ出の數を展げて爪を嚙み　千坊
（地）思ひ出がだん〳〵夢の國へ來る　蛙庵
（同）思ひ出をたどり虫干たゝんでる　美稻
（天）思ひ出は小春日和の蝶を追ふ　汀雨
同晩秋　柳　比佐緒
稻も刈り亡き子を思ふ農夫です　紫吻
晩秋の鐘がさびしい山こだま　千坊
小農に幸なし紫にくれる秋　華水
晩秋の陽ざしがにぶく藥瓶　琴月
下駄音に冬の近きを知つた宵　沈丁花
晩秋の陽俺は片戀よ　章泉
泌々と身に晩秋のせまり來る　華水
晩秋へ心さみしい一人者　春陽
晩秋の陽ざし斜にふところ手　華村
晩秋の街さみしく時雨する　比佐緒
晩秋と知る風女給募集ビラ　帆哉
百舌が鋭く冬を叫んでゐる　美稻
晩秋の佛の顏が有難し　八歩
（佳）晩秋の日の色うごく蝗をみち　羅門
（同）晩秋へ今宵も酒の連れとなり　祥月
（同）晩秋の雲は故郷へ飛んで行く　夢人

柳人選　山川兒　木骨　綠之助　琴月　沈丁花　章泉　華水　春陽　華村　比佐緒　帆哉　美稻　八歩　羅門　祥月　夢人

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字は正確明瞭に記載すること
三、締切は毎月末日とす
四、投稿先は本社事務所又は

(同)晩秋や足元寒く落ち目なり　卷二
(人)晩秋の日射しへ祖母の背が丸い　承春
(地)掃き溜めにも秋がちゃこりま　津根三
(天)晩秋や掌のひらに陽を溜める　好郎

同　足　羅門選

投げ出した足へ明日の生活苦　雀頭
おちぶれて伸び切つてゐる足の爪　八歩
足元のかるさ明い家が待ち　一歩
足の爪些か老ひを知り初め　紫吻
足で直した座布團を叱られる　春帆
レビューの足へ噂する若さ　彌生
重さ足の軍歌に黄昏るゝ　山川兒
足音にゆとりを知らぬ都會なり　美稲
轉向のその日の足は土に立ち　柳人
(佳)勞働に疲れし足に虫が鳴く　朴泉
(同)元の宅へ直る素足は見直され　華水
(同)手や足がみんな揃つてゐて悲し　津根三
(同)片足のそれし蝗に秋深み　雷相
(地)陽へ足をのばし見る晩秋の眞晝　好郎
(天)ふんばつた足續樂の朝ぼらけ　朴泉

席題　鼻　紫吻選

女の鼻が白々とある夕暗　華村
心臟は高鳴る鼻の息白く　琴月
茶人の意志鮮明な鼻形　幹夫
鼻をかむ子供に藥出來上り　奈翁詠
いゝ鼻とほめてすつかり惚れてゐる　祥月
先生の鼻親しみに丸いなり　緣之助
(客)コンパクト鼻をたゝで用がする　柳人
(同)いゝことの豫感にに鼻がうごめく　緣之助
(人)本心をたゞす日の鼻うごくなり　八歩
(地)鼻低く隆鼻術など考へる　比佐緒

(天)この多忙課長は鼻毛拔いてゐる　紫光

同　灰　帆　哉選

灰汁桶に秋の夕陽がたゞようて　美稲
灰積んだ車にひどい風があり　柳人
爆笑に煙草の灰が飛ぶもよし　羅門
灰皿の水へポツトういてをり　琴月
灰かへて椋鳥の鳴く朝である　石楠花
別れる日灰の白さへ涙ぐみ　八歩
灰皿を見つめて金のない思案　比佐緒

同　嘘　津根三選

嘘にしてをきたい失戀の夜　奈翁詠
嘘いふた情が實になる女給　木骨
その嘘が金になるかと叱られる　祥月
嘘だとは知りつゝ君にだまされん　紫先
嘘だとは知りつゝ出してくれた母　沈丁花
嘘ついて歸る子供のいぢらしく　琴月
嘘だつたことを笑ひで消してゆき　一光
金になる嘘女給の目に宿り　帆哉
鐵妓から可愛い嘘をきかされる　雷相
嘘と嘘結局ものになりもせず　田鶴緒
嘘多き世をちがめる廻り椅子　卷二
嘘をつくことにも慣れて世帶じみ　八歩
(氣)偽りは襟の冷たさかき合せ　石楠花
(同)はつきりと嘘がほじれた生活苦　張古塀
(同)方便の嘘に男のあからさま　紫吻
(人)嘘ついて煙草の煙けむたがり　石楠花
(地)自然には嘘はなかり木の葉散る　柳人
(天)嘘でした女一人になつて泣き　草村

同　食　堂　卷二選

食堂へがらんと朝の白い風　張古塀
勝算は胸に食堂を大きく出　柳人
食堂の壁の暗さも十一月　八歩
食堂をまだ呑み足らぬ顔で出る　津根三
食堂に秋の爪剪るをんなたち　羅門
朝やけの食堂のドア疲れてた　石楠花
(佳)食堂は色氣のないが酌いでゐる　夢人
(同)食堂車靜かに酒が動いてる　紫光
(同)食堂でまじめな戀に突き當り　紫吻
(同)食堂でスプーンの音の師を知る　草村
(同)食堂の朝は靜かなゴレ樣　奈翁詠
(同)食堂車よろけ所を席にする　沈丁花

同　靜　寂　田鶴緒選

靜寂に何時とはなしにれて了ひ　草路
夜のしゃま煙草の煙まつすぐに　紫吻
生活苦この靜けさを何んとせう　石楠花
團體がざや〳〵過ぎて眠る町　津根三
靜寂へセコンドだけの夜更けなり　琴月
靜寂に寂寞氣じん〳〵脊を走り　孝太郎
靜寂へひろがつて行く妄想　雀頭
(客)靜寂がおごそかにしてゐる夜の社　木骨
(同)靜寂の床に椿の散つた音　奈翁詠
(同)靜けさに情炎くすぶれり　緣之助
(同)うつろなる靜寂を嚙れ大欠伸　大朗
(地)潛息はひゝく靜けさに月ばかり　緣之助
(天)呑喇の中にこんな靜寂　好朗

同　ペンキ　比佐緒選

高層にペンキ塗つてを蒼い空　美稲
失戀の眼に痛すぎる赤ペンキ　夢人
ペンキ塗れば合名會社となる家で　石楠花
ペンキ屋のいつてよごれていゝ姿　奈翁詠
刑事宅ペンキのついたまんま立ち　張古塀
ペンキ屋の眼下は花の人通り　津根三

ペンキ屋の唄がきこえるバルコニー　球月
宮様がお成りペンキに淡陽して　緑之助
（客）ペンキ屋の技巧が利いた總看板　紫吻
（同）公園の五月ペンキも春の色　八歩
（同）七階を塗るペンキ屋の煙草の火　緑之助
（人）ペンキ塗る手に自信ある血が通ふ　祥月
（地）保護色でないペンキ屋の服の色　巻二
（天）復興の意氣にペンキの街が出來　柳人

同　隣　華村選

吊皮は隣へ氣兼ねせずゆれる　雷相
隣の猫がうらましい戀　田鶴緒
隣へも少しひゞいた口小言　紫吻
夜遅く隣の犬に吼えつかれ　緑之助
獨り身の氣まゝを隣に羨まれ　比佐緒
隣迄行く洋服は女下駄　津根三
お隣の謠曲が低く雨の夜　美稲
おとなりへすまなく金をためる音　張古塀
空虛なる心に隣の三味が鳴り　汀雨
たつた〳〵が出來て隣の笑ひ聲　琴月
隣はにぎやかに人居り秋の晝　羅門
（人）隣ならぬ子等歌ふ朝　好郎
（地）お隣の口を氣にして病んでゐる　沈丁花
（天）隣から餘慣を受けて二人住み　紫吻

記念募集句　路郎先生選

力

添乳して育つ力は日に強し　華村
向上の一路!!力の誌が生れ　祥月
握り合ふ手と手に若き力あり　小樓
力ない字が失業を物語り　美稲
評判の力持ちなり無口なり　砂詩朗
生活に力のぬけた靴をぬぐ　津根三
指南力力で行かぬ面白さ　帆哉
無氣力にドア押し開けて來た遅刻　可保留
力走や運動會の陽がおどり　氷月
取りもつてくれると金の力なり　逸行
本當の力を拔いてたゝかれる　張古塀
たよりなき我が精力に生きのびる　正治
人生に金の力が強すぎる　夢華子
下座から金の力を見せられる　明珠
おろかにも女に力を笑はれる　巻二
どう工面してか祭をみるに着せ　曉童
スクラムの力味方のボールなり　華水
ついうかと酒の力を借りて言ひ　雄平子
起重機の力ゆるんで陽が落ちる　野生
天井へ俺の力を知らぬ妻　春秋
金力へふと良心のみだれたか　彌生
傳令を無事に果して力盡き　芳水
事毎に金の力を見せられる　春帆
お力になるとは地位が言はすなり　承春
腕力にたより獣的ちらんとし　二郎
子の力枕一つを持てあまし　芳丸
粥たいて力をかこち世をかこち　雷相
實力を萬年床で疑ひぬ　悍馬
力して生きねばならぬ父母在はす　松雨
力み通せば脊筋を走る冷いもの　蛙庵
（客）海の如き力で歩み寄る日なり　羅門
（同）教育の無力を知つて居りながら　阿方
（同）力學の冷たき對者なる機械　緑之助
（同）力なく時計十二をうちは打ち　曉童
（同）だまされてからの力がおそろしい　虹子
（人）へぼ力女ばかりへ出して見せ　松香
（地）牛ほどの力を持つて使はれる　承春
（天）音のせぬ靴で力を忘れたり　巻二

百　米村あん馬氏選

百圓をくづさせて無事な旅の朝　華村
百獣の騒ぎをよそに眠る獅子　津根三
五百羅漢の塵の光も秋　羅門
百才の人も毎年年を取り　帆哉
百才といふ高齢に唄があり　氷月
百日目母の乳房を間違へず　柳人
妹を賣つた百圓札百枚　春秋
葉卷吸ひつゝ百圓札もてあそび　雷相
空想に百年の大計たてゝみる　満女
百萬の味方にたとへ借りんとし　二郎
（人）百年といふ大木は抱えられ　可保留
（同）百圓で買つたがブルドック　張子塀
（地）人と生れて百圓札にうごく氣　緑之助
（天）球を百撞けば百撞く友が出來　明珠
（軸）八百萬神在月にこの歡喜　あん馬

覺　悟　尼　緑之助選

決行を誓ふは默つてすつと立ち　春朗
覺悟した部屋の空氣は冷たかり　明珠
編物を置かず女のいゝ覺悟　柳人
覺悟してゐたか死ぬ日の鶏鳴かず　津根三
人民の覺悟の中の天皇旗　虹子
子が出來て明日の覺悟の貯金帖　野生
覺悟した顏で柱にもたれてゐ　華水
煙草止す覺悟は出來てこの一本　阿紗緒
添ひ遂げる強い覺悟がありましか　朴泉
おじぎしたこゝろの底にある覺悟　羅門
三人が覺悟を決めて呑んでくれ　曉童
（客）なぐられる覺悟に出て男の子　野生
（同）うと〳〵とまゝ覺悟の夜がひらく　雷相

(同)覺悟して脊へ冷たい汗を知り　小松
(同)死ぬ覺悟出來て人間小さく見え　芳泉
(同)覺悟して來た言ひ拔けを叱られ　可保留
(人)覺悟して這入る敷居にけつまづき　津根三
(同)僕は飛車僕は巷に成り込まう　悍馬
(地)覺悟して寢る手枕はずり落ちず　明珠
(天)結は生きる覺悟にしかならず　柳人

阪大川柳會例會（大阪）

丸島利生報

兼題　腹　路　耶選

太腹らしく見せても知つてるよ　利生
おれの腹わかるまいがと猪口をさし　同
腹藝はもう澤山だお茶にしよう　方正
裸女像の買主つゝいてみ　貞三
腹の虫居所惡し髮の出來　楽
顏見ても腹が立つわとツンとする　青一路
去んでから肚が黑いと敎へられ　同
そんなこと片腹痛いと坐り換へ　正甫
醫者なんや御前の腹を打ちつ押し　筑川
はつきりと言はず出さない肚をきめ　芳一
腹にないお世辭も言へる年となり　路生
(五)お腹も立ちませがとつかへてる　湧三
(五)嬉しいお腹痛に亭主あはてたり　楽
(五)太腹消費も多く財も寄り　方正
(五)肚きめて男男に向ひ合ひ　芳一
(五)腹這ひになれば煙草を吳ぜ云ひ　路生
(人)一通りメニューを見てる腹工合　たけを
(地)義理がたう生れた爲に腹が立ち　あさ女
(天)腹の子の父を訪れて道遠し　湧三

兼題　足　場　路　耶選

足場だけ組んで左官は日を延し　あさ女
倉普請足場を下げて塗り下り　同
足場がよくてマダムも別嬪で　利生
足場まで法被のろけを持つて寄り　柳秀
雲をつくビルの足場を寒う見る　同
事ありと見えて足場の人だかり　利生
チンヤンののろさ足場にごならる　同
足場踏む仕事は母を案じさせ　同
足場だけ作れば生の終りなる　柳秀
足場には娘の惚れた弟子が居り　方正
足場には役者くづれが一人居り　楽
辨當も足場の上でとる身なり　同
背の高さ足場がわりに使はれる　貞三
踏みはづしそうな足場に俺は居る　青一路
お守を渡し足場へ送り出し　路生
(人)出世する足場の顏で書生居る　芳一
(地)ぐらついた足場にあつて享樂す　同
(天)足場からチヨイナ〳〵が流れて來　方正

雜　吟　路　耶選

獨り居れば餘命幾許秋そゞろ　青一路
他人の世話が面白半分に出來まず　方正
勉强は出來そこに見えぬ子の机　同
何に云ふてなはんれと段梯子上れ　柳秀
泣き相な聲ソプラノは伸び上る　路生
純喫茶シヨパンのれぢはゆるんでる　同
くれてやる氣持で火災保險かけ　同
醉しれて戻る炬燵のあたたかく　利生
山門で婆さん一ト腰のして行き　氷炭

席題　散　髮　路　耶選

重荷を下ろしたやうに首相髮を刈り　青一路
セーヴインゲおあづけ喰つた姿なり　湧三
散髮屋自慢の菊を見せてくれ　たけを
散髮屋無口の人に活しかけ　同
いればぶりへ手間をぬいてる散髮屋　柳秀
民政と腹を決めてる散髮屋　同
散髮屋王手のまんま鋏持ち　利生
散髮に行く間もないと儲けてゐ　同
散髮は會後に廻す大晦日　同
(人)刈つてゐる鏡の顏へ默禮し　芳一
(地)邪魔になる毛はバツサリと落される　路生
(天)散髮屋逢へる男にして吳れる　柳秀
(軸)散髮にその日暮しの疲れが出　路耶

風水害　負傷

靜波氏見舞吟（大阪）

九月二十四日　於稻葉病院　水谷鮎美報

目醒むれば君はベットの人なりき　觀月
無我夢中愛の翼の君なりし　同
ふと見ればこんなとこにも傷がありし　同
君の負傷祈りは永遠にやぶられし　鮎美
翌る日の生命は九月二十二日　同
翌る日は病舍の窓の明るすぎ　同
怖ろしい事實でたべットに林檎むく　同
頰髭のつたふや君のこゝろよき　同

靜波鮎美對座吟（大阪）

長　女

靜波長女もう白粉つける秋となり　靜波
出戻つて長女さびしく住みなれる　同
長女二女三女と女ものの秋　同

せいもん拂女中の好きな柄があり　鮎美
せいもんに素通りをした松竹座　同
せいもん拂その姉妹の氣がそろひ　同
せいもんの出平へはこぶ露路を　同

せいもん拂妓はおもしろく二階にゐ　同

川柳雑誌社竹原句會（廣嶋）

十一月十日　於藤原登仙居　町田承春報

兼題　チップ　呂烈選

投出したチップへ笑顔ものたらず　彌生
チップ貰へばゆるむ筋肉　蛙庵
帶といて其の日の眉を勘定し　芳泉
ノオーチップ女給案外らしくゐる　承春
大理石チップ銀貨の音で受け　承春
錢湯へチップのはしを持つて來る　春帆

兼題　土　春選

つまづいてふと見返した土の面　彌生
一塊の土さびしまる一週忌　呂烈
赤齊や山陽生みし誇る土地　登仙
（佳）百姓の汗にむくいてくれた土　芳泉
（佳）外出の妻は泥手ですがられる　春帆
（佳）百姓も土だまつて冬に入る　呂烈
（軸）道問へば泥手のまゝで教へられ　承春

兼題　待　呆け　彌生選

待ぼけへ巡査不査な目むける　芳泉
興奮の顏で待ぼけ歸へつて來　芳泉
待つてゐてパット十本吸つちまい　呂烈
待ぼけへジレッタイ程月は冴へ　春帆
（佳）待呆けのチョークが折れる告知板　蛙庵
（佳）待ぼけへ冷えきつてゐる猪口なめ　春帆
（佳）それらしい人も下りない終列車　承春
（佳）待ぼけのうつろな月に見あてる　呂烈
（軸）小半時待つて不參の使者が來る　彌生

席題　不　不　芳平家の兎角仲間に嫌がられ　泉選

登仙

下腹へアツトおさへてゐる不平　彌生
佛心になつて不平のながりける　承春
（佳）滿たされぬ心がよめた顏の相　承春
（秀）差向ひ不平なだめてつで吳れ　彌生
（軸）不平など四割があるよ米の飯　芳泉

席題　引越・味噌汁　披稿互選

引越の新世帶らしい荷物で來　承春
子供早引越の日に連が出來　彌生
味噌汁がつまると薄團はさに來る　承春
口ひげの先に味噌汁光つたり　呂烈
家賃だけ殘して引越無事にすみ　呂烈
引越の荷物へ子供乘せて來る　承春
引越てゆく挨拶の腰が滯き　呂烈
金槌の音お隣へ來た氣配　彌生
引越の後に鮒だけ住みのこり　呂烈

十一月二十二日　於藤原登仙居　町田承春報

兼題　半　襟　春帆選

半襟の慾しい値札へあきらめる　芳泉
半襟も人妻と云ふ地味な色　承春
半襟へその人柄も見へてよし　春陽
半襟へふんわり包む白い首　彌生
（佳）女氣の半襟の柄よりあぐみ　同
（同）半襟に生活色がしみて秋　呂烈
（秀）半襟の胸情炎をつゝむに似　同
（軸）半襟の肩がやさしい長襦伴　春帆

兼題　眞　夜　承春選

眞夜中を靜にあける我が家の戸　春陽
眞夜中の端唄巡査にしかられる　春帆
一人者眞夜に猫も入れてやり　廣志
眞夜中の電報嚢卷のまゝで出る　蛙庵
（佳）カタコトとたゞ下駄の音　呂烈

（同）夜明けかと思へば時計一ツ打ち　芳泉
（同）眞夜中の橋へ女が凄く立ち　春帆
（人）さし向ひすら〳〵云へず夜ばなし　呂烈
（地）ふと眞夜夢とぎれたり猫の戀　彌生
（天）眞夜中の鏡見つめて恐くなり　芳泉
（軸）戸毎皆れむりにおつて月が冴へ　承春

兼題　轉　寢　長夫選

轉寢の目覺めてクシヤミ二ツ三ツ　登仙
御人形とうたゝねしてる子の姿　承春
轉寢の顏を子供につゝかれる　芳泉
轉寢の欠伸の長い倦怠氣　彌生
轉寢の目覺めて見れば膝枕　蛙庵
轉寢の息が大きいパヽの顏　春帆
轉寢のトばし浮世を忘れけり　承春
（佳）晩酌を過した儘の轉寢　登仙
（同）轉寢の母の乳房へ子の寢息　承春
（同）轉寢をそつとのぞいて着てくれ　春帆
（人）寢不足へふと轉寢の午下り　彌生
（地）一日の勞苦が見へた肢枕　承春
（天）轉寢へふと厄年を思ひ出し　芳泉
（軸）轉寢の氣持を知つた空財布　長夫

席題　雑　誌　彌生選

はなやかな前途を見せよ創刊號　芳泉
氣まくれに古雑誌など讀んで見る　承春
吾駄句の載つた雑誌を人に見せ　登仙
カロリーを雑誌にひろろ新世帶　春帆
（人）主婦の友主婦の氣持になつて讀み　承春

（川柳雑誌を待つ）

（地）待ちはびる雑誌が來ない月始　春帆
（天）讀みさしの雑誌炬燵にせて立つ　蛙庵
（軸）續篇を聞くにお隣も月後れ　彌生

席題　前借　呂烈選

前借のそれから彼の不行跡　蛙庵
前借か返して親娘無事に倉ひ　芳泉
前借をあてに節期なかるく見る　彌生
前借の敎子救ふ記事に泣　登仙
先借で來たとは知らず藝者惚れ　同
先借をしてゐる月の味氣なさ　芳泉
前借の父も淋しく屋方を歸る　春帆

席題　座蒲團　芳泉選

まあ〳〵と薄い座布團すゝめられ　呂烈
高笑として座布團へ座をなほし　承春
座布團を踏んで蹴つて座つてゐ　辰夫
座布團へ親分らしい大あぐら　蛙庵
座布團の柄艶ぽい藝妓部屋　春帆
（秀）床の間の座布團いたくかしこまる　春陽
（同）重役は別な座布團すゝめられ　春帆
（軸）座布團へあぐらをかいて父のまね　芳泉

席題　霜　春陽選

霜夜なく犬の聲までとがるなり　呂烈
霜の道黑々とある焚火跡　蛙庵
（佳）霜ふめば悲痛なしみだと思ひ　呂烈
（佳）霜柱ふんで家鴨の長い陣　蛙庵
（佳）霜除の中で寒菊香ふなり　芳泉
（人）三更の月光冴へし家根の霜　登仙
（地）大事そうに霜やけの手をかへる　承春
（天）霜柱ふんで生活線へ出る　彌生
（軸）霜ふんで働く顏の艶のよさ　春陽

席題　霜　春帆選

三更の月光冴へて屋根の霜　登仙
霜除の中で寒菊にふなり　芳泉
三更の白き霜路を戻りたり　登仙
早立ちのわらじにきしむ霜柱　芳泉
霜柱ふんで家鴨の長い陣　蛙庵
地下足袋を踏みしめて出る霜柱　承春
（秀）霜の道黑々とある焚火跡　蛙庵
（同）大事そうに霜やけの手をかへる　承春
（人）霜夜なく犬の聲までとがるなり　呂烈
（地）霜柱ふんで生活線へ出る　彌生
（天）霜ふめば悲痛なしみだと思ひ　呂烈
（軸）何れだけがせぐか農夫霜柱ふむ　春帆

川柳雜誌社神戸部友句會（神戸）

十一月二十日　於華水居　明珠報

裾　春秋選

病人に裾の破れを見つけられ　華水
ペンネーム富士の裾野で想を練り　幸捐
水遊び裾をぬらして日が高し　明珠
豆辭引ひいて胡坐は裾をいれ　幸捐
働いた證據の樣に裾がきれ　明球
（人）（ピカピカと光る廊下で裾がすれ　同
（地）裾ひいて妓はすんなせる秋の宴　竹楓
（天）裾はれて臺詞に力入れてゐる　華水
（軸）スクールトスチッキフルット春の裾　春秋

竹楓選

處女であり選手であつて花鋏　春秋
結婚がそこまできてる花鋏　明珠
電燈を下し鋏の先を使つてる　華水
交番所前へ鋏を借りに來る　幸捐
小鋏の手工は兄の智慧を借り　同
（軸）疊の西陽へ鋏キラリと投げられ　竹楓

大理石　華水選

大理石の冷たさに似た人情だ　明珠
大理石あやふく自省する私　竹楓
大理石ばかり見上げる國の母　幸捐
失業の悲しく ふれる大理石　明珠
資本家をけなして大理石を蹴り　同
大理石タイピストの細い眉　竹楓
裸婦、まひる、胸、乳湯殿の大理石　春秋
（軸）吸殼が落ちて拭かれた大理石　華水

天保錢　幸捐選

天保錢縞の財布の重さかな　竹楓
天保錢幅を見せてるコレクション　同
古錢表天保錢に押えられ　春秋
原稿の重しに天保錢があり　明珠
裏を見て天保錢は膝に置き　同
昭和の燈天保錢の裏表　春秋

電話　明珠選

待ち詫る電話嫉妬の未亡人　幸捐
會ふとこが決まり電話がきられた　華水
云ひ負けた方が受話機をかけちまひ　同
公衆電話へ夕陽がカット照り　竹楓
近所から電話がかゝる別莊地　幸捐
（佳）卓上へつながる聞くいゝ電話　春秋
（同）取次ぎの帳場は背中見せてゐる　竹楓
（軸）電話口弱身と見えて受け答へ　明珠

川柳雜誌社螢ケ池支部慰安と會（螢ケ池）

十一月十一日　石森靜太報

路郎師をお迎へして　漫談とハーモニカの
午後を開く　此の日快晴、陽の流れ美しく、
今更乍ら路郎師の熱辯に醉ふ。飛入として、
山雨樓、艸樂兩先生の謠あり一層に彩ごられ
し催となり與三郎、史呂兩兄の非常なユー

モアの司會ぶりに聽衆一同の笑ひ續く。風邪を押して、出演下さつたハーモニカの山本白夢氏の悲壯な顏に支部一同感激。尙遠く神戸より明珠、貧兒の兩氏のお顏を見たのは望外の悅びであり。三時レコードに送られ盛會裡に散會 後 小娯樂室に集會を開く。

路郎師、山雨樓、艸樂、豆秋、明珠、與三郎、史呂、夏光、貧兒、白夢、諸氏に厚くお禮申上げます。

兼題 上 戸 路郎師選

泣き上戸種を見つけた顏になり 靜太
よいとこへ來たと重れて飲む氣なり 登志男
履歷書にお酒呑とは書いてなし 恒夫
記者團へ飲ける首相で親しまれ のぼる
泣き上戸笑ひ上戸に灯がついた 靜太
朝酒へ隣りの猫も來てゐたり まさる
酒とろり妓の鼻高くみゆるなり 靜太
(人)晩餐に一本ほしい療養所 錦雀
(地)田舍からたゞ飲むだけ父が來る 青鬼
(天)ひとり呑め秋はひりのものなるか 綠紅

兼題 手 袋 山雨樓選

眞新らしい軍手を持つて立ん棒 史呂
寒々と手袋がゆく戎橋 與三郎
お父さんの軍手で顏をなぜられる 同
手袋のまゝで無沙汰の手を握り 豆秋
妻若く炊事手袋買つて來る 史呂
手袋で器用に釣剩錢を出す車掌 同
手袋を脫いでわざ〳〵つれられる 豆秋
戀敵の革手袋と握手する 千里
貧乏人の新の手袋ぎこちなく 遊子
手袋をはめぬ子もゐて日なたぼこ まさる
女中さん手袋ぬげばあれてゐる 錦雀
船場にも住み馴れ軍手はき馴れる 史呂
看護する人は手袋あんでゐる 登志男
煙草屋が見えて手袋脫ぎはじめ 公平
手まで痩せるのか手袋の手をなで 眞人
編掛けの手袋もある留守の家 浮鬼
手袋をとつて焚火の小僧さん 綠紅
盧鶴の袞の絹手袋が光るなり 松雨
鮮人の子に手袋の片ちんば 眞砂夫
女中さん手袋ぬげば淋しいれ 澄魚
手袋の指が出てゐる夕刊賣 六朗
(人)手袋をあんでる口に唄が出る 綠紅
(地)朝の冷え軍手の油にほふなり 松雨
(天)袋の雪が光つた我家の灯 艸樂選

席題 雀

臨終の迫る妓へ雀とぶ 靜太
豐作へ雀はけなるそうに群れ 史呂
秋の朝雀一羽落ちてきた 梨風
こな藥雀の來ない日は淋し 松雨
雀どもこの病院に餌があるか 青鬼
空氣銃戸樋の音して雀逃げ 與三郎
强い風雀は何處にかくれてる 山雨樓
追へば又巢を廻つて來る雀 與三郎
贅澤な暮しへ雀降りてくる 山雨樓
空怨をかすめて雀とびたつた 公平
(佳)戀をすて雀となつて飛ぶのです 靜太
(同)雀の巢から覗いてゐる吾がしく 明珠
(同)びつくりをさせ雀にすまなんだ 豆秋
(同)子雀が一番前の餌を拾ひ 山雨樓
(軸)手にとまれば雀も奇麗な羽根を持。 艸樂

席題 錢 明珠選

錢よりも命のほしい秋が來た 與三郎
錢の音こうもさびしい冬となり 同
錢吳れて見舞も言はづ歸るなり 青鬼
小春日や乞食の前の五六錢 山雨樓
錢 錢友の心が離れ行き 與三郎
番臺の冷たい剩錢へ師來る 山雨樓
錢一つ握つて子供寢てしまひ 豆秋
錢の音させて優越感なのか 青鬼
葬儀所でやつぱり錢の音がする 史呂
惜しがつて車掌小錢の釣剩錢を出し 山雨樓
錢の音させて屋臺へ首を入れ 與三郎
金もなくお山で淋しく寢てゐます 梨風
泡盛屋手汗の錢をおいて出る 史呂
夢うつつ錢をかぞへる音を聞き 松雨
何事も錢の力に負けてゐる 梨風
錢を握つて來て濕の名を忘れ 艸樂
錢の事となれば筆とる筆不精 蔦女
ノーマネイ道頓堀の灯が近し 綠紅
(佳)錢吳れる人に馴付いて親がでし 青鬼
(同)道頓堀朝のつめたき錢ひらふ 靜太
(同)みな錢といふかなしい藥のなで 同
(錢を拾ふ)
(同)五十錢冷たく落ちて土を汲ひ 山雨樓
(同)遊びから錢もつた子が離れ 同
(軸)働らいた錢はポケツで音がする 明珠

第一回尼崎句會（尼崎）

兼題 夕 刊 路郎選

夕刊を開けて車內は紳士振り 失名
社長さん夕刊賣もしたそうな 無樂
夕刊を可愛そうにと買ふてやり 北月

夕刊で見て來たやうな試合評　杜郷
電車きて夕刊パンを食ひやめし　川舟
夕刊のお蔭で母の病癒え　石人
投げ込んだ夕刊小兒顔にうけ　西行
夕刊を買ふた電車に物忘れ　南越
夕刊を肴に一盃はじめてる　區
夕刊を見つめて意見聞いて居り　嘲秩
湯上りに夕刊の匂ひがすがし　同
あした行く壽司夕刊に包まれる　串二
夕刊へ記事も短かく死んでいる　同
夕刊を小僧が讀むは十時すぎ　至郎
定期券出す手に夕刊つきつける　同
夕刊も嫁は姑の後で讀み　同
(人)孝子だと云ふ夕刊の急がしう　牛歩
(地)夕刊も見ず殘業が飯の味　串二
(天)夕刊を子が破つたで飯なり　靜波

第二回尼崎句會（十一月二日）

兼題　米　互選

米磨いて辨當の菜に氣をつかい　開二
米の値に一里の道も遠くなし　欽央
値上りをこぼして主婦の洗ふ米　悟樓
在りし日の一舛買ひを偲ばれる　牛歩
我が子等は配給飯に集いける　富榮
大水に五合の米へ手を合せ　同
東北人米實らずと泣いて居　富榮

兼題　社會　路郎選

社會でも社長の顔は稀に見る　南東
子の自慢社會の名まで語られる　牛歩
惣掛り仕度の出來た入社の日　至郎
駄々つ子も會社と云へば手を放し　杜郷
會社ではもてゝ嫁かずに二十八　悟樓
サイレンに妻は會社を聞き分ける　牛歩
(軸)値切のに會社の例を引いてゐる　路郎

兼題　天災　路郎選

天災が緣で異性の友が出來　悟樓
天災でうちの女房の力知り　杜郷
まだ上がると天災を慰める　牛歩
天災で隣の人と物を云ひ　杜郷
洪水に頭の上で蛙を運び　串二
こゝ迄は水につかつて壁が落ち　同
天災を種に貸金斷られ　杜郷
風水害俺一人だけ殘しとき　欽央
(人)天災は時代遲れを間にあはせ　杜郷
(地)天災の話女房が中で取り　至郎
(天)慰問班知つてゐる子に二つ　靜波
(軸)驗風へ念佛も出ぬあわてやう　路郎

第三回尼崎句會（十一月廿二日）

席題　戀　互選

戸を開けば初戀の人使に來　南東
初戀に破れてからが無口なり　牛歩
出張の先を戀人知つてゐる　川舟
戀をする隣の塀の高いこと　南越
慰めて慰められて戀を知り　冥作
深窓に育ちて戀を秘めて嫁き　同
ネオンの灯ほんの戀に意地を持ち　串二
戀してる話チップを稼ぐなり　同
同情が戀になつたを詫びている　串二

席題　玩具　互選

泣き止まぬ兒に玩具屋は一つくれ　冥作
緣日で買つた喇叭を父も吹き　串二
デパートで大人も玩具いらつてみ　同
兒が病んで片付いてゐる玩具箱　文月
玩具箱友だちが來て又亂れ　同

兼題　母　路郎選

忙がしい母へ子供の名が多い　馬角
三人の母ありと云ふ子に會ひぬ　欽央
母親はよその娘と見比べて　橋本
母となる身へ洋裝の見捨てられ　牛歩
信仰を持つ母親の病みつゞけ　串二
氷割る母へすまない輕い咳　冥作
買い柄へ母娘さゝやく事が出來　同
打たるゝ父の答を母が受け　杜郷
母親に貰う間はかしこまり　同
うぶ聲をあげてすつかり母さごり　南東
斷髮がかもじやの窓のぞいてゐ　同
(五)大水に妻より母を救ひだし　橋本
(五)洪瀧に追はれ今日も無事な母　牛歩
(五)成功にさむい一つ母がなし　南東
(五)叱られた顔で母親酒をつぎ　串二
(五)國の母文化も知らず老けいる　同
(人)母逝きて父宵寢する朝寢する　同
(地)母と呼ばれて斷髮恐縮す　欽央
(天)電車通見れば母だけ殘つて居　牛歩

兼題　十二月　路郎選

なんとなく斷り兼る晦の夜　橋本
來年から貯金するよと十二月　喜緣
積雪を知らし始めて十二月　牛歩
十二月博士と代つて病みつゞけ　冥作
失業へ師走の月がさえ過ぎて　同人
十二月なる樣にしかならぬなり　欽央
十二月兎角寒いが先に立つ　同

(同)新年は巡査も髭を剃つ　とき　史呂
(人)重役の髭へこまばいが　止り　里十九
(同)口髭をはやして猫の子が生れ　豆秋
(天)髭があるばかり挨拶させられる　水車
(軸)自尊の髭をどちようにぶ　ぶ　艸樂

川柳雑誌社
鏃川第二支部　**創立句會**（島根）
十一月十七日
於高松驛前後藤松鶴堂　尾添好郎報

句與集吟　松　風　雷　相選

日の色透り松葉の風のいろ　羅門
松風は心の反れ吹いて行く　清水
松風へ親子の向ふ脛そろい　健芳
ひからびた心流るゝ松の風　榮舟
松風が自慢眞晝の峠茶屋　汀雨
松風が友だ浮世を捨てゝゐる　美稲
松風が流涙の旅の身に滲みて　比佐緒
松風に所詮憂き身を啣つなり　於邨
松風は憐れ破戀を消してくれず　同
空想は碎かれたり松の音は　楮風
(佳)光る松葉を晩秋の風流るゝ　柳人
(同)迷想をなつかしみ松風といふ　朴泉
(同)松葉は風に光るしたしい秋よ　好郎
(同)待つて居れば淋しく松風吹いて居る　章泉
(同)風ありてこぼれ松葉に秋寂し　與詩雄
(同)月一つ細き線となる松の風　羅門
(人)松葉は風に鳴る透徹せる青空　好郎
(地)松風に秋はかなしい時雨雲　比佐緒
(天)夜は深まり松風ばかり生て居る　楮風
(軸)松葉に涼しく搖れるハンモック　雷相

題　火　　綠之助選

煮物煮え切つた火を守り　健芳
火のない炬燵で足をまげ　榮舟
丘のはぜ唯一本の火の樣だ　澄月
火の用心老ひの背骨に風しみて　美稲
線香花火に家庭平和な色を見せ　汀雨
火の如く燃えたつ心戀を知り　迷天
演習の靈營にかゞり火赤く燃へ　同
火鉢に眼落して思案の夜が更ける　比佐緒
一燈の火と秋の夜をひと朝子　松邨
胡麻を煎る隣の窓に火がこぼれ　清水
打明けてゐる胸は火を吐いてゐる　健芳
火鉢の上で掌をもんで生る弱さぞ　好郎
火ともなる若さに鍬の單調な　與詩雄
友情にまろく圍んで焚火する　楮風
花火に似たる戀の青春よ　汀雨
抱擁の一人へ遠花火散る　同
火鉢の火見つめて二人坐つてる　迷天
火鉢を搔いて搔いて名案のないのな　比佐緒
火の子散らして雪の曠野を進む汽車　同
失戀は火なき炬燵に泣けまする　朴泉
ひとり居は火氣なき火鉢暖める　杉邨
火鉢の火にこの恋など捨てよう　柳人
(佳)靜寂火は何事もなく燃えて　健芳
(同)火を付けた手紙清算すべき戀　與詩雄
(同)煙草の火を借りお國はどちらや　汀雨
(同)火を焚いて百姓一揆の氣の荒さ　迷天
(同)肉魂よ情熱よ火花の散るもよし　大朗
(同)情熱の火となる酒あふりたり　好郎
(同)落葉焚く火の匂ひに秋去を知る　汀雨
(同)和かな爐なりまるき影を生み　與詩雄
(同)火は火のままに強う出る　朝

(人)久方を語らん火鉢へ炭をつぎ　比佐緒
(地)火は火の如く熱え巨なる火を見た　羅門
(天)燃寸すれば睫毛に魅力生む女　與詩雄

兼題　海　音　羅門選

海音に葉のないポプラ吹いてゐる　章泉
海音へ聲を限りに歌ほうよ　比佐緒
潮騷ひに都へ捨てゝ來たる戀　與詩雄
海布は陽中に海音とある藁屋　好郎
婚約を蹴る決心に海が鳴る　綠之助
海音に近くさめたり戀の宿　同
(人)海に音ありて月光の線蒼し　美稲
(地)憶病な戀はまかれる汐鳴りや　綠之助
(天)ぢーつと聽こう海の音　大朗

兼題　虹　澄川比佐緒選

幻想のはかなく消えて虹の橋　松濤
子供らの輪を解き森に虹の橋　與詩雄
虹消ゆる娘ごゝろの夢のせて　同
まづしき父とその子は立つり秋の虹　羅門
僕等らの戀が虹がうすれゆく　綠之助
(人)讀書から欠伸空には虹が立ち　同
(地)虹は美し自然の神秘グロテスク　田鶴緒
(天)秋の眼の寂しさを拭き消ゆる虹　羅門

兼題　動　き　田鶴緒選

ひからびた馬糞の上に動く手だ　好郎
鶏、葉がちる秋の陽がうごき　羅門
動かせば笑顔を見せる乳母車　雷相
こころうごけどうけてはなりません　綠之助
人灯の下の睫毛の動き戀を乘せ　與詩雄
同耐へてゐる俯辱小鼻が微動して　綠之助
(地)霧へ海に動きて日は昇りきる　羅門
(天)庭丁へピリ、とゆれて鯉は死に　綠之助

コッポリを座敷ではいて年の暮　至郎
慈善鍋恥かしそうに入れて逃げ　同
圍はれている妓も忙し十二月　串二
正月の髷がちらほら十二月　同
欠禮の挨拶を書く十二月　同　杜郷
十二月宴會場に使ひ見て　同
支關でおじきで歸る師走客　同
カレンダ　五枚めくりし十二月　同
(人)常得意よそに取られる十二月　石人
(地)遠慮なら飲む日の續く十二月　牛歩
(天)又一つ買はればならぬ祝膳　牛歩
(軸)止むを得ず遊んでゐるに十二月　路郎

川柳雜誌社
篠川支部
大地吟社例會（出雲）
於尼綠之助報
十一月廿九日夜　綠之助選

兼題　肉

肉魂の飛躍透徹せる私空　映三
地のくぼみ我が肉魂は疲れ切る　羅門
屠肉食ひつゝ溝のにほふ家　美稻
すき燒のにほひ近所を遠慮せず　沈丁花
友情に酒肉の夜は刻まれて　楮風
肉を燒く臭ひ胃袋へゲッ泌み　琴月
屠牛場牛つながれて草を食ひ　孝太郎
(人)戀何で肉は線路に散らばづて　雅月
(地)肉親の愛さ人目も憚らず　田鶴緒
(天)横町の夕のみぞれにほふ肉　同

同　苦　笑　田鶴緒選

苦笑する彼女の瞳がそれてをり　映二
苦笑する思ひ出床が冷えてゐる　美稻
(佳)言ひにくく苦笑でまぎらはせ丁ひ　沈丁花
(同)見えすいたお世辭苦笑を嚙み殺し　綠之助

席禮　忍　從　尾添好郎選

忍從の妻にもの足らぬ日もありて　沈丁花
忍從の結局課長樣になり　同
深くは知らず忍從のうらみごと　綠之助
默々と忍從父も俺も百姓さ　田鶴緒
(人)忍從ーそれが生命。荷馬車馬　同
(地)夜毎の涙　忍從の目をそゝぎ　松濤

同　白　粉　沈丁花選

思ひ出は盡まず濃く塗る寢白粉　綠之助
心かつて白粉のむらにあるこゝろ　好郎
白粉に眉引く宵を待つ妓に雨しとゞ　田鶴緒
(人)決心がついて白粉決塗り直し　綠之助
(地)肌色に塗り女教師朝を出る　同
(天)白粉を塗る手にふと湧く思案　田鶴緒

素晴らしは

すばらしい成功望んで八十歲　雅月
すばらしい話題と考へぬローマンス　好郎
すばらしい夢を中途で起される　田鶴緒
滿堂の熱狂を浴び舞ひ終り　綠之助

艸樂訪神句莚

十一月十七日

西田艸樂氏神戸を訪ひ、歩く事十數町落ち着く所に落着き句莚を敷く。會者艸樂・春秋華水、竹楓、蝶子、かつ呑み、かつ作句の和やかな夕べ。

盃　互　選

重役は來る盃に手がたりぬ　蝶子
向ひ側盃を持つて困るなり　同
盃へ外はチラ〳〵河豚の雪　華水
盃をおいて隣の三味をきゝ　竹楓
盃洗をおして盃受けて居る　華水
盃へなアおつさんと眼がすはり　春秋
盃の前へ子供が箸を持ち　同
盃が持てれば今日も無事に暮れ　艸樂
あひ狀のこぢれ盃ほろ苦し　同

丸ぼちや

丸ぼちやの堰上手に炭をつぎ　華水
丸ぼちやへ今日も所日も日本晴　竹楓
丸ぼちやがすきてポトンと角砂糖　春秋
失戀をさせて丸ぼちや縫ひ急ぎ　同
此の髮ときめて丸ぼちや結ほすなり　艸樂

支部幹事聯合會

於カナメ食堂
十一月十四日
十二月忘年句會の打合せ會　阪神間支部幹事と本社より綠雨、艸樂出席、賑やかな集り

兼題　髭　艸樂選

髭の濃き人の印象だけ殘り　いわを
髭落しまんのんかと床屋念を押し　里十九
髭なぜて碁盤は勝つに決つてる　華水
生活へ課長の髭をはらひます　與三郎
口髭を生やしてゐても叱られる　豆秋
看板の髭をしごいて賣ト者　秀山
髭おいてもう巡査になりきつて　夕鐘
髭のびたも記念の一つ　水車
髭さんでとほり會社の生辭引　沒食子
髭剃つて出て故郷の霜を踏み　某人
(佳)分讓地髭のあるのが立止り　九天
(同)髭剃つた後を子供が撫でに來る　いわを
(同)猫の髭自分の髭へ十二月　史呂
(同)ちとのびたひげでまはしでまはし　綠雨

席題　指　雷　相選

勞働に指の太さがたのもしく　琴月
手品師の手もやつぱり指五本　田鶴緒
指折つて甘き思ひ出　耽けるる宵　比佐緒
指をくむさみしき辯となつてゐる　羅門
介抱の　女の　指を　冷たがり　綠之助
（人）長男といふ肩書の　拔の　節　比佐緒
（地）子供寒くガラスに指紋をしてゐる　大朗
（天）飢餓線を小さき指で漕ぐ乙女　楮風

席題　大　空　綠之助選

出勤の朝あんまり空が高かすぎて　健芳
大空高くしろしましろし私眞晝　田鶴緒
大空の下に曆されてゐるちから　羅門

席題　人　間　好　耶選

人間の　力　怒濤へ　嘲けられ　雷相
人間よ土の香を知れ　空を見ろ　綠之助
（父）人の興奮に悲しむ俺れだつた　光雲
（地）人間が人間を支配する世なり　比佐緒
（天）人間は強し掌の　上の　青空　羅門

席題　息　琴月達

溜息をすてるコスモスゆれるなり　羅門
陽も風も息もしろ〳〵と秋の　朝　田鶴緒
（人）よく眠る坊やの寢息のぞかれる　雷相
（地）溜息の持て場に秋の日向ぼこ　田鶴緒
（天）ほつれ毛がゆる病む日の溜息。　綠之助

席題　娘　大朗選

しとやかな娘になつて　感化院　琴月
娘さんかつぱつ小唄と青空　女郎
娘さんその純情を守りませう　比佐緒

川柳雜誌社柳會

今里句會（大阪）

十一月　題　水　害　市塲泛食子報

水害の祖國へ移民から義損　水車　泛食子
水害にあふても町を離れかれ　朴甫
道すがら話題集めて水見舞　耕峰
（佳）浸水の高さがのこる壁の色　善由
（軸）干物の下をくゞつて水見舞　水車

題　虫　新市街選

眞夜中に虫が冷たい避難所　天國
虫の聲今老境を思はせる　朴甫
いつか我が心に泣けるキリギリス　喜由
郷を出る時もこほろぎ鳴いてゐた　水車
灯を慕ふて虫が座敷へ上つたり　泛食子
菊の香と虫がすだいてゐる御苑　同

題　毛　布　朴甫選

寒息をせぬかと毛布一度なほし　喜由
配給の毛布一枚拜がまれる　新市街
くるまつて毛布で露營寢てしまひ　泛食子
毛布にも馴れて新兵元氣なり　遊女男
一枚の毛布へ一家かしこまり　水車
身震の話に毛布耳をたて　天國
（軸）病院でベットの毛布重たがり　朴甫

川柳雜誌社今治句會（愛媛）

十一月廿日　平井小松氏居　曉童報

兼題　晝の風呂　曉童選

町ぶれをかすかに聞いた晝の風呂　十靜
羨まれ乍ら悲し晝の風呂　史郎
晝の風呂番臺爪をつんでゐる　禧純
晝の風呂ゆつくり髭を剃つてくる　宵明
（佳）晝の風呂石鹸の泡色になり　心府
（同）土砂降りを硝子越々晝の風呂　小樓
（同）日々の高値を見せて晝の風呂　紫陽
（同）晝の風呂花嫁すきがあればこそ　宵明
（人）晝の風呂ふつと詰手を考へる　紫陽
（地）御祝儀のタオルで這入る晝の風呂　宵明
（天）氣忙しい同伴があり晝の風呂　小松
（軸）忌中幡二ッ浮いてる晝の風呂　同

兼題　蝙　蝠　宵明選

蝙蝠に貧乏世帶覗かれる　史郎
蝙蝠が二人の戀を慌てさせ　同
蝙蝠へおびつた處女の肩の線　十靜
蝙蝠がかすめて行つた二人連れ　禧純
黄昏へ蝙蝠質屋のぞきにき　紫陽
お化粧が出來蝙蝠の宵となる　心府
蝙蝠の露路へ疲れた辭當箱　同
蝙蝠へまだ殘されてゐるおむつ　曉童
（佳）アパートの窓に蝙蝠うろたる　小松
（同）蝙蝠へ賣られた姉を思ふなり　都留逸
（同）迫りくる樣に蝙蝠壁をはひ　十靜
（同）爪びきの部屋の蝙蝠迷ひ込み　小樓
（人）荷揚する船蝙蝠に暮れかゝり　心府
（地）蝙蝠へ叱りすごした子を思ひ　曉童
（天）戰友の墓へ蝙蝠低くとび　小樓
（軸）蝙蝠が歷史の塚をはすにとぶ　宵明

兼題　善後策　小松選

善後策人事ながら笑はれず　史郎
善後策もう一汽車があるばかり　宵明
善後策社長案外平氣なり　都留逸

善後策代書の伯父も來てくれる　曉童
親類がよつて長びく善後策　小樓
決局は妻の智惠借る善後策　紫陽
善後策たゞ返電を待つばかり　宵明
善後策お茶が冷たくなつてゐる　心府
膝だいてどうにもならぬ善後策　紫陽
善　後策別に禊越しの聲　十靜
善後策他人をしての口をきゝ　同
議長まだ無言のまゝの善後策　小樓
(佳)肝腎の息子が見えぬ善後策　心府
(同)誰も茶に手をつけぬ善後策　都留逸
(同)伯母さんの智惠を驚く善後策　曉童
(同)つゞまりは里へ泣き込む善後策　禧純
(人)善後策ドアーの外は記者の群　宵明
(地)善後策秘書の筆記のゆんだまゝ　同
(天)本人を立たしてからの善後策　曉童
(軸)善後策按摩も首をひねるなり　小松

兼題　請求書　心府選

請求書考へさせる文字があり　紫陽
請求書別に奥樣だけのもの　十靜
月々を請求書から拔けきれず　同
ポーナスがこんなになつた請求書　宵明
請求書　先月分と書いてあり　禧純
請求書冷たい夢となりにけり　宵明
請求書そつと明りよんでみる　同
ちと過ぎた豫算の嵩で請求書　都留逸
(佳)請求書仲居の顏がひきしまり　同
(同)請求書破つて念を押しておき　紫陽
(同)斷りをまともに聞いた請求書　十靜
(同)丸髷に結はした高の請求書　曉童
(人)現實の朝を見直す請求書　宵明
(地)請求書女將の智惠の日がたがり　曉空
(天)ポケツトに冷さわる請求書　禧純
(軸)請求書酒八本とよんでみる　心府

席題　天才　小樓選

天才のマントの裾が切れてゐる　同
天才兒その後の噂きかぬなり　心府
天才が赤い藥のびんをさげ　曉童
天才の髮が鼻まで落ちかゝる　宵明
(佳)天才の父平凡に畑をうち　心府
(同)天才は母の位牌と共に生き　曉童
(軸)天才に今後の母は理解あり　小樓

席題　豆炭　紫陽選

豆炭が小さくなつた膝の冷へ　心府
豆炭を買ふ川舟に十二月　宵明
豆炭へかざす男の手が太い　同
豆炭の炭つぎ足してよい話　同
豆炭を嬉しい人にかきたてる　同
(軸)豆炭の白く魂ぬけた朝　紫陽

席題　米俵　禧納選

米俵秋の陽ざしに運ばれる　小松
米俵足を向けては寢られまい　同
小作米納めた後の庭をみる　心府
嫁取へ擔ぎ込まれた米俵　宵明
米俵凶作だつた秋の庭　小松
前人氣俵の山がよびかける　同
三代目藏がさびしい米俵　曉童
(軸)辛酸が唯これたけの米俵　心府

吹揚吟社句會（今治）

十一月五日　伊豫野今治支店樓上　曉童報

席題　敷居　心府選

敷居を踏んで讀經をきく　小松
敷居際たしなめられた指をつき　同
敷居のきず知つた者なく出來てる　泊灯
卷煙草敷居のはしに忘れられ　同
(佳)敷居まで一錢もつた强さなり　宵明
(同)思案ふと敷居踏んでちに氣づく　曉童
(同)敷居まで親ならこゝる歩を返し　同
(軸)遲刻して敷居の上に座らされ　心府

兼題　赤ん坊　宵明選

赤ん坊の寢息に疲れいやされる　史郎
赤ん坊お乳とちまめかへられる　泊灯
赤ん坊を抱いた女給とふと出逢ひ　心府
生れくる赤ん坊にと母の慈悲　禧純
赤ん坊ナポレオンにも似てるなり　曉童
湯上りを夫に渡す赤ん坊　小松
赤ん坊乳房しつかり握つてゐ　宵明
(佳)赤ん坊の名前で貯金少し出來　心府
(同)赤ん坊の匂ひほんのり甘くる　同
(同)赤ん坊三四人程手を渡り　曉童
(同)算珠の合ふた手へ來る赤ん坊　同
軸赤ん坊こゝらが眉になるところ　宵明

兼題　目高　曉童選

佇んで目高の群へ眼がすわり　禧純
鍬洗ふ水に目高の腹を水に見せ　心府
秋風に誘はれるまゝ目高浮く　宵明
芒穗の垂れて目高の散るあわれ　同
ふと風に目高の頭かくれたり　心府
足音へ目高あわてるだけあわて　宵明
二三匹目高相談してるなり　泊灯
手拭へ目高一匹掬はれる　同
飛び込んだ蛙目高の列を破り　紫陽

人間の意地が目高へ石を投げ　史郎
目高らの目にも晴れたり秋の空　心府
逢へない日目高が底を泳いでる　宵明
飛行機も目高も僕も春や春　曉童

席題　番　塞　小　松選

番塞を嫌がる議に頑なり　曉童
朝風呂の番塞れむい顔でゐる　禧純
番塞に甲種の身體ほめられる　心府
(佳)番塞は街の噂をみんな聞き　同
(同)番塞は七分三分に座るなり　曉童
(同)番塞の暇へショールを編み　宵明
(人)番塞も今風呂を出た顔の色　心府
(地)番塞が居らない音で晝の風呂　曉童
(天)出戻りのそれから番塞〻座り　心府
(軸)嫁く話番塞耳をかたむける　小松

席題　吸取紙　互　選

吸取紙の白さ嬉しく職につき　心府
吸取紙赤字はつきり見えるなり　小松
吸取紙其の生活をみんな吸ひ　同
吸取紙この無駄事を知つてゐる　宵明
吸取紙給仕の戀を知つてゐる　曉童
吸取紙一萬圓と寫つゝてる　同

席題　人　絹　互　選

レイヨンをビールの泡があわてさせ　曉童
人絹の相場へふれぬ事にする　宵明
人絹でごま化せるだけごま化す氣　宵明
人絹で冷たい事が云つるなり　心府
人絹の體で女工の街へ出る　同
人絹でともかく嫁入仕度出來　曉童
人絹で村を放棄される飢饉年　宵明
人絹の膝へ話がうますぎる　曉童
人絹で不作の秋を歸つて來　曉童
人絹ですわと女あわてる　小松

川柳雜誌社大鐵局秋季大會（大阪）於大鐵倶樂部

十一月十四日

兼題　階　級　某　人　選

階級のどこかゞかもし出す　空氣　節子
階級の此處も激しい地獄部屋　禿山
階級は働かぬ指見せてゐる　山雨樓
無產階級へまともにすべり落ち　亂耽
村へ歸れば階級が出不精にする　耕三
公文書階級の印並んでゐ　喜山
風水禍ある瞬間の無階級　彰
階級も意識してゐるチビた下駄　汀柳
君はインテリだよと太い手の盃　亂耽
紅葉狩階級がある酒を呑み　與三郎
子供にも階級がある官舍町　天風
椅子一つ見ても階級が違ひます　路郎
(佳)地まわりに階級があるとこの　九天
(同)風體をヂロ〳〵見られもする行かず　路郎
(同)地下足袋になつて階級氣が攪ひ　山雨樓
(同)階級が違ひ兄貴へ無沙汰する　路郎
(同)復興へ階級やはり目立つてき　水客
(人)階級を論じ月給丈で生き　久米雄
(地)メトライキ葉卷は微動さえもせず　彰
(天)階級をはつきり演習宿に着き　艸樂

席題　裏　口　九　選

女親裏口開けてゐてくれる　史呂
質草ももうこれきりの裏を出る　艸樂
裏口のいびつ家主の營利主義　秀太
裏口でそつと呼んでる借家の子　汀柳
裏口へ廻れば月の葱畠　明坊
裏口にコヽモスも咲く侯の秋　天八
日當りの好い裏口へ子等集ひ　呑行
住みなれて裏の狹さに親しみぬ　喜山
裏口へ廻れば枯れた菊の鉢　山雨樓
裏口をたゝけばわかる下水取り　大仙
里の母裏口も見て奥れるなり　某人
お彼岸の餅が裏からとゞけられ　天風
裏口へ廻る男の肩が落ち　與三郎
喜びを裏口からも云ひに來る　楚堂
裏口でついでにバット頼まれる　路郎
うゐ覺え一度裏口たしかめる　禿山
裏口に出入の多き驗風禍　亂耽
裏口でした約束をうたぐられ　亂耽
(人)神經衰弱裏口の念を押し　亂耽
(地)豆腐屋に聞けば裏口教へられ　某人
(天)裏口でしつかり借りた五十錢　路郎

席題　顏　色　緣　雨　選

導火線はなつた顏色隅にゐる　ひさし
顏色に妻は行先あてゝ見る　英夫
顏色へ用心深いポーイなり　一光
顏色へ刑事すかさず追窮し　史呂
顏色へ課長無言のまゝでゐる　龍三
速達へ姉に顏色見拔かれる　一蜂
瞬間の顏色嫌ひと云はさせず　與三郎
顏色をかくし切れない妻の前　天秋
顏色へ妻としやかな氣をくばり　小瀨木
眞劍な顏色冗談とも言へず　呑行
顏色を見い〳〵掛値云つて賣り　青吾
冗談へ顏色を變へて計るなり　艸樂
石段を上り顏色引締り　山雨樓

もめるなと思ふ司會者立ち上り　亂耽　山雨樓
(人)覺悟してさすが顏色變ただけ　節子　牡蠣船を出て寒月の戒橋
(地)顏色へ被告の顧ひかなへらる　小瀨木　牡蠣船へ下りる旦那の帶がすれ　與三郎
(天)一寸した言葉に變る顏の色　呑行　牡蠣船を出た足もとに慈善鍋　喜山
席題　善　人　柳選　(佳)牡蠣船の向ふ下水の土樋が見へ　杏林
善人と一と目で分る瞳の光り　天秋　(同)牡蠣船のどこかに妻は好きになり　木履
善人は何時もおどされ役になり　禿山　(同)大阪を語る牡蠣船ゆらぐなり　綠雨
子を抱いて惡といふ字を忘れたり　九天　(同)牡蠣船のゆれをさかづき感じ　亂耽
善人の財布の紐が太すぎる　山雨樓　(同)牡蠣船でさつきのつりをあるる　路耶
善人へ浮世の荒い風が吹く　龍三　(人)牡蠣船でそれとなく聞く滅の一　同
善人になれぬ巨萬の富があり　楚堂　(地)牡蠣船でタイピストとは見なり　山雨樓
善人になりきれないが市に逃げ　英男　(天)かき鍋の前でガールがよく揃ひ　一光
善人へ突然に鳴る警音器　亂耽　(軸)牡蠣船の婦曳らしいが奥で呑み　艸樂
ごこまでも善人でゐて平社員　天風　　席題　焚　火　山雨樓選
借金のことわりが來たに死んだなり　路耶　　顏手芋を見つめてゐる焚火　與三郎
善人へ餘りに淋しい葬儀です　小瀨木　　硬張つた親父焚火に若くなり　路耶
善人と云はれて藏にひゞが入り　英男　　焚火して月給などは忘れて居　明坊
女房の留守を善人秋刀魚燒く　九天　　燃え殘る焚火へ巡査角を外れ　亂耽
善人になつて出た夜の寒い風　天風　　食ふだけは稼ぎ焚火にあたゝまり　楚堂
貧乏をほめられて善人顏がさし　艸樂　　鶴嘴を置いて焚火の輪にはいり　喜山
善人さ國を離れて死んぢまひ　路耶　　棟梁へ焚火揃つて挨拶し　木履
神の前その瞬間は善人だ　彰　　焚火から御魂走樣と一人去り　綠雨
(佳)ウインクへ善人の眼がうるた　史呂　　急ぎ足知つた焚火へ呼び込まれ　亂耽
(同)善人の平凡にゐて親しまれ　秀太　　ランドセル焚火へ小さい輪をつく　路耶
(同)善人をだます男の骨が折れ　禿山　　ませたこと云ふ雛僧のゐる焚火　同
(同)酒呑んで皆善人の顏になり　青吾　　義理がたい男焚火にむせてゐる　山雨樓
(同)善人の帶の時計が落ちかゝり　甲雨樓　　あの巡査焚火仲間にされてゐる　節子
(人)善人へ三度目の妻の來る日なり　與三郎　　高架線たきびの煙よじれきて　與三郎
(地)呑まれてゐる譯知らぬ善人さ　路耶　　(人)水淺の小供焚火へつき出され　喜山
(天)善人のしばし湯呑へひとりなり　亂耽　　(地)飛び越せる程に焚火が靜まて　天秋
席題　猪　選　　(天)結論がつかず焚火のけぶる　耕三
猪へ月は危く落ちかゝり　山雨樓　　九天
猪が見下す畑の芋を掘り　艸樂　　(軸)病院の窓から焚火見下され　山雨樓
猪へ峠にひゞく火繩銃　龍三
我黨の勝利猪かつぎ入れ　木履
猪の牙見せてゐて割かれてゐ　耕三
猪は急用といふいそぎ方　路耶
紙芝居猪が出て後は明日　節子
(五)猪へ吹雪の國がたそがれる　龍三
(同)猪の鼻がしめつた土の色　水客
(同)猪はお地藏さんで道を變へ　路耶
(同)猪のニツクネームで儲けてゐ　久米雄
(同)小春日の萩に猪寢てしまひ　山雨樓
(人)猪も來ますと庵主庭を掃き　艸樂
(地)盜賊のかたで猪山へ逃げ　路耶
(天)炭燒の親子猪顏を知り　山雨樓
兼題　牡蠣船　艸樂選
牡蠣船へゆるやかに漕ぐ水上署　禿山
牡蠣船に坐してひとゝき時雨聽く　亂耽
牡蠣船へ延若ばりの二人連れ　某人
雪に漕ぐ舟夫へ牡蠣船からの三味　明坊
橋より高く牡蠣船の提灯　汀柳
牡蠣船に想ひをつなぐ舞扇　楚堂
かき船へ相生橋の埃とぶ　龍三
濁水へ牡蠣船の灯は長うゆれ　喜山
牡蠣船にゐて大阪の灯の明り　秀太
頓狂な聲にかき船少しゆれ　彰
かき船へ灯がつき乞食橋を去り　天秋
牡蠣船を出ると師走の風が待ち　一蜂
牡蠣船に舞妓と座る夜の雨　鮎美
牡蠣船へ石炭船の重い舵　天八
牡蠣船へしばし巡航船の波　山雨樓

（同）猥談へ笑つて焚火輪が崩れ　同
兼題　小　供　路郎師選
踊る子にうたふ子されど灯の暗く　亂　耽
見解の相違朝　寝を　子に　許し　同
子供もう舌を出すこと知つてゐる　山雨楼
片親のない子綺麗な　寝　像なり　某　人
迷ひ子へ巡査子のある顔になり　天　八
子供へはだまして刑事父と　出る　小瀬木
子と父とシャボンのなかの日曜日　水　客
アルヂュアーと云ふて子供らやなぎ　一　光
縄ばりをきめて子供のヒロイズム　秀　太
本富の親も知らずに綱渡り　龍　三
子に子を見させて忙しい針を持ち　艸　樂
父の飲み振りへ子の頬まんまるし　山雨楼
仲人にだまされたまゝ子供出來　木　履
歌舞伎座で子供大きな聲を上げ　杏　林
雉兒さんに出す相談の金になり　喜　山
商敵と知らず子供の　仲が好し　史　呂
子の努力積木それでも家になり　同
愛情も子供に取られ無事に居る　與三郎
急ぐでもなく學童の　睦まじさ　緑　雨
綺麗な服着た子ぜがれを連れて逢ひ　艸　樂
頬につたふ涙を子等に見せまじと　汀　柳
（人）女の子母のゐぬ日をよくうごき　水　客
（地）冬の雨子供へ叱る事多く　亂　耽
（天）天分のある子に樂器與へとき　與三郎
（軸）死の間際きゞジャンケンをした子　路　郎
（同）父が出す金と知つたで云ひたひ　同

川柳雑誌社　**高　知　句　會**（高知）

十一月十八日　於春水居　春　水報

出席者　二十九名　盛會なりき
席題　夜　警　早　林選
夜警から聞いた話を可笑しがり　紫　雲
誰何する聲も眠氣をさますまじ　柳　翠
金持の犬に夜警は吠えられる　春　水
大欠伸して交代の夜警出る　啞　聲
緊張を影に見出だす夜警なり　藤　花
四ッ辻で夜警あんまに訊れられ　青　蛙
忠實に夜警は己が影を踏み　翠　山
寝返つて夜警の過ぎた音を聞く　狂　聲
夜警ふと眠氣へ曉の鐘をきゝ　啞　聲
風呂敷の太さを夜警見逃さず　蟬　風
（佳）女房と歩くに夜警振り返り　珍　景
（同）股火してから夜警の一廻り　青　果
（同）酔どれに夜警煙草の火を借られ　稻　美
（同）人影を見て角燈の火を隠し　海　川
（同）口へ迄月の夜警に出る詩吟　濁　水
（人）實直な夜警へ月が味方なり　狂　聲
（地）宿直の時計夜警に覗かれる　稻　美
（天）交番に夜警一禮して通り　啞　聲
（軸）靴音の夜警は風邪をおしてゐる　早　林

席題　コック　蟬　風選
自信ある腕をコックは食て貰ひ　翠　山
宣傳にコックの腕も書き添へる　雲　龍
コック部屋食器の音に更けて居る　柳　翠
ハイヤーと耳打ちしてる料理人　春　水
コックもう大阪辨を忘れかけ　珍　景
不機嫌なコックへ庖丁よく切れず　六　絃
俎の隅でコック茶漬飯　早　林
コック又チャールストンを踊つてる　翠　山
居据つた客へ舌打するコック　啞　聲
舌打のコックへ汁の沸きすぎる　濁　水
（佳）急調なジャズへコックの手が揃ひ　狂　聲
（佳）たまさかにコックはポチを貰ふな　春　水
（同）失戀のコックの庖丁研ぎすぐ　濁　水
（同）居眠りのコックへ下る夜の蜘蛛　紫　雲
（同）御臺臨コック帽子も直ぐ着る　柳　翠
（人）女房の稼ぎをコック訊いて寝る　稻　美
（地）コックふと關東煮の味を賞め　狂　聲
（天）豪遊の過去を階下に聞くコック　濁　水

席題　茶　店　春　水選
道端に清水も沸いて峠茶屋　紫　雲
茶店から程遠からぬ登山口　翠　洞
茶店にも正月が來る注連を張り　珍　景
茶店から札所へ近い途を聞き　青　果
掛茶屋の軒から秋が來る　一　葉
門を掃く朝を茶店の拾ひ物　青　果
故郷も見へて寛ろぐ峠茶屋　青　蛙
茶店の灯まだ消へてゐぬ歩を早め　六　絃
掃除ゆき屆いて茶店暇にゐる　早　林
峠茶屋うぶな娘の茶を貰ひ　珍　景
オートバイ茶店の門で待つて居る　同
飛行機の影をかすめた峠茶屋　濁　水
茶店から出た虚無僧に黄昏れる　青　蛙
まだ早い花へ茶店は妓を揃へ　狂　聲
國訛つぐふ番茶の色もよし　柳　翠
ゆで蛸の足が大きな峠茶屋　翠　山
山茶屋で我慢してゐる招き猫　蟬　風
お殘りが慾しい茶店の犬の顔　六　絃
掛茶屋の赤毛とうが芝居じみ　つぼみ
巡禮の笠の休んだ峠茶屋　青　蛙
（佳）掛茶屋のラヂオに踊る花の芝　濁　水

(同)遠慮して巡査茶店の隅に居る　稲美
(同)ひつそりとした掛茶屋に昨日の妓　蟬風
(同)葉櫻へ茶店の猪口はひいを持ち　狂聲
(同)寄せ書へ茶店の筆を借つて書き　珍景
(人)村の事よく敎はつて茶店出る　翠洞
(地)まだ殘る茶店を出世懷しみ　狂聲
(天)人の善い茶店頼まれる事が混み　早林

席題　軍　艦　狂聲選

(佳)公平に朝日を浴びる觀艦式　濁水
(同)(大君の御稜威畏し軍艦旗　紫雲
(同)抜錨をする艦隊へ日本晴　青果
(人)水兵の母軍艦を理解する　翠洞
(地)海軍旗有史以來の波を越へ　青果
(天)霧を洩る機影にほつとする母艦　濁水
(軸)軍艦に港氣強い夜が更ける　狂聲

席題　仲直り　啞聲選

(佳)飯事の仲が直して菓子が減り　狂聲
(同)仲直りして破れ物の多いこと　管道
(同)仲直り灯に恥しい米を磨ぎ　狂聲
(同)今更らに膝が可笑しい仲直り　春水
(人)仲直りする夜晩酌控へて出　稲美
(地)仲直り氣まづい膳の灯に向ひ　狂聲
(天)仲直り同じバツトの煙になり　翠山
(軸)本當の笑ひになれぬ仲直り　啞聲

兼題　眠　る　濁水選

說敎に眠る一人が目立つて來　早林
通夜堂に誰かの鼾ふと聞へ　啞聲
膝枕眠る旦那の八字髭　柳翠
居眠を不意の來客まごつかせ　山崎
膝の猫安心をして眠るなり　珍景
子の寢息エプロンそつと立ち　統翠
晩酌の父に抱かれて早や眠り　紫峯
手内職眠る坊やに強く生き　柳翠
託兒所の午睡へ土手の山羊の聲　青果
龍ひ來る眠さに負けじ歩哨の身　管道
居眠へ電話のベルの容赦なし　翠山
居眠の異狀な音に氣が迷ひ　遊舟
うたゝねの障子へいつか黄昏れる　紅香
三度目の坊やに父は起される　つぼみ
無理解な父をベンチの夢に見る　青果
うたゝねの母からそつと蠅を追ひ　一笑
店眠の母へすまない音を立て　紫雲
眠からさめてやつぱりひとりぼち　珍景
よく眠る日暮へ乳が張つて來る　紅香
閉場に眠らぬ管の子を背負ひ　稲美
蕭蒲團眠りがつゝく脈の數　狂聲
いとし子の愛にもつれる寢息かな　柳香
青春の一輪差して眠りこけ　早林
よく眠てる兒へ姑の物足らず　翠洞
(佳)氣持よく車掌の聲を夢にきゝ　一笑
(同)睡眠が欲しい板場の長煙管　春水
(同)ボイラーに眠り觸れる夜の深さ　藏花
(同)釣の要る客に番臺起される　青果
(同)居眠りの生徒に知つた生活苦　稲美
(人)乳首に手應へもない瞳をとぢる　翠川
(地)兒の寢顔の過去の二人へ觸れて來る　翠洞
(天)居眠りの父に苦勞の浮いて見へ　狂聲

松前川柳社三回詠草

席題　追悼劍師　前號續　大塚健爾氏選

母は爐火見つめて故郷動かず　紀雄
灰火神樂朝日靜かに伸びてゐる　青柳
踊の輪、遠くにゐる　康正

○　和田默念人氏選

平和さを踊に見せて村の秋　九品子
座布團の堅き下宿をまだ去れず　紀雄
踊る影　見る影、月に歸る影　聽水

家を燒いた灰をかぶつた秋の夜　井上信子選
平和さを踊に見せて村の秋　青柿
踊の輪遠くにゐる　九品子
踊る影見る影、月に歸る影　聽水
座布團の堅き下宿をまだ去れず　紀雄

川柳界

▽本社新公認選者を左の通り昇格並に推薦されることになり從來の共選組選者より春秋君が個人選者となり、新に共選組選者となつたのは閘路、柳次、丹路、紀太の諸君

▽尚支部句會選者としては與三郎、八歩、禿山、九天、英賀夫、竹楓、卷二、晴朗の諸君が推薦されました。

▽劍花坊氏追悼句會後の宴會の席上より寄書を頂きました。

▽大谷五花村氏は劍花坊追悼句會に出席されてより約二十日間滯京、白河に歸られ再び十三日に上京、十九日迄滯在されました

▽曾我部宵明、谷心府の兩君は十一月十八日寧霞溪に遊ばれました。

宣傳の小俗人のにほひする　（心府）
頂上で淡路見つけた大阪辯　（宵明）

▽本社高知支部十一月例會は、二十九日に催され寄書を頂きました。

▽吉田水車君は十一月二十日東上、歸途靜岡名古屋に立寄り歸阪された。

靜岡にて一歩さんへ
靜岡でチヤツキリ節を思ひ出し

▽江戸みつる君は北陸地方を巡遊され、七日松本支部の民郎君を訪れ、淺間溫泉に同行され、東都をも廻遊されました。

和倉にて
溫泉の戀明日の別れは承知なり

▽阪井久良伎翁の六十七才筆頒布は十二月七日東京神樂町の末よしで催されました。

▽岡田某人君は十二月八日伊勢松坂へ旅行されました。

鈴の舍を宿の手摺で敎へられ

▽信州中野町の新人聯盟の句會は、十二月八日に催され寄書を頂きました。

▽後藤千枝君は岐阜縣金山町に行かれ、左の句を頂きました。

山鳥のスキに地酒もうまかりき

▽酒井大樓君は別府方面へ旅行されてゐましたが、十二月二十日松山へ歸られました

▽鳥山一歩氏は大阪時事新報社運動部長を辭し、ガールスポーツ雜誌「球」を發刊されるかたら株式會社合成化學工業所相談役に就任されました。

▽濤野夢一佛君は「川柳史要」の編纂に志され目下再校中、近日刊行される由。

▽植木鬼佛君は川柳文藝社を創立され、「隱語と用語」を出版されました。

▽石森靜太君は病床にも拘らず靜太句集の刊行に努力されてゐます。

▽平井小松君は今治市金屋町で酒場を開店されました。

▽名古屋の可香、世香、呂香の三君は三香會を組織し一月三日來阪される由。

▽生田翠夢君は一月四日東上、きやり同人會に出席し、歸途本社松本支部の民郎君を訪問される由。

▽住田亂耽君は一月十日頃東上、東都川柳家を訪問される由。

▽松山の故河合紫石君の追悼句會は十二月八日に行はれ、紫石句集を發行されました

▽渡邊曉童君は十二月一日義兄の急逝に德島國因ノ鳥三庄に行かれました、謹んで哀悼の意を表します。

▽日野華水君の嚴父は十二月十八日逝去されました、謹んで哀悼の意を表します。本社を代表して路郎先生が會葬され、大阪よりは同人里十九、史呂君等、神戸支部からは竹楓、明珠、春秋、幸捐、繁堂、二南の諸君等が會葬されました。

▽高島玉兎朗君は舊臘夫人を失はれました謹んで哀悼の意を表します。葬儀は一月二十日頃に營まれる由。

▽福田山雨樓君は十二月二十三日母堂の訃報に二十四日の葬儀に郷里岡山に歸られました、謹んで哀悼の意を表します。（汀）

編輯の窓

山雨樓

▼新年お芽出度う。乙亥柳壇を迎ふるに當り、本社は其の使命と責務の重且つ大なることを痛感し、躍進又躍進を續けて寄稿家並に愛讀諸兄の御愛顧に應える覺悟である。一層の御鞭撻を乞ふ。

▼本號の特輯篇として柳壇著名作家より「父と母を語る」について回答を頂いた。これは新春にしみ〴〵と讀んで頂ける好讀物であると共に、柳人評傳の文獻としても價値深いものと思ふ。

▼路郎主幹は年末多忙の中から「放送局萬歳」を執筆された。一讀直ちに明かになられること請合。

尙、路郎先生は暮れの二十六日の晩BKから一夕一話「川柳滿洲旅行」と題して放送された。

▼柳壇の權威的研究である。「武玉川研究」は益々進捗を示し、近く第三篇の輪講に着手される由、蛭子氏からお便りがあつた。

▼毎年好評を博してゐる「日本柳壇百人撰」は名實共に一粒選りの珠玉篇として光彩を放つてゐる。

▼「街に住めば」はかほる氏のユーモアの溢れた短文、柴谷畵伯の漫畵と共に味はつて頂きたい

▼本號に掲載の豫定であつた「日本名所名物川柳東京の卷」は校正〆切迄に漫畵が間に合はなかつた爲め遺憾乍ら次號に割愛するの止むなきに至つた。

賀正

乙亥元旦

川柳雜誌社

主幹 麻生路郎

▼南北氏の「陶泓居雜記」はその近境を語らるゝ輕妙の筆致、流石に老練である。

▼正岡蓉氏の「時花唄二つ」はレコードに吹込んでもいゝ佳調。

▼西田艸樂氏の「獨漫錄」は岡田某人君の「いのしし漫景」と共に亥歳に因んだ好讀物。

▼「パイロット欄」は僕が母の死亡なんかで執筆が遲れ、本號の間に合はなかつた。

▼前總務橋本緣雨氏多年の功績に酬ゆる爲め、本社は新春の中旬を卜し、記念章を贈り併せて慰勞祝賀の宴を張ることゝなつた。

◎轉居

▽河柳雨吉君（東京市下谷區御徒町三ノ四）▽藤島茶六君（東京市淀橋區柏木二ノ一九九進藤方）▽海野夢一佛君（東京市京橋區木挽町三丁目十三ノ一）▽石原青龍刀君（奉天紅葉町一六ノ三ノ六）▽高橋末三郎君（札幌市南拾一條西一丁目十四）▽横山勝二君（兵庫縣武庫郡寶塚南口北通二六ノ二〇號壽藥莊）▽北川あや美君（大阪市東區清堀町畑中方）▽大年木通君（神戸市須磨區大黑町一ノ一二三）▽土井文蝶君（大阪市西成區松通り九丁目二三）△松野えいを君（大阪市住吉區天下茶屋二三二右田方）▽川柳はりこ吟社事務所（京都市伏見區稻荷榎木橋五）▽眞田幸捐君（神戸市神戸區再度筑九五）と番地改正

◎改號

▽越智虹子君は（虹一郎）▽岡龍三君は（町糸）▽林令風君は（世香）

◎正誤

日本名所川柳宗右衞門町の句中「宗右衞門町髮の香に灯がともる」日華とあるは白葉君の句でした。

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十二卷第三號課題

一月五日締切

（各題十句以內）

▼商人　朝田新水選

▼工場　山本雨迷選

第十二卷第四號課題

二月五日締切

（各題十句以內）

▼藝妓　增位汀柳選

▼草　山本丹路　東谷閒路共選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切は事務所宛

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける樣に願ひます、但集金郵（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年十二月廿五日印刷
昭和十年一月一日發行

第十二卷　第一號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所　川柳雜誌社　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　電話天下茶屋二五七九番

事務所　川柳雜誌社　大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地　電話南六四四番　振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店—明文堂　其他　市內各書店—（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店　玉森堂　紀伊國屋（神戸）米田、寶文館（函館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

賀正　川柳雜誌社關係の人々（順はろい）

賛助員

池澤樂居　末弘嚴太郎
長谷川一徹　伊藤彦造
大道・弘雄　鳥山一步
岡本一平　大島濤明
片岡直方　大谷五花村
笠原路生　大西長三郎
嘉納純　岡田三面子
田中辰二　龜井晟修
長崎柳秀　川上三太郎
長岡半太郎　川村花菱
長野晴濱　米村あん馬
國枝史郎　田村孝之介
藤村作　谷脇素文
藤本卯之助　篠田銀波樓
顏原退藏　安川久流美
赤井清司　前田雀郎
淺田一　前田五健

同人

食満南北　吉田水車
柴谷宰二郎　吉川啞人
岡丘龍遊三　奥野禿舟
篠原春雨　立井登美坊
蛭子省二　中西おさむ
藤里好古　中澤濁水
小林不涙人　芝四葉
森東魚　水谷鮎美
村松夢裡　三宮岡白峰
熊谷紅　輪夏曉
松下小柳子　永田里十九
平井春光　山本丹路
平井與三郎　阿部閑生
福田鶴峰　關本雅幽
姫田夕鐘　庄萬よし
朝田新水　橋本綠雨
日野華水　西田卿樂
東谷聞路　山本雨迷
廣田六浦　汀柳位
毛利九波　增人
須崎豆秋　麻生葭乃
妹尾變　福田山雨樓
首藤竹楓　住田亂耽
北山悟郎　笹田角丸
生田翠夢　同人主幹

編輯局（同人）

高橋かほる　春元紀太
永田里十九　秋春
高橋かほる　喜多春秋

幹事

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎　松山支部（松山市）幹事石丸晴朗
神戸支部（神戸市）幹事首藤竹楓　御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢
岡館支部（岡館市）幹事龜井晟修　天王寺支部（大阪市）幹事須崎豆秋
高知支部（高知市）幹事國澤春水　鶴町支部（大阪市）幹事宮岡白峯
梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美　御池橋支部（大阪市）幹事西いわを
螢ヶ池支部（大阪府）幹事福田浮鬼　松江支部（松江市）幹事梶谷二巷
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬　塗青支部（大阪市）幹事熊谷紅
籔川支部（島根縣）幹事尼綠之助　大鐵局々部（大阪市）幹事植山九天
京都支部（京都市）幹事平岩司郎　西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫
鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州　光耀會（大阪市）幹事竹內機見女
堺支部（堺市）幹事八木美夜路　住吉支部（大阪市）幹事奥野禿山
北濱支部（大阪市）幹事谷村稔
今里支部（大阪市）幹事市塲沒食子
八東支部（島根）幹事平塚亂笑
玉造支部（大阪市）幹事清水友帆
今治支部（今治）幹事渡邊曉童
光笑會（大阪市）幹事永田里十九
新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子
伯耆支部（鳥取）幹事三鴨美笑
竹原支部（廣島）幹事町田承春
籔川第二支部（島根縣）幹事尾添好郎
行人會（大阪市）幹事平井春光

川柳雜誌案内

大活活字十四字詰三行金五十錢、一行殖すごとに金十錢（但し節金切手代用可）改題、移轉、句會案内、柳寄廣告、その他

並製 **合本特賣**

「川柳雜誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**

大阪市内送料壹册六錢
市外送料壹册廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「新雪」 一月十日締切 路郎選

その他雜吟を募る

▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛 化粧新聞社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京豐島區高田本町二の一四六八（取次所）川柳雜誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌（川柳の雜誌以外）に掲載ある川柳に關する記事の「切拔」

▼川柳家の集合寫眞、個人寫眞

▼川柳の短册、色紙

右の品雜誌の編輯上必要に付御贈與下さい。

大阪市住吉區平野西之町八三 橋本綠雨

朝報柳壇

雜詠募集 汀柳選

用紙 ハガキ、句數無制限

大阪市西區四ッ橋南 大阪朝報社 增位汀柳宛

毎日川柳の事を掲せてゐる大阪朝報をお讀み下さい。

社告

本社の例會案内希望の方は左記へお知らせをお願ひします

東區道修町五ノ三四 會報係 毛利九波 電話本局一五六四番

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫喰本のことではない。古本が非衞生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

古本は

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

賀正

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

謹賀新年

平素の御無沙汰を謝し異郷の空より
遙かに柳友諸兄の御健闘を祈る
尙本年も倍舊の御指導あらん事を念じます

康德貳年元旦

滿洲國熱河省凌源小西街
カフエモダン
電話一二六番
岩崎柳路
岩崎松代

明けましておめでたう
存じます

本年も相變らずお引立ての程祈り上げます

大阪玉出驛西

喫茶
洋酒

キング喫茶店

年中無休

電話天下茶屋二五七九番

麻生霞乃

謹賀新年

兄 **平井春光**

弟 **平井與三郎**

大阪市大正區大正通六丁目

おめてたう

一月一日

食滿南北 あしや、陶泓居

住田亂耽 うなざき、摸打莊

賀正

日本最小最廉誌
（年五十錢）湯の村發行所

信州湯田中

柳風會

賀正

帆傘川柳社

高知市播磨屋町

月刊

帆傘

毎月一日發行
菊版三十餘頁
誌代一部十五錢

賀正

番傘川柳社

大阪市南區心齋橋筋二丁目をぐらやビル

賀正

舊冬から左記へ勤務してをります
相變らずの御風交を願ひます

塚越正光

婦女世界社編輯部
大阪市西區土佐堀船町十六番地
電話土佐堀三二〇八番
自宅 大阪市東成區片江町三三八ノ一六

恭賀新年

大島濤明

大連市西公園町川柳居平洞
電話自宅三七一三番
振替口座大連二五六五

賀正

川柳雜誌社

御旅吟社

大阪市東區粉川町五一番
電話東七五一六

生田翠夢
東區粉川町一六
(電東七五一五)

岩本素人
西淀川海老江上四丁目三
(電土二九二〇)

神戸正夫
東區十二軒町六
(電東二〇四三呼)

桑山清美
東區十二軒町二六 春元方

的場正明
東區農人橋詰町一七畑口方
(電東六九二)

近藤勇
東區十二軒町二六 春元方
(電東二二一、三八五八)

江戸みつる
東區粉川町一六 生田方
(電東七五一五)

川柳雜誌社神戸支部

（竹楓方）

賀　正

西村明珠　林田區七番町四五

眞田幸捐　神戸區再度筑九五

小原吉左右　湊區平野下三條町四一三

喜多春秋　兵庫區三川口町三丁目一〇八

八薩刀郎　神戸區中山手通七丁目一七七

首藤竹楫　葺合區野崎通二丁目三九

賀　正

川柳雜誌社　螢ケ池支部

石森静太
裕流之助
尾形眞砂夫
岡田公平
川部錦雀
龜井愚寵
武春太夫
田中のぼる
高田澄魚
名鹽松生
丸橋松雨
福田豆樂
福田縷紅
福田浮鬼
藤井一更
荒川六朗
佐藤青鬼

○

吉田蔦女
山本美智子
宮脇志世子

賀　正

川柳雜誌社今里支部

（イロハ順）

市塲汲食子　大阪市東成區大今里町三九五

西村山月　大阪市東成區深江町九八九

西木朴甫　大阪市東成區片江町四一八

地黄天國　大阪市天王寺區上ノ宮町十二　村田松華堂内

大鶴喜由　大阪市東成區大今里町四三二

吉田水車　大阪市東成區片江町四五三

賀正　南海電車
池澤樂居
大阪府高石町北六二六

賀正
山本雨迷
大阪市東淀川區中津濱通一丁目一〇二
電話北三八〇五

賀正
毛利九波
大阪市東區道修町五ノ三四吉田方

賀正
關本雅幽
大阪市住吉區駒川町七丁目十三

賀正
西田艸樂
大阪市東區元伊勢町昭和園

賀正　川柳雜誌社住吉支部
奥野禿山
大阪市住吉區住吉町一六四

賀正
中澤濁水
高知市本與力町

賀正
宮內耕朗
臺中市榮町一ノ二

賀正　川柳雜誌社鶴町支部
宮岡白峰
宮岡公子
大阪市大正區鶴町二丁目八八

賀正

渡邊虹衣

大阪市天王寺區上ノ宮町六一

賀正

大阪帝國大學醫學部

長崎柳秀

賀正

川柳雜誌社

西條支部

愛媛縣西條町新町

謹賀新年

新春の光を喜び迎へて皆様の
御健勝をお祈り申上ます

鳥居柳笑

大阪市南區東賑町一六

賀正

阿部閑生

大阪市外豐中
千歳通二丁目

賀正

山本丹路

大阪市住吉區帝塚山
中二丁目三八

賀正

朝鮮の柳誌

月刊

長鼓

金二十錢

見本郵券可

仁川府宮町二一

仁川川柳社

賀正

柳大門

大阪市東淀川區
十三東之町二四

賀正

武田玄六

東京市神田區東神田六ノ二
電話濱花一八七〇

忌中につき年賀欠禮致します

增位汀柳

大阪市天王寺區上汐町一丁目
電話南六四四・四二六九番

忌中につき年賀欠禮致します

橋本綠雨

大阪市住吉區平野西之町八三
電話天王寺一一六七番
振替大阪二九四五九番

喪中につき年始の禮を缺き申候

富士野鞍馬

東京市杉並區高圓寺
六ノ六八五

喪中につき年始の禮を缺き申候

高島玉兎朗

東京市日本橋區
蠣殼町四丁目一

忌中につき年賀欠禮致します

日野華水

神戸市中山手通
七丁目五四三

喪中につき年賀欠禮致します

渡邊曉童

今治市松本通一丁目

喪中につき欠禮仕り候

在間小樓

今治市南堀通二葉方

忌中につき年賀欠禮致します

福田山雨樓

大阪市浪速區湊町保線事務所
電話浅一〇〇三番

大阪市西區土佐堀船町一四

賀正

工藤清寫眞館

肥後橋南詰昭和通西南側
電話土佐堀五五五〇番

賀正　岡田某人
神戸市須磨區飛松町五丁目二十二番屋敷

賀正　川柳雜誌社大鐵局支部
植山九天
兵庫縣川邊郡小田村潮江堂の後西
電話北四七〇〇

賀正　川柳雜誌社鳥取支部
中島鐵洲
鳥取市川端町一丁目
電二八八番

賀正　阪崎串三
尼崎市西大物町五一

賀正　今村吉朗
尼崎市西大物町五一

賀正　前田五健
松山市眞砂町二一

賀正　福田鶴峰
大阪市天王寺區北河堀町六九

賀正　吉川啞人
山口縣久賀町
電話十四番

賀正　杉谷湖山
鳥取市職人町

賀正　平岩司郎
京都市嵐山天龍寺前

賀正　金泉萬樂
尼崎市東櫻木町四二

賀正　青木史呂
大阪市西成區鶴見橋通五ノ四

賀正　川柳雜誌社鍜川第二支部
高松吟社
同人一同

賀正　川柳雜誌社竹原支部千引吟社
町田承春
廣島縣竹原町

賀正　川柳雜誌社伯耆支部
三鴨美笑
鳥取縣西伯郡手間村

賀正　川柳雜誌社八東支部
廣江天痴人
島根縣八東郡乃木村乃木

賀正　川柳雜誌社光耀會
竹内機兒女
大阪市天王寺區勝山通リ三ノ四八

賀正　向井不路子
大阪府北河内郡住道村御田宗

川柳雜誌社篠川支部

賀正 尼 緑之助 島根縣今市町

賀正 須崎豆秋 大阪市住吉區旭町三丁目一四

賀正 東谷聞路 大阪市北區東堀川町三

賀正 高橋かほる 大阪市南區北炭屋町二〇一 電話南五九六番

賀正 森 立名 勤務先 大阪市東區安土町一丁目滿鐵 自宅 大阪府吹田町一四二八 電話吹田二二八番

賀正 石丸晴郎 松山支部川柳會 松山市大街通二ABC

賀正 安井ひろし 自宅 兵庫縣武庫郡魚崎町六〇六 中央經濟 大阪市北區絹笠町大江ビル二七〇號室

賀正 岡虹糸 龍三改號 大阪市北區曾根崎上一ノ八七 電話北七四六九番

賀正 明石柳次 京都市室町蛸藥師南 藤井商店内

賀正 加藤ライト 大阪市大正區 鶴橋通り一ノ一

賀正 妹尾變人 大阪府豐能郡箕面喜樂園

賀正 松下小柳子 大阪市大正區 三軒家二ノ六

川柳雜誌社今治支部

賀正 平井小松 今治市金星町

賀正 谷心府 今治市米屋町二丁目 今治相互貯蓄支局内

賀正 曾我部宵明 愛媛縣越智郡 櫻井町榮町

川柳雜誌社御池橋支部

賀正 村松夢裡 大阪市西成區 鶴見橋通一丁目一四

賀正 後藤青兒 大阪市東成區 南生野町二丁目三八

賀正 西いわを 大阪市住吉區 濱口町二九二

植木鬼佛著

隱語と用語

金貳拾錢（送料共）
郵券一割增

發行所　東京市澁谷區代々木上原一、一四〇
川柳文藝社

川柳募集

題「隱語讀込み何んでも」　呈賛表誌
用紙隨意　一人五句　鬼佛選
賞　三歲、紳士用銀環記念ステッキ、以下十秀迄
締切　一月末日
投句所　川柳文藝社

謹賀新年

喫茶
洋食
支那料理

大阪市南區櫓屋町六番地
カナメ
店主　永田賢次
號　里十九

謹賀新年

色紙、短冊の御用は
大阪市南區南心齋橋筋二ノ一
川柳雜誌社指定
書畫用品
風流雅品商　**和正堂**
小賣部　電話南二七五一番
替大阪九一七五番

賀

日本卓球界唯一の

わが卓球タイムスは大正十三年に創刊をしてより茲に第十年を迎へ日本卓球界に於て最も歴史あり、權威ある卓球人の書である事は今更申上る迄もありませんが、逐年逐號改善に努めまして全國に權威ある同人各地に支局を有してゐます

購讀料　一部　金十錢五

正

卓球研究專門雜誌

月刊雜誌　卓球タイムス

社長　增位山
會長　安貞
主宰　本彌一郎
古橋芳夫

「卓球タイムス」見本御入用の方は郵券三錢封入下記（御申込下さい

大阪市天王寺區上汐一丁目五一
卓球タイムス社
電話南六四四番
替替大阪四六九六〇番

大阪市西區靱北通二丁目一七
卓球タイムス社事務所
電話土佐堀二一八八番

一年分　金四拾錢
二年分　金一圓三十錢
四年分　金四圓
（送料共）

恭賀新年

弊社の特種設備

高速度式嶄新輪轉機の設備と活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にして新聞雑誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

社主　藤本卯之助

營業種目

新聞雑誌印刷
圖書出版引受
紙型鉛版活字製造販賣
各種製版印刷
其他附隨事業一切

「川柳雑誌」創刊以來の印刷所

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番・七七〇番
振替六、阪八二八四番

關西旅行協會主催團體募集

廻遊地

中山七里の	岐阜 下呂溫泉
新線の喜びの	高山スキー
北國情調の	芦原溫泉
雪の大本山	永平寺

行程

	日程	發着地		豫定時刻	記事
出發	11	大阪湊町	發	後 11.45	夜行
歸着	12	名古屋	着	前 6.27	車中朝食
			發	〃 6.52	
一月十四日夜（月曜）一月十一日夜（金曜）		岐阜	着	〃 7.34	市中見物
			發	〃 9.58	
		下呂	着	後 0.21	入湯及晝食
			發	〃 2.40	
	13	高山	着	〃 3.54	宿泊夜間見物
			發	前 11.01	翌午前原山スキー遊ビ
		富山	着	後 1.44	車中晝食
			發	〃 2.04	
		金津	着	〃 5.22	
			發	〃 5.48	
		芦原	着	〃 5.53	宿泊
			發	前 8.00	入湯・散歩
	14	永平寺	着	〃 9.30	風水害罹災者大施我鬼
			發	後 1.42	晝食
		金津	着	〃 2.40	
			發	〃 3.15	
		大阪梅田	着	〃 9.48	車中夕食會散

募集人員　100名

會費　15圓80錢（小人12圓）

【汽車・電車・宿泊料・辨當・スキー代・祝儀共】

申込金　3圓）

殘金ハ一月五日マデニ御拂込願ひます

高山のスキー！雪の永平寺！

◆本團の特色

▽經驗ある世話人數人添乘して出發より歸着まで御ゆるりと御旅行が願えます

▽十一月開通新線にて完全に下見檢査濟みですから旅館其他サービスの萬全を期します

▽鐵道省との連絡確實なれば列車中及發着のお世話が完備いたします

▽新春探雪旅行として最低料金最高意義を持つものであります

◆滿員の節は直に締切りますから可成早目に御申込願ひます

申込所　關西旅行協會事務所

道頓堀新戎橋

責任者　庄　健一（万よし）

電話南六六〇三番

賀正

池の邊の鶴羽叩いて飛ばんとす

庄　万よし

清酒

賀正

白鶴禮讃

白鶴の瓶たまることたまること
白鶴へみんな揃ふたいゝ話
いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
白鶴を一本つけてからの事
百事意の如く白鶴呑んでゐる
當選に白鶴樽のままで來る
貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘 嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便認可（毎月一回一日發行）

にきびとり美顔水

御家庭に常備せられたき

美容衛生藥

ニキビ吹出物に第一等の良藥である上に、日常美容藥としても勝れた効果があるので男女共に廣く賞用されてゐます

主なる用途

▲ニキビ吹出物の治療と豫防に
▲洗面後、入浴後、お顔剃り後等のお肌の保護と美に……
▲美容藥として常用に……
▲蚤・蚊・南京虫等の毒虫にさされた時に
▲脂肪性の方のお化粧下に……

定價
35センン
50センン
1エン

お德用な新裝品